

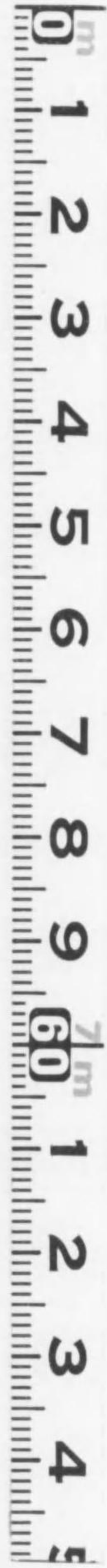
F13-Y73ウ



1200500764193

13

73



始

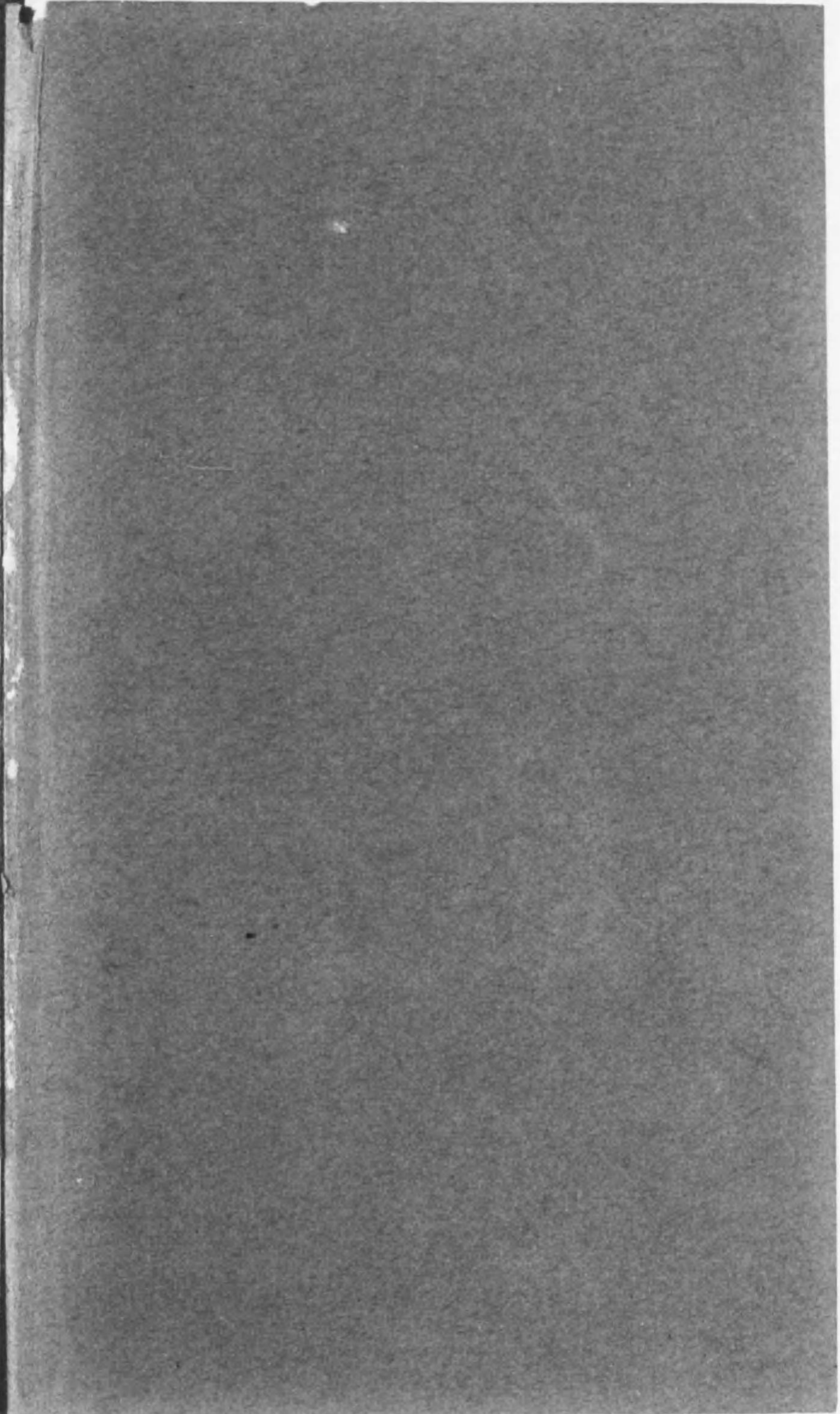


903
66

山村の人々



依田秋圃



326

F13
Y73



山村の令

依田秋圃





畫後不久
西曆一九
年秋
畫於



百穂

者著の日或

「山村の人々」は面白い作品である。面白いと言うたのでは言ひ盡すことが出来ぬ。貴い作品である。

著者が多年の山林生活が自ら産んだ貴い作品である。

著者の山に對する親しみは隨所に現はれて居る。處女林、伐木、雨、雪、霜、霧、馬、犬等、其等は皆情あるものとして著者の眼に映る。著者が山登りをする時には其等のものは絶えず有情の生物として著者の身邊を往來する。

同時に山に住む人々は如何になつかしいものであるか。

一軒の板葺の小屋、そこに住んでゐる夫婦者、山中の宿屋、山林に關係ある小役人の住居、山道の傍にある一軒の茶店の子供、こびきの生活、炭焼きの生活、山寺の小僧、老僧、其孫、其等各種の生活はどれも物哀れに著者の心を牽くのである。

其等山に住む人々の生活を描くことに於ては著者は今の文壇に他の追隨を許さぬであらう。中には小説が、つたものもないことはないが、多くは寫生文的で斷片的である。斷片

的であるとはいへ、やがて小説以上に人に迫るものがある。純真であつて力が強い。名文章といふを憚らぬ。

虚子

山村の人々 目次

序	山	旅	瑣	事	高	濱	虚	子
山と人とを想ひて	一	萩	太	郎	二	二	二	二
二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	二	二	二	二	二	二	二	二
三	二	二	二	二	二	二	二	二
四	二	二	二	二	二	二	二	二
四	二	二	二	二	二	二	二	二
五	二	二	二	二	二	二	二	二
五	二	二	二	二	二	二	二	二
六	二	二	二	二	二	二	二	二
六	二	二	二	二	二	二	二	二
七	二	二	二	二	二	二	二	二
七	二	二	二	二	二	二	二	二

八くらかりの蛭	………	(六)
九こたつ	………	(七)
大森林の冬の夜	………	(八〇)
山の移住者	………	(八六)
山小屋の二人	………	(九六)
瓜坊	………	(一四)
五郎助	………	(一三〇)
野猪の角力場	………	(一三三)
月下の登山	………	(一三七)
落栗の徑	………	(一三七)
山林争議	………	(一四九)
鮎	………	(一七三)

顔	………	(一九三)
親切	………	(一九七)
茶の味	………	(二〇一)
わたりのもの	………	(二〇九)
平泉村の女	………	(二三三)
古代劇	………	(二四三)
二軒目の家	………	(二六七)
林業技術者の感傷	………	(二九六)
彼と老いたる林業技術吏	………	(二九八)
後記	………	(三〇四)

山村の人々

山旅瑣事

矢作川の岸に在る小渡と云ふ村を立つて、足助に向つたのは三時頃であつた。其の日も朝から随分と暑かつた。そして正午ちかくなつてだいぶん雲がはびこり愈よ蒸しあつくなつた。私は、前日足助から小渡まで乗合自動車をやつてきた。昨夜はそこへ泊り用事も片づいたので、その日は四里の道を歩いて足助へ引き返さうとするのであつた。小渡といふ村へは今度始めて来たのである。矢作川を距て、對岸は美濃であつた。この邊の矢作川は、幅はまだ狭いのであるが、水は澄んで量も多く、流はかなり急で、涼しい音を立てて居た。

鮎は、ここを中心として盛に獲れるといふことで、昨日も今日も、川のところどころの岩角や磯に立つて釣師が四五人、長い竿をしきりに動かして居るのが見えた。それらの釣師の中には腰から下を水に浸けて立つてあちこちと川を涉つて釣つてゐるものもあつた。私は

其の釣師の居る川を見下しながら幅のひろい街道をのぼつて行つた。雨に飢ゑた白い路の
両側には、草が疲れた葉を垂れて居た。

私はたちまち汗をかいて帽子を脱ぎ手に持つてのぼつた。どういふわけか、此の街道は
人馬の往來が稀れであつた。近い舊道でもあつて、其の方を通るのかも知れない。此の街
道は木立の間、桑畑の間を、だら／＼と上つたりくだつたりして歩きよい道であつた。凡
そ二里許り來た頃には空はすつかり曇つて、怪しい黒雲がひどく垂れさがつてきた。足の
早い私はしばしば途中で人を追ひ越した。今にも落ちてきさうな雨を氣づかつて私の足は
常よりも更に早かつた。

道の兩側ながら杉の林となつて暗いさびしい處へさしかかり、小さい板橋を渡つた。そ
こに一人の娘が、道ばたの石に腰をかけて休んでゐた。私はその娘の前を歩き過ぎやうと
する時、その娘は私に物を言ひかけた。

「あの、こゝから足助まで、まだ餘程ございますでせうか」

「さうね、もう一里半位だらう」

私は斯く答へて足を止めた。娘は秀れた佳い顔立であつた。年は十七八で極くおとなし

やかな扮装や様子である。どう見てもまじめな農家の者に相違なかつた。大きいバスケッ
トと四角張つた風呂敷包が、其の足もとに置いてあつた。

「足助まで行くの？」

「えゝ。…自動車に乗れと教へて貰ひましたけど、時間を知らなかつたので乗りおく
れてしまひました」

娘は小聲で斯う言つてうつむいた。それは妙にたよりない淋しい姿に見えた。

「もう、こゝから大したことはない、日の暮れないうちに着くからね」

私は空を仰いで又歩き出した。すると娘も亦荷物を手にして私のあとに續いて來た。人
通りの少いこの道を、馴れぬひとり旅の娘は、私に隨つて行きたいと思ふのであらう。私
はそれを察したから、一緒に道連れになつてやつても好いと考へたものの、其の日夕飯時に
足助で面會する筈の用件の人との約束を守るためには、凡そ今までの歩調で以て道を急が
ぬと宿屋へ着いて入浴も出來ないことになる。私は娘のことを打ち捨て、どし／＼歩い
た。始めのうち娘も私の足に倣つて遅れまいと努めて居るらしかつたが、それはとても出
來ないこととあきらめたと見えて、二人の距離は程なく遠くなつてしまつた。大きく曲る

道の角へ来たとき振り返へつて見ると、娘はまだ林の盡きない邊を歩いてゐて、荷物を肩に掛けた姿が木の間にちら／＼と見えた。

そこから四五丁くると、道路を横断して太い繩が張られ高札が立つて居た。それにはここより八丁の間道路修繕の爲め往來止に付き谷に沿ひて小道を行くべしといふ意味が書いてある。私は右へだら／＼と本街道から下りて谷に沿ふ小道に出た。今日此の街道を、一向荷馬車も駄馬も通行せぬのを不審に思つて居たが、ここに斯う云ふ往來止めがあるためであつたと、其の理由が始めて判つた。それで石や木の根の出つ張つてゐる歩き憎い路を踏んで五六丁來ると、その細い路は、上の方の本街道と一つに合した。

そこに七八人の土工が、石垣に積む石を運ぶために群らがつて働いて居た。まるで喧嘩のやうなすさまじい大聲で嘯鳴りながら仕事をして居る。蒸し暑い谷間で疲れた彼等は、半分自棄になつてお互に罵り交して元氣を無理に鼓舞してゐるのであらう。私は、それらの土工の群の間を通つて本街道へ出た。——その時、私のうしろから、土工の一人が嘎れた聲で、突然に斯うわめいた。

「馬鹿ツ。何とか言つて通れツ」

勿論、これは私に對して云つた罵詈雑言である。私は思はず振りむいた。

「よせやい。そんな泥鰌髻ドロカマに構つたつて仕様がねえや。……その代り、もし、赤い腰巻でも通つたら、皆總がかりでお客様にしてやるんだ」

「へッ。赤い腰巻が聞いて呆れら、今日は婆ア一人だつて通りヤアしねえ、へッ」

「あははは」

「あははは」

眞黒な顔。白い眼玉。血走つた眼玉。獸のやうな大きな口。古手拭の頬かむり。破れた麥稈帽子。汚いシャツ。猿股。……

私は、苦笑しながら、さつさつと行き過ぎた。すると後ろから、何やら口を揃へて又罵り、そして一齊に高い嘲笑を上げた。私はそれを聞くとむか／＼と腹が立つた。顔に血が上るのを感じた。が、どうにも仕様のない相手だから、頬をゆがめて之を堪へた。……一丁二丁、私の立腹は尙靜まらない。そのうちに私は、はつとした。——それは、私のあとから來る彼の美しいたよりなげな娘のことを、ふと思ひ浮べたからである。

私との距離は、もう三四丁ではきかぬであらう。然しそれでも、本街道から折れて、今

頃は谷の小路を歩いて居るに相違ない。まさか、けものやうな土工達でも、今時、あの娘を手ごめにするなどいふことはないであらう。けれども、ああいふ無頼な、自棄な奴らのことであるし、殊に今大聲上げて婦人の通行を待ち構へてゐると放言した處である。あのおとなしい頼りなげな美しい娘が唯ひとり彼等の群の中を通る時、決してその儘に打ち捨て、置く筈はない。口先で押揃ふ位な、生マぬるいことで辛抱する筈はない。——私は、足を止めて今来た方を顧みた。然しこゝからは既に道が迂折して土工の居るところはまるで見ることが出来ない。私は兎に角、あの娘の安否を知るために——あの娘を護つてやるために、引つ返へさうかとまで考へた。

が、それも決し切らず躊躇して向を見て居ると、雨がばら／＼と降つて来た。あゝ、とうとう降り出したと思ふ間もなく、山中に有り勝ちな猛烈な驟雨がすさまじい音を木々の葉に響かせて襲ひかかった。私は持つて居た洋傘をひろげたが、傘などは物の役にも立たない。私はどこか雨宿りをするところはないかと近所を見廻した。すると一丁程向ふに一軒の小家があつた。すぐ道の下にも萱屋根が見えたが、それは水車小屋で軒が浅い。私は一丁向ふの小家を目がけて一散に馳け出した。——薄情にも、腕力の弱い私は、驟雨に乗じ

て、義侠の心をたちまちに擲つてしまつたのである。

私の馳け込んだ家は、駄菓子、ラムネなどを賣る店であつた。私は上着を脱ぎ流れる汗を拭いた。そして又すぐ娘のことを思つた。

土工の群に取圍まれて、此の急雨に濡れて居る女を思ふことは、かなりの不安であつた。軒からは瀧のやうに雨垂れが落ちる。白く乾いた土も見る間に泥となつて草木が雨に揺れてゐる。道路には一人の人影もない。——誰れか今こゝを通過して向ふの方へ、土工等の居る方へ行く人はないか。成るべく屈強な男が二人連位でこゝを今通つて呉れば好い。

——私はそんなことを娘の安危のために思ひなどした。

雨が少し減じたと思ふと、突然さつと電光が走つた。まだ暮れぬうちの強い白光は一段と悽愴であつた。續いて恐ろしい雷鳴がとどろいた。

私は愈々やるせない思ひで、街道の向を一心に眺めて居た。

『もし、お客さま。そこは雨のしぶきで濡れるからこちらへおはいりなさいませよ』と茶店の婆さんは、軒さきに立つて居る私に注意した。

其の時、街道の向ふの曲り角から、荷物を肩にして、洋傘を斜に、尻端折りの赤い腰巻

を出した娘の姿が私の眼に映つた。——私は思はず、ほつと息を付いて、
『なアんだ。何でもなかつた』
と、店先に駄菓子を入れてある箱のわきへどつかりと腰をかけた。

山と人とを想ひて

一 萩太郎

約束はしたが此の降りでは困つたものだ、今日一日は宿屋に籠城かとS君と話してゐる
矢先へ、どやどやと高聲に話しながら支度を整へた村長や其の係の人達が三四人店先へや
つてきた。「どうも此の雨では山へ行つた所が到底霧や雲で見えないだらう」と私は中止
したい旨を話したが外套や簑笠に堂々たる雨装束をしてきた一同は仲々中止説に耳を藉さ
ない。「どうせ梅雨中だから仕方がないでせう。なアにさう雲だつて懸り切りでもないか
ら行つてきませう」と泥まみれになつた草鞋の足を入口の土にびた／＼鳴らして山のぼり
を勧める。「では今日行つて好く見えなかつたら——必要があつたら又登ることにして行
くでしょう」となつて、大いそぎで支度をする。

私もS君も雨蓑あまこぎを着て洋傘かうもをさした。村長の佐々木君は大の酒呑みだから、もう大分ご機嫌である。霧の深い山へ行くには一杯やつてゆくが好いなど、今朝ひつかけたのであらう。山に一番詳しい村會議員の某君が今日の先達せんたと云ふ格、宿屋の主人も我々の辨當と佐々木君の所謂お茶の壘詰うゑぢめを背負つてついて行く。

降る／＼、小止みなく降る雨の中を登り坂をのぼりきるまでに、何度も空を仰いだ。雲は一向うすらぎさうにもない。坂へかかる少し前に又二三人同勢が増した。一里程村の家から来たところに峠の茶店がある。此の峠は折元峠と呼んでもう少し行つたところが信州と三州との國境になつてゐる。峠は矢作川と天龍川の分水嶺になつてゐるのである。峠の茶店に立ち寄ると圍爐ゐろに火を焚いて四五人あつてゐる。時は六月だが雨中と云ひ地盤の高いところだから仲々寒い。我等の一行がはひり込んだので先に憩んでゐた人達は爐から離れて、佐々木君初め村の人々と高聲で話し合ひ出した。茶店の前には街道を距て、向側にこの店の納屋が建つてをり、納屋の隣が板材や炭灰などの貨物の置場になつて、粗末な板屋根が葺いてある。其の屋根の下に駄馬が五六頭つながれてゐる。馬は飼秣かひばを食つてゐるのもあるし、鼻の先から口へかけて綱をかぶせられてボンヤリ立つてゐるのもあつ

た。一體此の邊では殆ど牝馬ばかりで、一人が五六頭位づゝ連れて荷を運ぶので、別段手綱を曳くでもなく、馬は一頭づゝ勝手にのそり／＼大抵一間位づゝ間隔を置いて行列を作つて歩いてくる。人間が一番先登なり又は一番後うしろなりに付いて之ものそり／＼歩いてくるのである。甚しいのになると馬ばかりで人が居ないこともある。馬だけで行儀好く列を作つて背に炭灰なり材木なりを負つて歩いてくる。尤も之は人間は飛んでもない一丁も後で他の人間同志立ち話しをしてゐたり峠などの茶店で立ち食ひをしてゐるうちに、馬だけがお構ひなしにさつさと先へ歩き出したのである。斯う云ふ風な駄馬だから従つて道草を食ふのを禦ぐために背口に縄で編んだ綱が覆せてある、口は開けずするから音無しい牝馬達は人間の女共が寄り集つたときのやうに他の悪口を云ふのでもなく黙々として、のそり／＼やつて行くのである。さうして草臥れると立ち止つて一寸息を入れ、好い加減休むと又自分でのそりのそりと歩み出す。のそり／＼といふ形容は少しく牛の歩みに似通ふかも知れないが、實際山家の牝馬は脚の音こそほこり／＼云ふけれど其の歩き振りは、のそりのそりと書くより外適當な形容があるまい。——この馬の歩みに就いて面白いことがある。それは「馬尺うまじやく」といふことで、急坂などの狭い路になると馬の蹄の跡が土に窪み込んで

あるが其の窪みはどの馬もどの馬も皆一つ窪みへと蹄を入れて行くので、丁度さういふ路へくると馬蹄で階段が土に刻まれてゐる。斯く窪みと次の窪みとの距離が一定してゐるのを名付けて「馬尺」と呼ぶのださうだ。斯う云ふ坂路などでは人間も馬尺を踏んで馬造の階段を登るなり下るなりして行くのが一番歩き好いのである。

さて折元峠の茶店で休憩してゐる中に雨は小降りになることか却つて益々どしや降りになつてきた。高い連山から濃霧が下りてきて茶店の軒から薄暗い圍爐の方へ流れ込むのが目に見える程である。此の霧を悠然たる態度で見ながら佐々木君はじめ山案内の人達は一杯又一杯やつて容易には立ちさうもない。私とS君とは硝子箱の中から大きな餅を掴み出して頬張つた。砂だか埃だかちや、り、り、する苦い味の餡が中に入れてあつた。

その中に一同も立ち上がつて「ヤア、之は仲々酷い雨だ」など云ひながら茶店を出かける。見ると材木を付けた馬は先刻よりも三四頭増えてそれが皆向うの板置場の中に寒むさうにかたまつて居た。

茶店を出て行くと右手は檜原山と云ふ大きい山で、之は榎栗檜花柏樹などいふ樹木の鬱蒼と茂つた御料林である。佐々木君は大聲で御料林の木材が、どうかしてどうかとなつ

たといふことを例の鼻に懸る高調子に喚き立てゝゐる。雨が酷いので皆好い加減に佐々木君に賛意を表してゐると佐々木君は愈々得意になつて鼻聲を一層張り上げる。茶店でやつた酒が大分廻つてきたと見える。其のうちには街道から左へ山運にかゝる。山運は細くて纒かに一人が歩けるに過ぎない。だんだんに登つてゆく、二十丁もくると樹木は見えなくなつて全く運の両側とも草山となつた。尤も此の秋太郎へ登るのは之が二度目で、この前に来たときも矢張り佐々木村長と同行して、谿間の無人小屋で中食の握り飯を嚼じつたことがある。

今日は霧が下りてゐるので少しも近所が見えない。先導役の某君の背の簑と、簑の下から見える汚くよごれた股引とを飽かず眺めながらびちや、や、と粘土を捏ね返して登つてゆく、それが稍もすると滑つて轉びさうになるので仲々油断しては歩けない。それでも佐々木君が絶えず大聲で話しかけるから之に返辭をして登つて行くので、うっかりすると足を掬はれさうになる。

彼此一里半も登つた頃には、もう霧が深く四邊を閉して全然見えなくなつた。私も山歩きを職務として居たから随分霧にも出會したが此の時程の濃霧は嘗て覺えがたい。前に歩

いて行く某君の篋も股引も少し油断すると見えなくなる。後を振り向いて見ると自分から二人目にゐる人などは全く見えない。それで間隔は僅か一間半とは距たつてゐないのである。「どうも之は酷い霧だぞい」と誰れやらが云つた。「えらい、どうも酷い」と皆が呆れたやうな聲を出す。「少し休んで行かアブ。道を迷ふとこまるぞん」と先頭の某君が命令するやうに云つて立ち止つた。「それが好い」「さうせえく」と皆が途方に暮れた聲を出す。一同一つ所へ立ち寄つて團つた。雨は殆ど止んでゐる。「こゝほどの邊か、まだ頂上には餘程あるかね」と訊いて見ると先頭の某君の聲で——此の時は一層霧が深くなつて自分の脚元さへ辛うじて見えるのみになつたから誰れが何處にゐるか皆目判らない。「こゝは頂上です」「これじやア何にも調べて頂く譯にゆかない、仕方がない下りよう、案内してお呉れ」と佐々木君の大聲が聞える。「村長さま、路も何もこれでは判らアブか」「さうかア困つたな」一同は凡そ五分間ばかり茫然として立つてゐた。思ふに此の五分間の茫然たる一行の顔付は随分珍妙な個性を發揮して居たことであらう。

そのうちに少し明るくなつた。「よし、判つた、こちらへ来て下さい」と某君が云ふ。見ると某君の背中がぼんやり目に見えた。やがて佐々木君もS君も現れてきた。五六間向

ふに樺の木らしい梢がニユツと出た。して見ると立つてゐた場所は山腹の斜面に近い頂上の一角であつたらしい。一同は草を踏んで歩るき出した。此の萩太郎といふのは信三國境にある三千五百尺ばかりの山で古來入會山であつたから長い間の山焼きで木は殆どない。只谿間にところ／＼樺や栗や榎が立つてゐる。萩太郎を一に萩垂山とも書く。

少し霧が薄らいだので目的の或る山腹へ廻つて視察することになつた。一同は其の方角へ歩るき出した。歩るき出して一丁来ない頃又濃い霧が懸つた。ひよいと見ると私の目前に例の荷をつけた馬が立つてゐる。馬と危険く鉢合せを仕損つた私は驚いたが、先方は知らん顔して立つてゐる。霧が深いので馬も詮方なく立ち止つて明るくなるのを待ち合してゐると見える。一匹居るとすれば必ず他に三匹や四匹は連がるだらうし又人も近所にゐるだらうと思つてゐると、「おい馬だく。誰れか人が居るかア」と佐々木君が呶鳴つた。「おい、おい、こゝに居るぞい」と少し離れた方角で聲がする。「大丈夫か、馬は。い、か」と誰れやらが又呶鳴る。

その中に又霧が薄らいだ、成程馬は三匹程其の邊にゐた、人もボンヤリした顔をして出てきた。村長佐々木君を見ると其のボンヤリした顔の人は丁寧にお辭儀をした。「今日は

大したこともあるまいと思つて出てきましたに、「ハイ」など云つてゐる。一同は坂路を下り始めた。草が茂つてゐる爲め洋服はズボンは勿論上着も殆ど濡鼠になつた。滑るまい／＼で一通りの苦心ではない。ここで馬尺を踏んでくだるのだが時々蹄が深くそれに泥が溜つて足袋がぶぶ／＼になつた。彼是するうちに谷へ着いた。霧も大方霽れ雨も止んだ。すこしは近くの山腹が見え出した。此の谷の水を利用して製板所が一つあるのでそこへ行つて茶を貰つて中食をやると云ふことになつた。行つて見ると小屋は今日は休みと見えて人が居ない。此の降りのなかを何處へ遊びに行つたかと可笑しくもなつた。「この少し上に櫓引の小屋が有る筈だからそこへ行くことにせまいか」と誰やらが云つたので、一同は川に沿つて登る。この道は木材で軌道——極く簡単な只木切れを並べただけの軌道が敷いてある。この軌道の上を木馬と呼ぶ木材運搬用の櫓が通るのである。で道は割合に好く造つてある。

少し歩くうちに、板葺の小さい小屋の前へきた。製板の屑板を寄せ集めて雨露しのぎをしてあるだけの山小屋であつた。萬葉集の金野乃美草刈葺屋杼禮里之兔道乃宮子能借五百歳所念といふ歌は私の大好きな歌であるが、その昔の假庵にも如かじと思ふ假庵の様であ

つた。假庵は二軒隣り合つて同じやうな形に葺かれてゐる。

一同はどや／＼と空腹を抱へて此の假庵を訪れた。此の時私は今日の一行の何人であるかを算へたら九人であつた。此の九人の半ば程が兎も角も中へはひれたのだから其の小屋もさ程狭くはないやうだが、實際疊なら四枚を敷き兼ねる位で、而もその一部分は土間と圍爐で板敷の上に荒席の敷いてあるのは僅か二疊程であつた。一同はその土間にも圍爐にもし押合つてはひつた。このとき雨が又降り出したので外に溢れてゐた人々も押し込むやうに中に屈り入つた。

小屋の前に立つたとき某君が「頼むに湯をお呉れ、中食をやるだ」と云つたら中から「やア……汚ねえとこだが、おはひりとお呉れん」と答へたのが小屋の主人であつた。四十前後の頑丈な男で圍爐の向に女の兒の三歳ばかりのを膝に抱いてゐた。私は官員様だといふので板敷の席の上へ腰を下した。辨當を背負つてきた宿屋の主人は桐油を外づして中から風呂敷包を出した。包の中には我々の辨當だの鍼力藥罐だのが入れてあつた。その藥罐で茶を沸かしにかゝる。一行は煙草をのむやら、草鞋の紐を結び代へるやら賑かであつた。私は小屋の中を眺める。小屋の中は煤びて眞つ黒になつてゐるから、之は昨日今日建てた

ものではないらしい。板ばかりで作つたのだと思つてゐたが好く見ると山の萱を刈つて壁の様に板へ内側から隙間なく當てゝある、寒い風を禦ぐには斯うしなければならぬ。男の抱いてゐた女の兒は一行の大聲を出して入り込んで来たのに恐れて顔を父の膝に俯伏せ、た儘少しも上げないで居る。其の側にもう一人五歳程の女の兒がゐる、姉であらう、之は少しおどくしながら父の身に固く寄り添つて我々の爲す様を不思議さうに眺めてゐる。

「子は二人かん」と村長さんが物優しく訊いた。佐々木君の酒は霧の寒さで、もう殆ど醒め果てたらしい。酒の氣のない時の佐々木君は物靜かな優しい話聲である。

「はい。二人だ」と男は答へる。「此の谷には隣りと二軒切りかね」ときく。「はい、二軒きりでさ」「極引は近頃休みかい」「いや休みぢやありません。今日は雨で仕方がありません」と、男は圍爐の隅に燃えてゐる柵火をつゝく。「こゝは矢張り津具(地名)の中かのん」と佐々木君が横を向いて尋ねる。「こゝは津具です。この水流れの向うが信州ですよ」と誰か答へる。「はい參州の地でさ」と小屋の主人も云つた。「あゝさう云へば此所かい、此の間、子が生れたつて云ふなア」と某君が云ふ。「はい、隣の小屋で生れました」「丈夫かい。」「はい、健康でさ」と男が答へる。して見ると此の假庵で出産があつた

と見える。私は身に沁みる或る思ひに動かされて隣の小屋の物の氣勢に耳を聳てる。すると何やら女の聲で賑かに話し合つてゐるのが聞えた。この小屋の女房が隣へ行つて話してゐるのであらうと想像した。

茶が沸いたので一同飯を食ひにかゝる。こゝでも佐々木君は御持參の場一杯やるのかと思つたら、直ぐムシヤムシヤ食ひ出してゐる。私とS君とは腹が空いてゐて旨い／＼と云ひながら頬張つた。私は飯を食ひながら、ふとポケットに先刻折元峠で買つた餠餅の残りか幾つか有ることを思ひ出した。それを取り出して見ると包んだ新聞紙の袋はジメ／＼濡れてゐる。餅は三つあつた。それを二人の女の兒に遣らうとすると姉の方はぶいと忌な顔をして父親の方へ向いてしまつた。妹の方は俯伏してゐた顔を少し上げて私の方を見てゐたが、之も妙な眼をして睨らむやうな風をした。私は少々照れた。すると父親は大に恐縮して丁寧にも何度もお辭儀をしてそれを黒い大きな掌に受け取つて二三遍捧げるやうな手付をして「ありがたうございます」と云つた。そしてそれを一つづゝ二人にやると、姉も妹も今度は受け取つて直ぐムシヤ／＼食べてしまつた。

中食をすまして又煙草を咬へる。天井の低い狭い小屋の中は柵の煙や煙草の煙で濛々と

してゐる。濛々とした中に私は妙な物を見出した。

それは縄で天井から吊るさけてある黒い房のやうなものである。「あれは何だね」と尋ねて見る。「あれかね、あれは紫藤でさ」と答へた。何んでもない物であつた。「此の邊では食ふ物に困るだらう」と訊く。「はい。何も有りません」「冬は兎が捕れるだらう、川には鮫あひが居るだらう」「そんなものを捕つてる暇がないのでし」と男が答へる。「君は何處から来てゐるね」「私かね。私は海老えびの在まゐでさ」といふ。海老と云ふのは隣郡の一寸した山中の小驛である。

一行は支度を整へて小屋を出る。佐々木君が幾らか紙に包んで男に遣る。男は受け取らぬと云ふ。それを無理に受け取らしてお邪魔をしたと云つてどやどやこの小屋をくぐり出る。小屋の外は雲のためか大層妙に明るくなつてゐた。雨は又やんで霧は高く昇つて行く。小屋の前は五六坪、平地になつて、其の向うは山の一部に續いてゐる。山の裾と此の平地の間に一間餘りの幅ある小谿が水音を立て、走つてゐる。平地の上の野天のてんに風呂桶が置いてあつて燃えさしの木片など散らばつて雨に濡れてゐるのが、妙に物淋しく哀れに見えた。

賑かに話しながら九人連の一行の立ち去るのを見送つて、隣の小屋の前に二人の女が立つてゐる。二人とも髪はそれでも銀杏返しに結つてゐた。

二 處女林

一と口に森林と云つても人の手に植ゑられた森林と天然の森林とは、其の景觀も之に對して受ける感じも大いに趣の異なるものである。

同じやうな高さや同じやうな葉の樹木が一團をなしてゐる人工林には整齊の美はある。殊に其の正しい列に植ゑ付けられた樹木の幹を見通して眺める時、高處に立つて樹冠の茂りの同じやうなのが縦横に規則的に排列されてゐるのを見下した時、それはいかにも整然として綺麗である。が、併し、それは到底感興と印象とに於て天然林の雜然たる林相——専門學で森林の外觀のことを「林相」と云ふ——に及ばない。私のこゝに云ふ天然林とは、平坦部や海岸や又は地味の好くない山に生えてゐる黒松赤松などの天然林に就いて謂ふのではない。畢竟潤葉樹と針葉樹との混交して生茂してゐる森林、もう少し詮じ來れば處女林のことを指すのである。「處女林」と云ふのも専門家の用語で一寸思ひ付きの好い言葉で

ある。斧鉞未だ入らざる森林、山岳に草木生じて以來嘗て丁々たる斧の音を聞いたことのない森林のことを處女林と呼んでゐる。此の語は心地好い且つ最も適切なものと思ふ。之に比するなら人工林は成女林に當る。人工林は根が經濟觀念によつて人間が資本を入れて作り上げた森林であるから外觀も生眞面目である。處女林に對しての感興なり印象なりと別趣なるは當然である。

處女林の林相は其の山岳の位置及び海面からの高さなどによつて一様でない。寒、溫、暖、熱の各帯に順つて樹木の種類が異つてゐる。樹木の種類が異ると共に其の樹木一本一本から生じる感興や森林としての印象は各帯おのづから別様である。併しながら各帯を通じて處女林の崇高なる點は其の天然在りの儘の景觀にある。又愛すべき點は雜然として千樹萬木が何の意味もなしに無雜作に混生してゐるところにある。

樹木は其の種類によつて幹の眞直なものあれば、曲折して面白い舞踊の態をなしてゐるものもある。樹の膚も其の精疎其の色澤が個々特有である。葉の形も茂り方も甲樹には甲樹の長があつて乙樹の妙と紛ざるゝを許さない。春の發芽の時、若葉の時、夏の青葉の時、秋の黄葉紅葉、さては冬の朽葉の時、其の色彩の異別など實に千態萬樣具さに觀來るに従

つて限りなき味がある。この限りなき味ある千態萬樣の樹木が渾然として一の美觀を形成してゐるのが「處女林」である。森林の眞の美しさは處女林に在るといふ私の説明は何人も是非肯定して貰ひたいものである。

然るに此の處女林は今極く僅かになつた。僅かになつたのは世の中が開けてセチ辛くなると共に當然さうあるべきことで、此の先きも益々減じてゆく。尤も高山や不便な深山地方には随分廣い區域に互つて現存してはゐる。併し普通人眼に觸れ易き地方からは漸次奥へくと追ひ込まれてゆく。之は世界何れの國も同じだが、日本には神社の周圍に風致のため保存された森林に此の處女林の面影を偲ぶべきものが往々にして残つてゐる。

處女林と謂ふと、私は直ぐ鴨山の御料林を思ひ出す——この文章を書きながらも絶えず鴨山の天然林の有様を目に浮べてゐる。鴨山は私にとつて森林の美しさを最も明快に示してくれた山であつた。

鴨山といふのは三河北設樂郡の凡そ中央にある山の名である。山は別段高いといふ方ではないが、それでも地盤が相當高いところにあるのだから海拔にすると二千七百尺ある。面積は二百八十町歩程。御料林として保管される以前は幕府の御林であつたから斧鉞は全

く入ることを禁じられてゐた。地味は良し保護が完全であるから、温帯と暖帯との境目にある樹木の種類も豊富で、實に立派な處女林であつた。で、この處女林は大事の箱入娘として、洋剣をつる下げた嚴めしい御料局の役人達の手によつて保管されてゐた。それを鴨山の所在する郡の財産を造るといふ目的で伐り出して其の跡へ杉や扁柏の苗を植ゑ込む計劃が出来上つた。伐り出すのは郡の目的でなくて樹を植ゑて仕立てるのが目的である。

そこで十年を期して二百八十町歩の森林を一方から伐りはじめた。斧斤が入るところではない、水力應用の器械挽の丸鋸や縦鋸がぶう／＼びい／＼すさまじい響を立て、其處此處の谿間で伐つた木を板にこなし出した。漁樵問答などいふ墨繪にあるやうな仙人じみた木樵の爺さんも少しは交じつてゐたが、多くは古ズボンにメリヤスのシャツを着けて、汚らしい烏打帽子などを被つた製材人夫が、喇叭節か何かの鼻唄で、伐るわ伐るわ、挽くわ挽くわ、今では二百八十町歩跡方もなく伐り盡した。其の跡は杉扁柏が眞黒に——青いとか緑とかいふのは成長の好い森林の色ではない、黒ずんで見えるのが實際の感じである——生ひ茂つてゐる。鴨山も今は一人前の妻君になつてしまつたのである。

私が鴨山に初めて出かけたのは、事業開始後二年目の冬であつた。その後も、四五たび

行つた。

鴨山の造林事務所は或る大きな谿の水源に當る山腹の南向きの岨に建つてゐた。室が四間ほどある板造りの家屋で材木を惜しげもなく用ひた——質素な小屋である。

始めて鴨山へ登つたのは十二月中旬で、縣道の或る店で錫を買つた。造林事務所へ土産にしようと思つたからである。それを風呂敷に入れて外の包と一つにして洋傘へ通し、その傘をかついで山逕へかゝつた。寒い風の吹く目で、そこらの柿の曲りくねつた空枝が鳴つてゐた。急な峠を二つばかり越えて二里程くると杉扁柏の造林地に入つた。縣道から山逕に入つて以來人家はなかつた。

造林地を少し行くと小屋が見える。小屋の前に三本ばかり極めて丈けの高い赤松が立つて居るのが先づ目に着いた。松の枝は其の高い頂端に形よく葉をつけてゐる。附近は植ゑて二年目位の苗山であるから、此の松の七八十尺もある蠢乎した姿が何とも云へず立派に見えた。伐木の折に残された天然林の赤松だなど直ぐ心付いた。

急に犬が吠え出した。見ると赤い犬が小屋の方から私を目懸けて一散に走つてくる。走りながら吠える。私はこんな山の中の犬だから無鐵砲に咬ひ付くかも知れぬと怯氣付いて

口笛を吹いた。「おい。よつ。よつ」と太い銅羅聲を上げて小屋の側から人が出て来た。私を見て怪訝な風をしてゐる。私の方では其の人が事務所の主任O君であることが直ぐ知れた。それで安心して小屋へ近づいた。

O君は私の来たことを大に喜んで呉れて、犬を叱り飛ばしながらそれ洗足の湯を汲めの座敷へ火を入れるのと妻君に命じる。よつと呼ばれた犬は逞ましい純粹の和犬であるが、耳をニュツと立てたまゝ主公の足元に控へて、私にまだ好感を有してゐない素振りであつた。

足を洗つて座敷へ上ると炬燵が出来て、火鉢には鐵瓶が掛けてある。私が座敷にすわると直にO君が五分心の洋燈を天井から炬燵の眞上に下げた。外が急に暗くなつて山氣が寒く身に迫るやうに覺えた。座敷の壁は總べて板壁であつた。床の間には品川彌二郎さんの歌の軸が掛けてある。押入の上の額は田中芳男さんの書である。いづれも北設樂郡有林の爲にとして山林に關することが書いてあつた。

O君が「どうぞ湯におはひり下さい」と云ふ。私は山中の小屋の湯に入る嬉しさに大急ぎで洋服を脱いで臺所の側の風呂桶にやつてきた。O君が湯の加減はどうですかと云ふか

ら、少し熱いと云ふとO君は風呂桶のすぐ上の小窓に出てゐる竹の懸樋の端を手で右へ寄せた。すると竹の口から冷たい水が勢よく風呂桶へ落ち込んでくる。「うまい仕掛けですね」と私は感嘆する。懸樋は山から来る清水を平時は屋外の小池へ落とし、必要のある時は右へ風呂桶、左へ炊事用の水桶に落ち入るやうに、懸樋の端を動かすだけで出来るやうに仕掛けてあるのださうだ。私は風呂桶の中に突つ立つて、小窓から其の仕懸けを見ようとしたが外はもう日が暮れてゐて判らない。懸樋を向うへやると成程水の池へ落ちる音がチャポ／＼と冷たさうに聞える。

湯に茹つて座敷へくる。O君も湯をすませて二人で夕食の膳をかこむ。O君は男盛りの年輩であるが額が廣いのと願に長い髯が生えてゐるから一寸老人めいてゐる。鴨山の林業の忙しい外仕事に日々追はれてゐるO君の顔は冬でも日に灼けて黒くなつてゐる。O君も私も好い氣持に酔つぱらつてしまつた。

翌日二人で山廻りをする。霜が雪のやうに結んで身を切るやうな寒さであつた。O君は造林地や苗圃を先に案内してそれから天然林の方へ登つて行つた。愛犬のよつはお伴をしてゐる。O君は獵銃を肩から負つて時々口笛を鳴らしてよつと連絡を取つて行く。「山の

中でご馳走が出来ませんから、今日は一つ何か大きいのを捕つてかへりたいものです」と
O君が云ふ。「この犬は上手ですか」と訊くと「まだ子供ですから駄目ですが、それでも
兎は巧く出します」とのことであつた。

伐りかけてゐる天然林にはひると、梅も樺も目欲しいのは大方倒されてゐた。倒れた跡
が明るく空を見せて、澄み切つた紺青の色が、残つてゐる樹木の傷付いたやうな枝椽の葉
に物淋しい感じを爲してゐる。それでも木の數が多いから平地でいふ森林としては十分に
見える程茂つてゐる。残つてゐる樹木は後に片つ端しから伐り倒して火を付けて焼いてし
まふ。そして其焼跡へ苗木を植ゑ込んでゆくのである。一抱もある雑木や眞直に筋の通つ
た樹木などは如何にも惜しいやうな氣がする。併し運賃やら製材費やらを考へると到底引
合はぬので伐木業者は伐り残すのである。それをO君が丁寧に始末して山を綺麗にした後
に春になつて苗木の植込みをやる。之れが鴨山の仕事の大部分である。

寒い日だが風は静かで、折々高い梢に少しの聲を聞く計りである。と、或る峰にきた時
O君は身を雑木に寄せて銃を手に取つた。私は片唾をのんで見てゐる。よつは不安な様子
でそこらを覗き歩いた。一發の音と共に啄木鳥の大きいのが落ちた。「こんなものは仕方が

ありませんが、まア數の多い方が好いから」と笑ひながらO君は腰に下げた。O君は筒袖
の和服で猿袴をはいて汚い烏打帽子を被つて居る。

山廻りのために造られた小逕を踏んで二人は谷を下り又峰にのぼり一日歩るき廻つた。
製材所で濃茶を御馳走になり、又或る山腹にゴンゼツと云ふ樹木を下駄材にこなしてゐる
小屋を眺めながら一服した。事務所に歸つたのは日の暮れ合ひであつた。この事務所はす
ぐ下に人夫小屋が一棟あつて之に春は植込のため出稼にくる男女が二三十人泊り込むが、
平時は二人の兒持ちの夫婦者が住んでゐるだけである。一番近い人家へは一里の急坂を一
直線に下ると着ける。

其の後も數度鴨山に登つた。暑中汗みづくになつて行つた時清水の冷さに驚いたことも
ある。一番最近に事務所へ行つた時も亦冬であつた。その時は天然林は全く伐り盡くされ
て杉扁柏の造林地ばかりになつてゐた、初めの年に植ゑた場所などはもう一丈二三尺にも
なつて抜伐りを一度やつたことであつた。事務所は少し廣められてゐたが、大體昔の
儘である。風呂の心地好さも懸樋の構造も同じであつた。O君は願髻を綺麗に剃つて八の
字髭だけにしたから大に若くなつてゐる。そして千代野さんと云ふお嬢さんが出来てゐた。

その時はもう年弱の七つであつた。山中の一軒家で顔を合せるのは山稼ぎの荒くれた人夫と、一日隔あひだにくる郵便配達位のもので、人に馴れぬ筈の千代野さんは意外にもお愛想の好い和なごやかな可愛らしいお嬢さんであつた。そして房々した黒い髪と色の白いところはO君にしては拾ひもの、美しさであつた。

其の夜O君は大に好い氣持に酔つた。酔つてもO君は始終謹直な態度で、私といろ／＼話をした。千代野さんは二人にお酌をしてくれた。

「おい、歌をうたつてお客さまに聞いて頂け、それからお踊もやるのだ」とO君が千代野さんに云つた。千代野さんはニツと笑つて何んとも答へなかつた。「歌がうたへますか、聞かして下さい。踊りもやれますか」と私も大分好い機嫌になつて、この人里遠い山中處女林の小屋に生れた、そして七年の月日をこゝに育つた幼い千代野さんの歌を是非聞きたくなつた。踊りも見たくなくなつた。「さア、やつて御覽。おい／＼」とニコ／＼しながらO君が催促をする。千代野さんは可愛い聲で、澄ましてラツパ節を一つ唄つた。このラツパ節は人夫小屋の子供から習つたものださうだ。踊りも矢張りラツパ節の踊りださうだが、その晩は踊りは到頭やらなかつた。

「謠うたひもやります」とO君が目を細くした。O君は郡役所へ用を達しに出かける時、郡長にすゝめられて『羽衣』を何行だか習つたさうである。その何行かの羽衣を千代野さんはお父さんから習つたのださうだが、之も其晩は餘り酔つて直に寝たので聞かすにしまつた。

「來年は自分の郷里の美濃へ連れて行つて祖父ぢいさまに預けてきます、そして學校へ入れます」とO君が云ふ。成る程事務所から學校へは毎日二里の急坂を上下せねば通へないと私は思つた。さうすると千代野さんは小學校を卒へるまで、又はもつと上の學校を卒へるまで、お父さんやお母さんの膝元を離れて居ねばならぬのだなと思ふと急に此の賑かな山中の夜の團まじり樂も物悲しくなつて私は思はず涙ぐんだ。

千代野さんは私が冬の夕第一回鴨山に登つた時、今日明日といふ誕生間近かでお母さんのお腹はらに居たのであつた。もうそれが七年の昔になると思へば私は少からず感慨に打たれた。月日の立つのは早いものだと言寄の述懐めいた思ひに暫くあきれてゐた。

千代野さんが年頃の娘盛りになつた後「鴨山の静かな夜、あなたのラツパ節をきかして貰ひましたよ」と話したら千代野さんが顔を赤くして嘸ぞ笑ふことだらう。

此文章を書いて居る今、もう千代野さんは十歳になつて尋常の三年生である。

三河の足助から東の方二里餘りの山奥にミウチゾウレンといふ大字がある。その大字の或る一部にゴンゾレといふ小字がある。御内藏連の金藏連と本字ならば書くのである。大字の方は略してミウチと土地の人は呼んでゐるが小字の方はゴンとは云はない、その代りゾウレンをゾレと短かく云つてゐる。地名は何處でも特別の讀方をして往々地圖を便りの旅人を間違つかせることがある。が足助附近程妙にひねくれて讀む地名の多いのは一寸珍しからう。酒呑をシヤチノミとよむのが徳川家康公發祥地の程近く松平村内に在るのをサケノミと云つて土地の人から笑はれたことがある、これは笑ふ方が無理である。

此のゴンゾレは人家九戸ほどの小部落で、他の部落へは近くも一里はある。夏になると附近の山々に緑が見えて賑かにもなるが冬は寂びれ返つた谿底である。四周の山は昔からの入會山で何千町歩といふ木のない草刈山、冬になると火を付けてぼうくと焼いた山ばかりである。今では造林事業が盛んになつて大分木立も見えてきたが昔は丸坊主の山ばかりであつたさうだ。只東から北へかけての高い山脈は段戸山と呼んで廣い御料林である。

山毛櫨や榊や栗などが茂つてゐる。冬になると落葉樹は枝ばかりになつて榊が青黒く之に交つて立つてゐるのが如何にも淋しい。その代り若葉の頃となれば青黒い榊を包んで緑色の濡れたやうな艶々しい青葉が風に動いて急に陽氣に浮きやかな景色になつてしまふ。

金藏連の九戸の人々は谿間の少し許りの田を耕す外は炭を焼いたり木を伐つたりして暮してゐる。「豆腐屋へ三里」とかいふ警があるが、こゝでは豆腐は正月に自家で作る位なものださうだ。こんな山間の恫びしい土地に思ひも寄らぬことで眞夏になると人が集つてくる。それは此の附近の山から流れでる谿川に棲んでゐる山椒魚——之を此の土地ではアシコと呼んでゐる——を食べにくるのである。生きた儘のを呑み込むと大層胃病に利き目があるといふので名古屋は勿論岐阜や三重あたりの近縣からも聞き傳へて老若男女が呑みにやつてくる。山椒魚といふのは動物學上は兩棲類に屬してゐるので蛙と親族であるが、蛙よりもつと不體裁な恰好をした動物である。「言海」には斯う説明してある。

爬行動物、溪澤に生じて水陸共に生く、大なるは七八尺、鯰に似て髭無く頭圓く扁く眼甚だ小く、四足の前足は四指にして、後足は五指なり、背の皮はいぼかへるの背の如くして黒き斑あり、頂の邊りに疣多く腹は黄なり、聲、嬰兒の泣くが如く、肉味美なりと

いふ、半身を割りて水に投ずれば終に復た全身となるなど云ひて半割など云ふ名あり。と書いてある。どう考へても餘り氣味の好いものぢやアない。大槻博士も食べたことはないと見えて、肉味美なりといふと書いて居る。尤も金藏連附近の谿川のは極く小さい精々二寸位が止まりであるとのことだ。がそれにしても之を生きた儘呑み込むのは、病氣治療のためか何かでなくては恐れ入らざるを得ない。私も實は一匹呑んでみた。併しそれはアッコの乾物であつたことを今に卑怯だと思つてゐる。乾物でも利くといふ話であつた。山椒魚は岡山縣下に澤山居るさうだ。幼い頃上野の動物園の金網の中へ入れられて、ノソノソうごめいて居る海鼠のやうな、岩石のやうな氣味の悪い五尺近い山椒魚を見た覚えがある。

このアッコを呑みにくる胃病の人々はゴンゾレの農家に泊り込んで日々附近の川を捜し廻る。若し捉へるとそれをすぐ口へ這ひ込ませるのださうだ。それで仲々夏は賑かに入出を見るといふ次第である。人出といつても何しろ廣い山中に三十人や四十人來たとて、それは淋しいのに何の變りもないのだが、土地の人にして見れば夏は賑かだといふと思つてゐる。其の上土地の人はアッコのお蔭で錢儲けが出来る。それは山椒魚の居るのは岩の間が

多い、これが一寸馴れぬ者には見付けにくいので土地の人は案内賃を貰つて谿川に遠來の客人を連れて歩くのである。

私は嘗て此の金藏連に一泊して翌日段戸山に近い或る峠を越して作手村といふ隣郡の圖方たがもない廣々とした高原へ行つたことがあつた。

今でも覚えてゐるが其の朝は前夜から腹具合を悪くして、ひどく痛みもせぬが妙に氣持が勝れなかつたので少し出立を躊躇してゐた。けれども日取の都合もあるので聽て草鞋の紐を結んだ。出がけに何か腹の薬はないかと尋ねると、赤玉なら一粒か二粒位あつたかも知れぬといふ。云ふ人は之も造林事務所の係員で、私は前日この事務所の附近に一宿して今朝とにかくこゝまでやつて來て出立を躊躇してゐたのである。

「それでも好いから搜がして貰ひたい」

と頼んで、その赤玉なる大きな煉瓦色をした丸薬を用心のため飲んで出立した。作手の村に入る郡界の峠は一寸骨が折れたが秋のことだつたから、空き腹でもさのみ弱らずに登つてきた。

作手村は四十八平とか三十六地獄とか云つて東西七里南北六里もあらうと云ふ土地で、

戸数はその廣い中に八百許りしかないのだから之も淋しさは金藏連に劣らない。山は大方低い丘続きで概ね草山であつた。その山の間々は廣く耕地になつてゐる。いかにも高原らしい気分は、そこらの藁屋根にも、靜かに流れる小川にも、道の秋草の花にも、鳴く蟲の音にも満ちてゐた。草は松蟲草、つりがね草などが多く目に留つた。その日は好く晴れて風もない上々の日和であつた。

作手村はこの時初めて旅行するのではあるし、天氣の好いのに心爽かになつて、いつとなしに腹具合の悪いことをも忘れて、一人旅の極く氣安く歩いて行つた。途中小店に立ち寄つて澁茶を飲んで駄菓子を一ツ二ツ漁り又蜜柑を買つた。それで中食は抜いて三時頃に村境の峠へきたが、これからは急な下り路でこれを下りきると川があり、その川に沿つて一里程下ると造林事務所に着くと云ふことを聞いてゐたので、まづ好しとこの峠で一休した。朝出てから彼此れ四里は、たつぷり歩いたやうだ。急いで歩くわけでもないが、少し體が熱るやうに思つた。或は下痢のために熱があるのかもしれない、口も乾く。ポケットから店で買つた蜜柑を出して二つほど食つた。食ひながら見ると向うは雜木林が続いて、その又向うは山が三つ四つ重り合つてゐる。そしてそれが皆尖つた山で岩がごりごりしてゐるさ

うである。成程作手の高原性の丘陵とは趣が違ふなと獨り思ひながら、くたびれたので草の上に仰向けに寝ころんだ。そのうち何時か眠りこんだものと見える。

ふと氣が付くと、私の眼から程近いところに、大きな黒いものが、ゆうと出てゐる。その咄嗟にはそれが何んであるか全く判らなかつた。出てゐた黒い變なものは馬の鼻であつた。

私が馬の鼻と夫を知つたときに馬はその長い顔を、すいと動かして横へやつた。私は驚いて起きた。馬は私の起きあがるのを見ると、黙つて極めて無愛想に、そくと傍へ歩み去つたが、やがて「ヘン、この男、眼が醒めたな」と云つたやうな軽い嘶を残して脚早く行つてしまつた。

作手村地方は、今でも放牧をやつてゐると知らなかつた私は、放れ馬に寢息を窺はれたことと思つて少からず驚いたのであつた。

日も傾いたし、寒い風も吹いてゐるのに心急がれて、私は坂道の小石を蹴飛ばしながら谷へ下りて行つた。

四 ある山寺

其の村は神道が多く寺は只一字あるのみださうだ。久しく廢寺のやうに打ち捨て、あつたが、その後住職が出来て今では綺麗に掃除も行き届いてゐるといふ。山裾で、うしろは木立、前は田を距て、山に面した遠州街道の静かな、人家を離れた場所にあるのである。私は風呂敷に書類を一まとめ腋へ抱へ込んで、村役場の人と其の寺へやつてきた。凡そ一週間滞在して調べねばならぬことがあるのに宿屋はごたついで都合がわるいから、こゝを村長が選んだのであつた。

本堂の傍の玄關から上つて三室ばかり通つて奥の座敷へ案内された。座敷は北向きの庭を距て、直ぐ雜木山の裾に向つてゐる。私は妙に薄暗い寒い濕っぽい感じがした。着いたのはもう夕暮であつた。役場の人は案内するとやがて歸つてしまつた。私は座敷の眞中に座蒲團の上に行儀よく坐つてゐたが、仲々ランプを持つて來ない。

座敷が次第に暗くなるので私は縁側へ出た。庭には池が造つてあつて、緋鯉や眞鯉の大きな圓く肥えたのが澤山泳いでゐた。池の縁から向うは山で木々の落葉が赭い色に積つて

ゐる。裸木に交じつた赤松の膚も赤々と妙に淋しく見えた。

又座敷へ戻る。まだランプを持つて來ない。火鉢も茶も出してくれない。私は、つくねんと両方の手をズボンのかくしに入れて座蒲團の上に突つ立つてゐる。暗い座敷は八疊間である。床の間には横物の大きな軸がかけてあつて、それが暗い中にぼんやり白く見える。床板の上に自然木らしいものが二つ三つ置いてある様だ。庫裡の方角で時折ごとく音がする。庫裡へは三間ほど距てゐるらしい。私はこゝに一週間に滞在するのは何だか不安になつた。今夜の模様で何んとか村長に話して他へ轉宿しても好いなどと考へた。

日はその中に殆ど暮れて、私の突つ立つてゐる座敷も、其の次ぎの十疊間も全く闇になつた。私はぞくぞく寒くなつた。風呂にも入りたい、が豈夫手を拍つて呼ぶのも少し具合が悪い。待ちついでに待つてゐようと、依然座蒲團の上に立つて、仕様事なしに足踏みをしてゐる。

チリン／＼とホヤが蓋にぶつかると音がして、庫裡の方から漸くランプを持つてきた。五分心で臺の付いたランプだが大層暗い。持つてきたのは腰の屈つた媼さんであつた。媼さんは私に向つて丁寧に疊へ手をついてお辭儀をした。私は「どうかお頼みます。お手敷

をかけてすみませんね」と云つた。媼さんは、「らんごくもない（取り散らしたと云ふ方言）ところですが、ご悠りと願ひます」と低い聲で云つて又丁寧にお辭儀をする。媼さんは又宣徳火鉢まがひの土焼の火鉢に火を入れて持つてきた。私は少し胴震ひのする位寒い身體を火鉢に寄せた。風呂に入らぬうちは和服に着かへる氣にもなれぬ。又暫く待つてゐると住職がごぼく／＼咳をしながら出てきた。七十に近い老和尚で圓く肥えた緒ら顔の人であつた。和尚は茶器を持つてきて茶を入れてくれた。茶は上等の茶であつた。火鉢に當つて手先が温まるに伴れて私は大分氣持が落ち付いてきた。和尚は太い濁み聲で「寒いことでごすな」など話した。

私は四邊を見廻すと、古ぼけてはゐるが山中だけに立派な木で建てられた座敷であつた。障子も綺麗に張つてあるし、額なども大きなのがかけてある。床の軸は山水で、その前に大きな根株が三つ四つ變な形をしてうづくまつてゐた。和尚は程なく庫裡へ去つた。私は靴をあけにかゝる。「今日は……お菓子をお上りしてお呉れませう」とやさしい聲がしたので私は一寸驚いて振り向くと、十二三位の男の子が菓子鉢を私の側へ置いて、之も丁寧に辭儀をしてゐる。男の子は白い顔の美少年である。髪が五分程にのびてゐる爲か

何となく病上りらしいやうにもあるが、愛らしいといふよりは好男子といふ方の澄した顔をしてゐる。男の子は私と顔を合せると、妙に氣まり悪るさうに俯向いて靜かに立ち去つた。

又媼さんが夕飯の膳を持つて來た。媼さんと共に男の子もお櫃を持つてついて來た。二人は列んでお給仕をしてくれる。食事の間に三人は話し合つた。話の様子では媼さんは梵妻らしいが、男の子は弟子坊主でもないらしい。そして媼さんは大層その男の子を勞つてゐる風が見える。夕飯は思ひの外にうまかつた。

ランプも目に馴れたせぬか始めよりは少し明るかつた。然し心は出せない。出さうとすると一方が耳のやうに飛び出て油煙が立つので其の儘にしてゐた。男の子は媼さんと共に膳を運んで行つた。しばらくすると「お湯におはひりてお呉れませう」と例のやさしい聲で知らせに來た。私は其の案内で湯にはひる。湯は庫裡にあるから、和尚の當つてゐる大圍爐の前を通つた。和尚は赤くなつて一本傾けてゐるところであつた。庫裡の板敷など大ぶん廣い。山中に似ず大きな寺であつた。

風呂をすまして私は暗い座敷に歸るよりはと思つて和尚の向ひ合せに爐べりに寄つて坐

つた。爐には太い根株がチラ／＼、焰を上げて燃えてゐる。つりランプは暗いけれども何となく人の氣が多いので陽氣だ。人の氣が多いと云つても、どうもこゝにゐる三人の外に下男も小僧も居ないらしい。

「こゝに晝をお描きしてお呉れませう」と男の子が畫用紙を持つて私のわきへきた。私は男の子の人なつこしい素振を見て意外に感じた。いかにも人戀ひしいなつかしいと云ふ風で私を見ながら其の畫紙を渡さうとする。私は少しまごつきながら、「晝かね。晝は私は下手だよ」と云つた。「どうぞ描いてお呉れませう」と又媚びるやうに云つた。和尚は湯呑の熱い湯を吹きながら知らん顔をしてゐる。媼さんは圍爐に手をかざしながら少し笑ひかけて、「一つ何か描いてお遣りしてお呉れませう、この子は晝が何より好きでございますでなし」と云つた。私は仕方がないから「よろしい。後で描いてあげよう」と云つた。男の子は嬉しさに、こゝ／＼して私のすぐ側に坐つて私に身を寄せるやうにして火に手をかざしてゐる。外は木枯の風がビュウ／＼と強く吹き荒れて屋根の何所かがバサ／＼と煽つてゐる。

「お媼さんの子かね」と年が少し怪しいとは思つたが、私は尋ねてみる。「いゝえ、孫で

ございます」と媼さんは答へた。媼さんはさう云つて男の子を見ながら、「お前、また夜更しをしてはいけないよ、大事にしなくてはいけないよ」と云つた。「もう寝ろよ」と和尚も云つた。「まだ早うございます」と男の子は不服らしく訴へるやうに私を見上げて云つた。黒目勝ちの潤んだ眼は女の子のやうに見える表情を持つてゐた。「久しく煩つてをりましたので……」と媼さんは私にも早く寝よと勧めてくれと云ひたげである。「さうか、それはいけない、ね、寒いからお眠みよ」と私も口を添へた。和尚は「官員様は四五日はお泊りだけな、今夜は晩いに寝ろよ」と又濁み聲で云つた。

「ではおやすみませう」と男の子は三方へ一々丁寧に頭を下げて、やがて奥の間へ淋しさうに一人はひつて行つた。

それから少したつて、媼さんはこんなことを話した——この男の子の母親は折々此の子の許へ衣類や雑誌や小使錢などを送つてよこす。男の子はこゝへ來ても、う十年餘になるが、母親は一度逢ひにきた切りである。母親は名古屋に居る。

私はこれだけでポツリと話を切つた媼さんの言葉の續きが聞きたくなつた。この木枯の吹きすさぶ山寺の夜半に此のやうな話は身に沁みて、好い加減に聞いてゐはしなかつたの

である。「さうですか、なぜ別々になつてゐるのかね」と訊く。「娘もいろ／＼の都合から藝者に出てをりましたが、只今は或る商家へ片づいてをります。あの子はわたくしが之からも育て、やらねばなりませんのでなもし」と答へた。和尚はいつの間にか爐縁に背を丸くして居眠をやつてゐた。

此の寺には五日程居て用が済んだから出立した。出立するまでには其の男の子はもう馴れ切つてゐた。病氣は大ぶん好いと云つて學校へも通ひ出した。髪は一分刈りにしたので私が着いた日にくらべると餘程元氣に見えてきたが、それでも淋しい子であつた。

私が寺に暇を告げて出立したのは正午少し前であつた。寺から來ると三四町のところに學校がある。私はちつと運動場を見てその男の子を見出さうとした。丁度學校は遊戯時間で運動場には生徒が騒いでゐたのである。男の子は直ぐ見出せた。教室の羽目板にもたれて日向ぼつこをしてゐたが私の姿は此方が見付ける前から迅く氣がついてゐたらしい。私と目を見合せると急に俯向いたが又すぐ素知らぬ顔をして、わきの生徒に何か話しかけた。それが妙に態とらしく見えて物哀れであつた。

五 竈の跡

山林の産物は道路の良否によつて其價格に大なる差を生じるものである。山間地方の開発は道路の改修に俟つことが大きい。その道路改修が自身村長として又縣會の議員として働いてゐる時代に計畫し實行の運びになつたのだから佐々木君の喜びは大抵の次第ではなからしむ。

佐々木君は私を案内して山巡りをする序で、明日は是非改修の道路を見て貰ひたいと云ふ。酒好きの佐々木君は酔ふと吃驚するやうな大聲でわめきたてる人である。今も、「道路が出来て結構だ、君の宿願が叶つたのだ」と私が言つたのが甚く其の感情を興奮させたと見えて大聲を張り上げて、「嬉しい／＼、これで宿願成就だ、林業上の大改革をしたわけだ」と云つて手を出して私の手を握つた。信參國境の山間の村長佐々木君は頗る蠻聲の大男である。その蠻聲が西洋風に手を出して握手見たいなことをして振り動かすから、私も負けずに大に動かしてやつた。佐々木君はぼろ／＼涙をこぼし始めた。

「道路が出来て嬉しいんだな」と私はその心を察して云つた。佐々木君は子供のやうに

首で合點々々をして、ぼろ／＼涙を落しながら尙私の手を振つてゐる。佐々木君は酒を呑むと稀に泣き上口になることがあると見えると此の時私は思つた。佐々木君の大きな赤い顔からぼろ／＼落ちる涙は眞實の嬉し涙だと思ふと妙に涙が出さうになつた。他に人もゐるし私まで貰ひ泣きをしては恰好が好くないと思つて話頭を轉じた。

翌朝は酷い霜であつた。もう三月近いといふに寒さの烈しいことと云つたら想ひの外である。佐々木君は私の起床した頃には既に此の家へやつてきてちやんと股引草鞋ばきの姿で下の圍爐に仕掛けた炬燵に當りながら私の起きるのを待つてゐた。同行は佐々木君と此の家の主人と私と三人であつた。

三人は朝日のあたる山沿ひを急いで歩いた。此の家の主人のM氏が三人分の辨當を背負つてくれた。佐々木君は古い二重廻しのやうなものを着てゐた。

道路の改修箇所にかゝる少し前の道端の、製板所の板乾場で板を馬車に積んでゐた。佐々木君は立ち止まつて人足や馬方に大聲で何か命じてゐる。佐々木君は酒造家で伐木業者で村長さんで丁度そのときは縣會の議員さんまで勤めてゐるのであつた。私は製板所へ溪川から流れ入る大きな板樋の水が凍つて樋より漏れたのが、旗竿位の太さの水柱になつて

何十本となくつる下つてゐるのを見てゐた。その水柱には朝日が赤く照つて美しくびかびかと輝いてゐるのも澤山あつた。私は之れ程小氣味の好い綺麗なものはないと感じた。

途中で山へ寄つて樹を調べてそれから愈々改修工事の道路へさしかゝつた。道は舊道から見るとずつと上の方の山腹を傳つて目下しきりに多くの人夫が働いてゐる最中だ。寒い朝であるから皆白い息を吐きながら働いてゐる。佐々木君が通ると皆丁寧に御辭儀をする。佐々木君も丁寧に挨拶してゆく。ところ／＼焚火がまだ燃えさしの儘くすぼつて煙を立てゝゐるのがあつた。うす紫色の煙が晴れきつた山間の蒼空に棚曳いてゐる。其の日は風の靜かな好い日和であつた。雪も随分残つてゐた。殊に日陰や木の下などは一尺近くも積つて急には解けさうにもない。

道路はまだ途中まで、全部貫通してはゐない。工事の出來た終點まできて引き返へした。歸りは舊道を行つて比較しようといふので谷へ下りて雜木林を抜ける。舊道は成程雨水の流れで川のやうになつたところもある。石がごろ／＼して躓き勝ちのところもあつた。雪は日陰の多い谷道とて殆ど消えてをらぬ。三人とも寒い／＼と云つて急いだ。

その中に舊道の峠へ出た、舊道の峠は谷の一番高いところを通つてゆくのである。雪は

殊に深かつた。杉の木の傘のやうに上枝の茂つた大木が一本峠の岨に立つてゐて、その下に一軒の茶店がある。三人は此の茶店へはひつた。茶店は一間切りの狭い小屋である。

茶店には夫婦がゐた。佐々木君は炬燵に當つてくれと私に云つた。此の邊の炬燵は廣くて土足で踏み込めるやうになつてゐるのが多い。私は足はつめたくないで熱い茶を貰つてふう／＼云つて吸つた。その中に佐々木君が辨當の包をあけた。大きな箱だと思つてゐたらそれは三重の重箱であつた。中が朱塗りでは外は四方に佐々木君の定紋丸に菱が蒔繪にしてある立派な古風な品である。私は之を見ると佐々木君の家は代々庄屋だと云ふから幕府時代には此の重箱も大に幅を利かせたものだらうと考へた。重箱には佐々木君の家の臺所を忙しからしめた種々のご馳走が入れてあつた。兎の肉の煮たの、椎茸の煮たの、自然薯の煮たの、卵焼などがあつた。それに、も一つ何であつたか如何にも山家らしい感じの身に沁むやうなご馳走があつた、が惜しいかな、それは今忘れてしまつた。

佐々木君は茶碗に酒をついでぐい／＼飲つてゐる。私は腹が出来たので、四邊を眺めに外へ出ると、そこに二人の女の兒が居て日向ぼつこをしながら障子の腰板のところもたにた何か話してゐた。姉妹と見えて好く似てゐる。姉の方は七つ位、妹は五つになるであら

うと思つた。二人は袖なしを着て兩手を筒袖の中へ締め込んで肩をすくめてゐる。私も日向ぼつこがしたくなつて姉妹と列んで障子を背にした。私は二人に二言三言話しかけると、二人は變な顔をして見て居たが、さつさと逃げるやうに家の中へ駆け込んでしまつた。

私は本意なかつたが仕方がないので、一人立つて峠の岨から向遙むかほに見える山々の残雪の景色を眺めてゐる。晴れた空から高い山の雪が谷間に消え兼ねてゐる景色はいかにも爽かなものである。佐々木君は此の家の夫婦と大聲で話してゐる。姉妹の兒はそつと忍び足で障子の陰から出て來たと見えて、知らぬ間に私の側に来て私を仰いで見て居た。恐らく出てくるまでに何遍も障子のところから首を出したり、中へ入れたりした後思ひ切つて出てきたものであらう。

又、私は話しかけた。今度は逃げない。「姉さんは幾歳」と尋ねると、「わし、知らん」と云つて笑つてゐる。妹も笑つてゐる。それから二言三言問答をしてゐると、佐々木君が出てきた。佐々木君は日向ぼつこをせずとも十分熱くなつたやうな顔をしてゐる。

この家は、峠の茶店だから人家までは左右とも二里程はあるであらう。夜になつて木枯

が此の一本杉の葉を鳴らしてびゅうくと吹き過ぎる時、炬燵の側に親子四人は每晚其の淋しい音を聞きながら夢を結ぶのであらう。と思ふと、私は妙に物哀れになつて、二人の姉妹の兒の同じやうな髪を撫で、やつた。

其の次に此の津具村へ旅行して舊道を急いで隣村へ山越えをした。その時には此の茶店はまだ見えなかつた。茶店の建つてゐた跡の地上には、眞黒に煤ぼけた床板や柱などが五六本ころけてゐたし、竈の跡の土も物淋しく残つてゐた。私はその柱の一つに腰をかけて残雪の日の幼い姉妹を思ひ出した。この時丁度津具の方から登つてきた男があつたので訊いて見ると、「新道が出来たで村へ引つ越して行きました」と云つた。私は安心した。

六 赤

犬を飼ふなら純粹の和犬が欲しい。兩耳のピンと立つた狐色の毛の左巻の尾の逞ましい雄が欲しい。斯う思つてゐたのは久しい以前からであつた。

今度田園生活といふ程ではないが畑中の離れ屋を借りて住んだに就ては用心のため犬を飼ひたい。犬なら何んでも好いといふのならば直に有るが、私の欲しい純粹の和犬は仲々呉れ手がない。呉れ手がないと云ふよりは此頃は殆ど居ないのである。純粹の和犬でないとなれば、さ程急いで欲しくもなし、餘程氣に入つた毛色なり形なりであつたなら、洋犬でも我慢しようと思ふが、それにしても餘り有難くない。どうかして和犬の純粹なのが欲しいものだと思つた。

その和犬の純粹なのが一疋あるから、貰つてきてあげませうとM君が私に云ふのである。私は嬉しいので思はず、「どこにゐますね。どこにゐるんですね」と尋ねた。

M君は畑の中からノソノソ道へ出て来て、手にしてゐる鉢を地上に立て、柄へ片手をかけ、片手で額の汗を拭いた。秋の中ばではあるが、日和の好い今日は畑仕事には暑からう。私も山道を下りながら少し汗が出てゐる。

「すぐ其の家で先日生れたのです。多分雄でせう残つてゐるのは」とM君はすぐ郡道を距てた向うの百姓家を指した。私は今すぐに犬の子を見にゆきたくなつた。M君は、村の一部落の總代をしてゐる人である。私は豫て此の村へは幾回も旅行してゐるのでM君とも

随分心やすくなつてゐる。「どうでせう。是非欲しいが、お世話願ひたいものです」「話して見ませう」とM君は私の前に立つた、それでM君は、私が役場の某君と二人これから此の十町程奥の山林を調べに行つてこゝへ戻つてくるまでに犬の飼主に話して置くことを約した。

私は山林へ向つた。山はもう紅葉が松や杉の間を點綴して美しく染んでゐる。夕暮近くなつて私等は此の美しい山林に挟まれた郡道を踏んで、犬のゐるといふ家の前へ戻つてきた。M君の家もすぐ近くなのでM君は私等の姿を見るとすぐそこへやつてきた。すると私等を見て二三疋の犬が吠えだした。極めて猛烈に吠える。それが皆耳の立つた狐犬である。は、あ之等の兒だなと私は思つた。

百姓家には主人は居ないで、女の子が三四人遊んでゐた。M君は最前主人に話して置いたから、どうぞ連れて行つてくれと私に云つた。私は大に喜んだ。M君は赤兒を負んだ姉らしい兒に「犬はどこにゐるぞね」と尋ねる。「縁の下にはひつて居たぞい」といふ。M君は屈んで犬の子を捜して引き出した。

私は犬を見ると、一寸當てがはづれた。

犬は極く小さい掌へも載せ得る程の大きさである。やうやく眼を開いたばかりであらう。地の上をヨチヨチ這ふやうに歩いてゐる様はいかにも滑稽である。そしてその肥つてゐることは驚く許りである。這ふやうにして歩く平べつたい毛深い恰好は、腿が出てきたやうである。私は耳の立つた小犬を豫期してゐたので、その餘り生れて間のないのと、丸々しく耳も垂れて又其の毛も深々としてゐるのに聊か當てがはづれたのであつた。

M君は抱くやうにして私に犬を見せた。表面から見ると私は又安心した。その犬の恰好は嘗て應擧か何かの書いた小犬の戯れてゐる圖の犬その儘である。雪中に二三疋上になり下になりふざけてゐる圖が目の前に浮んだ。成る程和犬の兒は始め斯ういふ形をしてゐるものだなと思つたら今度は一度に嬉しくつてたまらなくなつた。が、綱で曳いてゆくことの出来る犬だと思つてゐたのが、これでは逆もさうはゆかぬ。どうして伴れてゆかうかと一寸閉口した。私は洋傘と風呂敷包一つを携へてゐる。これから今夜宿屋のある町までは凡そ二里程この郡道を川沿ひに下らねばならないが、抱いてゆくことは到底出来ない。

「どうして連れてゆきませうね」とM君に相談した。M君は籠をあげるからそれへ入れて手にさげて行つたら好いだらうといふ。成る程好い方法である。M君は自家へ行つて桑

摘籠の古いのを一つ持つてきてくれた、それへ古菰の片を敷いて犬を入れた。私は墓口から銀貨を出して姉嬢にやつた。

「之はお禮だからお父さんに渡しておくれ」と云ふとM君は「なアに錢なんぞ入りませんさ」といふ。娘は掌に銀貨を受け取つて當惑したやうな顔をしてゐる。この犬は一つ腹に四五疋生れたのを一疋残して餘は捨て、しまつたのださうだとM君が語る。私はM君に謝して役場の某君と二人で又郡道を歩んだ。

岐れ道の橋を渡ると役場の某君は左へ村の方へ別れ去つた。そこまで某君がさげて呉れた籠をこゝで私は受取つた。受取つて見ると意外に重い。洋傘に包を結び付けて左手で肩へ擔ぎ、右手でさげて歩き出した。二町もくると手が痛くなる。そこで左右を改へる。又二町もくると持ちかへる。籠がぶら／＼して歩き憎い。日は殆ど暮れた。道は修繕の行き届いた方であるから、暗くともまだ歩くに困難ではないが、兩側とも三河第一と土地の人々が誇る程の立派な森林なので杉木立がこんもり茂つて、晝でさへ薄暗い場所もある位だから随分眞暗で足元の見えぬところもあつた。犬は音なく籠の中にうづくまつてゐると見えなくて動きもしない。

その中に私は工夫して洋傘の柄へ籠の繩を結び付けた。それで丁度洋傘はうしろの風呂敷包と前の籠とで天秤棒のやうなわけになつた。少し足を早めると籠にはづみが付いて躍り上るやうになる。右手でそれを動かぬやうに軽く押へながら歩いた。餘程歩きよくなつたので道は撈取つた。谷川の水音の寒いのを聞きながら森林地を通り過ぎて町へ程近くなつたとき、隣村からの山道をやつてきた人と道伴れになつた。夜道の道伴は頼もしいから兩方から打ち解けて語り合つた。

「旦那、その籠は松茸ですか」と其の人が訊いた。「いゝえ、犬ですよ」と答へる。對手は之を聞いて一寸黙つてゐる。少したつて、「イヌつて云ひますと……」とイヌといふ言葉が判じ得ないのであつた。「松茸と思ひましたか」と私は笑ひながら、成程籠の具合から見ても時節柄松茸としか思へぬと感じた。「犬です。犬の子を貰つてきたのですよ」
「へえ、犬の子ですか、犬の子をお貰ひなさつたんですか。……へえ、どこでお貰ひなさつたか」「阿寺谷に行つて」「へえ、さうですか。洋犬ですか」私はこゝで得意にならざるを得なかつた。「日本犬です、純粹の和犬です、珍らしいでせう。ちつとも雜り氣のないといふことだから貰つてきたのです」と云つた。

「それは結構ですね、さうですか。よいことをなさいましたな」「この親は獵が上手ですといふから、こいつも強いだらうと思ふんです」「地犬なら猪に咬ひついたら死んだつて放しやしない強いものです。強いことゝ云つたら洋犬なんざア足もとへも寄りつけません。旦那、幾何でお買ひでしたな」「いくらつて……別に買ったわけぢやアないから、ほんの禮のつもりで二十錢ほど置いてきました」「へえ、それは拾つたやうなものだ。三四年もたつと四兩や五兩なら獵師がすぐ買ひますよ。旦那は好いことをなすつた」と其の人は大いに商賣氣の話にしてしまつた。町までくる間に、その人は何かの行商人であることが知れた。道理で言葉も此の邊の人らしくなく態度も人馴れてゐた。その人も肩に棒をかついで荷を持つてゐた。

私は、犬の名を「赤」とつけた。赤、赤、と籠の中へ呼んで見た。嬉しいやうな氣がする。其の夜は泊りつけの物固い極く舊式の旅人宿へ投じた。尤もその町は山中の小驛で木材の集散地だから小綺麗な町並みで藝者屋や小料理屋は四五軒もあるが旅人宿は二三軒しかない。私は入口の框に腰をかけながら「牛乳を二合程買つてくれ」と命じた。「おい、この籠の中に何が入れてあるか當てゝごらん」と先刻の松茸の推察に興味を持つて、店先

にゐる人達に尋ねた。「松茸だらア」とすぐ云つたのがある。「松茸か、鶏の雛だらア」と云つたのもある。「矢つ張り松茸さ、それにちげえねえ」と斷定したのは私と前後してこゝへ着いた呉服行商らしい男である。

私は框へ上ると、すぐ籠の上にかぶせた菰をのけて中から犬の子を出した。で、ら、く、と好く拭き込んだ板敷の上に犬はうづくまつて鼻を廻した。一同は吃驚して「ヤア犬ころだ。地犬の子だ」と立寄つて見た。

赤は例の通りヨチ／＼這ふやうな可笑しな形をして歩いて、くん／＼鳴いた。「おゝ、まア、よう肥えとる。珍らしい好い犬でございますな」と宿のお嬢さんが賞めてくれる。すると二三人聲を添へて、好い犬だ／＼と云つた。私はうれしくて又こゝでも犬の經歷を物語つた。

私は座敷に通る。牛乳が來たので又店先へ出て行つて飲ませてやると、赤はピチャ／＼音をたてゝ甜めてゐる。麥酒箱に藁を敷かしてそれへ赤を入れてやる。今夜の臥床にしようといふのである。金槌を借りて箱に打ちつけてあつた釘は残らず抜くか、抜けないのは打ち込むかしてやつた。箱から這ひ出して寒いといけないから蓋をして空氣の通ふだけ隙

間をこしらへておいた。赤は腹も満ちたと見えて箱の中で音なくゴソ／＼してゐる。私は之だけのことをしたから一まづ好しと洋服を襦袢むすこに代へて入浴した。夕飯を食つてゐると、クン／＼赤が鳴く聲がする。私の座敷のすぐ下の倉の前へ箱を置いたから、鳴く聲はよく聞えるので、私は急に赤が見たくなつた。飯がすむとすぐ下駄を借りて行つて見た。赤はモク／＼動いてゐる。主人公が傍へ來たのをなつかしがる様である。

可愛らしいので抱いて宿の店先へくる。途中で臺所の板敷へおろしてやつた。するとクン／＼云ひながら喜んで歩き廻るうちに小便をした、かやつた。

その夜は折々鳴聲が耳に入つた。翌朝再び籠へ入れて今度は乗合馬車で三里餘の地へ向つた。そしてそこに一泊した。次の日は汽車にのつた。その汽車は私設鐵道だから犬は籠へ入れたまゝで客車内へ持ち込んで好いといふのでさうしてやつた。客車の中では籠から出してやると大よろこびで車内を覗き廻つた。

丁度朝のことで乗客も少なくなつたが、その町から同車した中學生が六七人、皆赤を歓迎してくれた。赤も大分人馴れてきた様子である。私設から本線へ乗り換へるところで故障が出來た。それは警察へ手續してくれば犬は乗車させぬといふのである。驛前の派出所

へ行つて相談すると近所に獸醫があるからそこで證明して貰へといふ。かれこれの手續きで一汽車乗り遅れてしまふ。本線では籠に入れたまゝ扱つてくれた。

赤はそれから私の家で忠實に勤務した。そして立派な大犬となつた。近所を通る百姓達が褒めて行くのを屢々耳にした。大きくなるまでに二三度思ひ切つた滑稽事があつた。それは或る深更に勝手元で、けたたましい音がする。それがブリキ罐の音である。私は起きて見ると赤が如露じよろの中へ首を入れて抜けなくなつて苦しがつてゐるのであつた。そして如露を被つて土間を駆け廻つてゐた。水が如露の底にあつたのを飲まうとした失策であらう。又赤の夜中出入のために堀つてやつた土臺下の穴をくぐりそこねて苦しがつたこともある。この時も私等は大汗をかいて助け出した。赤はどここの犬にもある習性の通り私の出勤には随したがいて行かうとした。それが馴れて途中で私が片手を舉げて合圖すると素直に歸つて行くやうになつた。近所へ散歩につれて行つたとき、鶏を追ひ廻した爲めに主人をして鶏の持ち主に平身低頭させたのが彼の唯一の不忠であつた。

私は十月じふほどして畑中の一軒家から引き越した。が赤は今尙その家の畑の隅に眠つてゐる。赤が何人たんどにかころされてゐたのを見出したのは霜の白い或る朝のことであつた。

七 炭窯の火

62

三河の海老といふ山間の小さい町を出たのは彼此れ三時頃であつた。木枯の寒い日で空は好く晴れてゐたが、高い山の重り合つた谷間の海老の町は、もう日暮れに近い陽の色に見えた。

私は海老の宿屋に靴を預けて草鞋で急いだ。こゝから二里少し餘ある山中の田峰といふところへ志すのである。

急な坂路を一つ越したら汗で熱くなつた。道といつても二尺幅もあるかないかの山道を枯れ芝に霜柱のとけやらぬ上を踏んで急いだ。日當りの場所はじめじめと足へ冷たく泥濘が浸み込んでくる。峠を下ると川へ出た。寒狭川といふ豊川の上流で、幅はこゝでもまだ十間位である。兩岸にごろごろと白い石が石原をなして水は高い音を立て、中央を流れてゐる。水は豊かで處々その石に碎ける音は寒い聲を立てゝゐた。日は知らぬ間に餘程暮れてゐた。

これから又一つ山を登ると、そこが田峰である。私は田峰には六年振りである。

し、殊にこの道から行くのは初めてであつた。初めての道は何となく心急がるゝもので足を早めて登つた。登りかけると道は二筋にわかれてゐる。どちらへ行くのか判らない。尋ねるやうな家もない。家は海老からこゝまで一里の餘くるうちに街道沿ひに少しあつたきりであつた。仕方がないから少し幅の廣い方を登つた。田峰にはこの近在に有名な観音様がある。田峰の観音様と云へば舊の正月には夥しい人出を見るといふ事である。それで参詣人のある道だからといふので私は幅の廣い方を選んで登つたのである。でも心の中では此の夕暮に間違へなければ好いがと案じてゐた。十町も來たと思ふ頃、前の道らしい太さの道と又一つになつた。後で聞くと果してどちらから來ても一つになる道であつた。此の邊は枯れ薄が丈け高く生ひ茂つてゐる山で、杉扁柏の造林地は極く少く、多くは雑木山であるから、冬木立の寂れた姿が日の影の落ちた峽間には、いと寒い感じであつた。田峰へもう着きさうなものだと思ふ程來た頃、日は全く暮れた。

多分此の次ぎの山の瘤を廻れば人家がちらほら見えるであらうと思つて歩いてくると、其の山角から道は平坦になつたが人家らしいものは見えぬ。割合に遠いと獨りかこちながら歩いてゆくと、ふと向の山の岨に——丁度中腹のところに火が見える。冬の夜の寒い闇

63

に赤い美しい割合に大きな火が、動かずにじつとして照つてゐる。山は雑木山であらう。大きな山で峰は左右へ長くつゞいてゐるらしい。赤い美しい火は炭を焼く窯の火である。炭窯は焼け具合で火口をあけて居ることがある。炭窯があるとすれば、人が假小屋を構へてあの山腹にゐるかも知れないと思ふと、私は妙に其の假小屋の様など思ひ浮べて獨り淋しい心地になつた。

其の火は如何にも赤々と照つてゐるが、何といつても山中の廣い闇の中に一點の赤い光は物悲しいと外感じられなかつた。

歩く山道も脚下も追々見えなくなつて、動もすると道を失ひさうになりかけた、それで急ぐことも出来なくなつた。寒さは身に沁みるやうであるから外套の襟を立て、手袋をはめた手で洋傘を杖に暗い中を、こつくと歩いた。其の中に家らしいものが闇の中に黒く現れた。一軒あるなと思ふと又すぐ側にも現れた。元氣付いてその家の前へくると、それは納屋か何かで矢張り山中の一軒離れた家であつた。そこへ立ち寄つて田峰の観音様はまだ遠いかと大聲で尋ねてみた。

「すぐそこだわいな。その道を行くとさいが直ぐだわいな」と女の聲で答へる。私は之

に力を得て急いだ。少し行くと観音様らしい森が見えた。やがてその森の下の方まで來たから今度は宿屋は何處かと尋ねる。その家からは態々老婆が障子をあけて顔を出して其處からはすぐ近い宿屋への道を丁寧に教へて呉れた。

暗くてわからぬが以前來たときの田峰とは別の土地のやうに思へる。それは此所へ來た道が異つてゐるからであらう。田峰といふ土地は急峻な丘が重なり合つたところで、家と家とが丁度二階立三階立のやうに覆ひ被ぶさるやうに狭い平地——崖を切り開いた僅許りの平地に建つてゐるのである。田峰の観音堂のすぐ後の、お堂とうしろの山の裾との間のせまい土地にも小學校と人家が三軒ほど押し合ふやうに建てられてゐる——その人家の一軒が私の泊る旅宿である。

宿屋の入口の障子をあけると、暗い吊りランプが炬燵の上にともつてゐて、店には人が居ない。「今晚は。泊めて貰ひたい」と私のいふ聲につれて、奥から十二三の男の兒と内儀が出てきた。主人であらう大きな男が猿轡をつけてまだ草鞋の儘土間の暖簾をくゞつて奥から出てきた。

私は寒い暗い淋しい道を一人歩いてきたので、これらの人々が堪らなくなつちかした。

殊に此の家は六年前に一二泊した家だから、餘計嬉しかつたのである。

私は冷えた手足をすぐ炬燵に入れた。内儀は澁茶を出した。やがて風呂にはひる。風呂は梯子段のすぐ側の狭い押入れの中へはいるやうな心地がする風呂だと記憶してゐたが、矢張り昔のまゝであつた。少しぬるいと云ふので燃やして呉れる柴の煙が板間を洩れて桶に沈んでゐる私の顔へかゝるのも嬉しかつた。

芋の煮たので炊き立ての温い飯を食べたら、もう只何となしに好い氣持になつた。客は三日に一人有るか無しかの此の宿屋に、今夜も客は私一人である、一人二階の部屋につくねんとして居るのは物足らぬので、下へきて炬燵へあつた。主人も當つてゐた。子供は男の子の外に十六七と十位の娘とがゐた。娘達は私が二階から下りてきたので極りわるげに次の間の母の側へ行つた。

私は主人が木挽であるを知つて、いろ／＼木挽の話聞いた。暫くすると障子をあけて男がはひつてきた。この男は旅稼ぎの塗師屋であつた。此の家の膳と椀との修繕を引き受けて二三日前に品物を納めたところが塗りが甚しく粗漏で却つて品物を醜くしたのみか、漆其のものが大に怪しい、他の塗料で胡麻化したのだらうといふので主人はその男に

向つて大に力み返つた。「わしは下職でして、親方は海老に泊つて仕事をして居るんです、わしは注文を取るだけで、仕事は親方がやつたんだから……」とペコ／＼見苦しくお辭儀をしてゐる。頑固らしい此の家の主人は仲々承知しない。しまひには炬燵から土間へ下りて其の男と向合せに突つ立つて談判してゐる。「親方だつてそんな悪いことをやりはしませんかね、……」と其の男が少し強く出る。主人は眞赤になつた、そして奥から椀を一つ掴んで出てきてそれを相手の鼻先へ突き付けた。「まるで臺なしになつてるづら、お前の親方でえのをこゝへお寄來しんやれ、ほんに、旅稼ぎの衆だとして之れでは酷いでないかい」と其の椀をくり／＼動して見せる。その内に奥から温和しさうな内儀まで出て来て、「こんな漆でえがあらあか、一度湯に入れたら解けてしまつたぢやあないかい」など攻め立てる。私も頭を少し出してその椀を覗かうとする。下職だと稱してゐる男は大に恐縮して、受けとりに來た代金も貰はず、親方に一應話しますからとか何とか云つて這々の體で歸つて行つた。

私は飽氣にとられて此の間答を聞いてゐたが、云ひたい事を云つた後の快さを顔付に現して主人が再び炬燵に寄つてきた。私は又聞かけの木挽の話をつゞけさせた。觀音堂の森

を吹く風であらう、寒い音が耳に折々はひる。

田峰は三河の大森林たる段戸御料林の入口で、こゝの観音様は正月に三番叟を村の若い者が踏むので有名である。三ヶ日毎朝未明から踏むのださうである。それを見に近村——と云つても五里も六里も遠い同じやうな山間の人々が老若男女こゝへ集つてくるので大した賑ひださうである。この田峰には元龜天正時代の砦堡の蹟がある。宿屋のあるところは小學校や役場など合せて十四五戸家がかたまつてゐる山腹である。

八 くらがりの蛭

山林の仕事で旅行して雨に降り込められる程閉口することはない。それも梅雨時と云つたら木の葉は茂つてゐる、草は伸びてゐる、上からも下からもづぶ濡れにされて、一町も山を分けぬうちにズボン下までじめじめするやうになつてしまふ。

東海道を豊橋から御油あたりまでの間に仰ぎ見る本官山の高い頂——三河一の宮の奥の社の祀つてある峰の裏谿に、戸數五百戸餘りの山村がある。この村の名は割合に知れ渡つてゐる。近縣ばかりでなく、山林局に行つても、すぐ夫れと官吏仲間には通じる位である。

村の名を宮崎と云つて部落有の林野を整理したのが當時極めて進歩した遣り方であつたと云ふに基づいて、政府の其の方面の奨励に當つてゐる人々は之を大に賞讃し好實例として世間に吹聴したのである。で、この難件を解決した功勞者の山本源吉老人は、それがため諸方の講演會へ引っぱり出されて經驗談を話させられた。その中に林學博士が二人まで草鞋ばきで山を見にくると云つたやうに、次第と其の方面には有名な山村となつてきたのである。

私はこの山村へ梅雨の最中やつてきて蛭に吸はれたことがある。山歩きをするのであるから蛭は別段珍しくもないが、このときの蛭は今に面白い思出をなしてゐる。

日々の雨でさうく外仕事を繰延ばしてゐるわけにも行かなくなり、遂に今日は降つても構はない調べに行かうと云ふので、三人連れ立つて宮崎村の龜穴といふところの宿を出かけた。雨はじめくと女々しい降り方をしてゐる。傘をさしては林内は歩けぬから菅笠と雨蓑とを買ひ求めそれを身に着けて出かけた。山逕は滑べるから棒やら杖やらを各自手にしてゐた。

川沿ひを二里のぼると村有の造林地に出る。こゝで前に云つた山本老人と一緒になつ

た。老人は鹿のなめし革の猿袴をはいて我々と同じく菅笠を被つてゐた。老人は眞先に案内として立つた。次が私、次が地質調査のK氏、次がY氏といふ順であつた。造林地はまだ木の丈が低い。草は下刈前とて茂つてゐたが、道は手入がしてあるから左程困難ではない。雨は少し強く降り出して笠に當るのが聞き馴れぬ爲か騒々しい。大きな聲でいろいろ話しながら登つて行く。老人は猿袴の腰に鉈を一挺付けてゐる、それを揮つて歩くに邪魔な蔓などを切つてゆく。

「よく降るぢやアないかのう」と老人は話好きだ。齒のない口で舌滑らかに能辯を振ふ人である。山本老人に對しては私は敬意を有してゐる。公人としての老人に就いては、林業の改良、道路の改修、部落財産の整理統一其の他後世に傳ふべき事績を多く爲してゐる。又個人としても老人は立志傳中の人であるといふことを聞いてゐる。山本家へ養子に行つてからの壯年時代の奮闘的生活は目ざましいものであつたといふ。今では村内は勿論隣郡にも山林を所有してゐる位に家計も豊かになつた。老人は筆まめに自己流の文章を書く、それが亦老人の面目を躍如たらしむる仲々面白い一種の調子を持つてゐる。歌も作る。歌と云つても三十一字の歌ではなく「一つとせ」だの、さの、さ節なのである。それには大抵林業

に關したことが入れてある。そしてそれを好い聲で唄ふ。實際山本老人の聲は好い聲である。甲高な若々しい聲だ。酒に酔つても歌ふ。素面の時も唄ふ。唄ひ終るとニツと眼を閉じて、大きな口をバクリと開いてアハツハ〜と哄笑する。その大きな口には齒は一本もない。

山本老人の齒の無いことは村でも問題にして、一時その健康上是非入齒を勧めるといふ議論が出て、まさか委員までは出来まいが強く忠告をしたことがある。それがため老人は名古屋だか岡崎だかで陶製の總入齒を作らして之を口へ入れてゐた。ところが何うも物を食ふにも得意の能辯を揮ふにも此の入齒は邪魔にはなるとも決して好都合のものではなかつた、それで老人はこつそり取り端して机の抽出しに入れて置いた。するとそれを幼い孫が見付け出して「お祖父さんの口が抽出しに入つてゐるぞん」と云つて持つてきた。

「ヤレ〜内證に藏して置いたにのう」とお祖父さんは頭をかいた。がそれ以來お祖父さんの口は其の抽出しに埃まみれの儘放つてある。「土手が割合に強いのでう、澤庵でも蜻でもちいと手間せえかけりやア嚙んでしまへるでこのう」と今でも云つてゐるが、成程土手を、もぐ〜させて大抵のものは食べてしまふ。

老人は大久保彦左衛門といふ仇名を持つてゐる。之は尤ものことで刀が長過ぎると云つたら鞘だけ切り縮めて中味で疊をさくり／＼切る位のことにはやり兼ねない。村會の出やうによつては鹽に乗つて二里の道を自宅から役場に出勤することもやりさうであつた。こゝに老人に就いて奇抜な話があると或る人が私に聞かしてくれたのは、誰やらが老人と共に宿屋の風呂に入つて居たら密と立ち上つて擧丸を其の誰やらの頭の上へのせて知らん顔をして身體を洗つてゐた。其の誰やらが之に氣が付いて、アアと頓狂な聲を出したと同時に、アハツハと哄笑一番して湯の中へ身を沈めたといふのである。之は少々禪坊主めいた話だが其の誰やらは老人に度胸を試されたに違ひないと思つてゐるさうだ。いづれにしても始末に終へぬ油斷のならぬ老人である。

老人は、前屈みに杖で山道を突きながら達者にどん／＼登つてゆく。登りながら賑かに話してゐる。やがて村有林を一巡したので元來た道へ下らうかといふ評定が山の頂上で始つた。雨が降つて少し困るが大したこともなからうから、頂上の道を今登つた方角と反対の方へ下りて、闇刈の御料林へ入り石原へ出て龜穴へ戻らうと云ふことに一決した。闇刈も石原も地名である。朝早く出たのでまだ中食前だが、御料林に入つて其の山小屋で茶を

貰はうといふので握り飯は腰につけたまゝである。

御料林といふのは扁柏の純林で、植ゑて十二三年の密生した林であつた。くらがりと云ふ名稱は何時から在るのか知らぬが、現状に最もふさはしい名であつた。さなきだに梅雨の木下闇は、暗いこと夜の星明りに比すべき位のところもあつた。扁柏の十二三年生が肥沃な地味に飽くまで伸びて、下枝は赤く枯れてゐる。青黒く茂つた葉の下へ屈り入ると、林樹の幹から四方へ縦横に出てゐる下枝は眞赤に枯れたまゝ幹に着いて丁度直角の位置になつてゐる。枯枝と地上に落ちた枯葉の赤い色とは暗い雨中に物凄しい光景であつた。四人は賑かに話しながらどん／＼下つて行つた。道は迂曲が甚しく又處々道の途絶えたところもあつて思ひの外に時間がかゝつた。手入が行き届いてゐないので蔓草や猿とり茨に引張られて大いに惱んだ。雨は相變らず降つてゐた。斯うして歩いて行く中に蛭が現はれ出た。

最初見付けたのは確かY氏だつたと思ふ。蛭だ／＼大層な蛭だと大きな聲を出した、それと一緒に吃驚して見ると四人が四人とも足袋にも脚絆にも或はズボンや猿袴にまでも居るわ居るわ蛭がべつたり食ひついてゐた。小さい飴色をした奴がびく／＼一方の端を振り動し

て吸ふべき血を求めて居る姿を見出したときは、我知らずぞつとした。棒で扱き落とさうとしても容易に落ちない、手で取り去るのは氣持が悪い。山に馴れた山本老人さへ「イヤ、これはこれは忌な奴めが居たのう」と八の字を寄せてゐる。何處で取り付かれたらうと四方を見ると、居るわ／＼地上に落ちた枯葉枯枝の上に飴色の奴が首だか尾だかを振り立て、人待ち顔に、恐らく初見参の人の臭ひに夢中になつて騒いでゐるのであらう。

此の場合どうの斯うのと云ふよりは、それ驅け足！といふので、付いてゐる蛭を其の儘に付けて四人とも山を駆け下つた。山小屋に着いてホツと息をついた。恐らく蛭は扁柏林に入ると直ぐから、地上に充満してゐたのであらう。四人は蛭の上を歩いてきたのである。

山小屋に着いて茶を入れて貰つて握り飯を食べる。食べる前に一疋一疋蛭を丁寧に取つて捨てたのは云ふまでもない。お互に後へ廻つて背の方を検査し合つた。で全く一疋もゐないといふところで中食にとりかゝつたのである。

宿についたのは彼れ是れ夕刻であつた。もう夏ではあるが、雨中を歩いたのだからと云つて熱い湯を洗足の盥に入れてくれた。框に腰をかけて草鞋を解き足袋を脱ぐと、豈圖らんや、蛭が居た。二疋三疋数へると、五疋圓るく血を吸つて食ひ付いてゐた。山小屋では

足袋は固く足に着いて隙間がないから大丈夫と思つてゐたのが私の不覺であつた。他の三人の足には付いてゐたかどうか、今覚えてゐない。

それから此の時の菅笠と雨蓑とは、名古屋へ歸るときこれを着て、今日山へ行くときと同じ姿で電車にも臆面なく乗らうぢやないかといふ約束のもとに買ったのであつた。それで約束通りY氏と私とは梅雨の山廻りの姿で市中へ入つた。M氏はそれから他の方面へ旅行したから知らない。こんな、學生でも遣りさうな戯れも、山の仕事に伴つた愉快であつた。

九 こたつ

三河も津具へ來ると、もう信州の感じである。簷の深い屋根に、ごろ石がごろ／＼と置いてある様子、無恰好な木製の植木鉢に、石楠の花が咲き誇つてゐるなど、今机に向つて筆をとりながらも其の光景が懐かしく目に浮んでくる。

津具には随分度々出かけた。酷暑に大汗をだら／＼かいてリンネルの服の脊にしみをこしらへて、村の山林を歩き廻つたこともある。緑の深い林内に立つて帽子を脱いで涼を納

れるときの心地は何も此の土地に限つたことではないが深山だけそれだけの感じは身に迫るのであつた。が、私には暑いときの津具よりも寒い雪と氷の津具に云ひ知れぬ印象を持つてゐるのである。津具は三河の山間でも地盤の高いことは第一であらう。

丁度十二月の初旬から凡そ一ヶ月程の用務を帯びて津具へ行つたことがある。其の年は例にない寒い年であつたが、津具の寒さの強いのに伴つていろいろの深い趣を味つた。宿屋に居ては都合が悪い仕事なので、こゝでも亦村役場に頼んだ結果、上津具の金龍寺といふ禪寺に泊ることになつた。大きい清潔に掃き清められた寺で小僧さんも皆謹直に立働いた。私は本堂のわきの座敷に陣取つて机の前に地圖だの帳簿などを擴げて同行のK氏と調べ物をやつた。

大抵毎日一度や二度は雪が降つた。朝晴れてゐるから今日は誠に温い好日和だと思つてゐると、晝過ぎに空が暗くなつて雪が舞つてくる。それでゐて夜になると又冴え／＼した星が、凍り付いた地上の雪に映えて、寂びた物凄しい風景を見せると云つたやうな具合であつた。

寒いからと云ふので村の誰彼の盡力で、牛肉には折々有り付いた。時には野猪の肉など

も食つた。本堂の近くでは相すまぬといふので離れた庫裡へ火鉢を移してジワ／＼やつた。仕事は晝間やつて夜は多く村の人々や寺の人々と談笑した。何でも三十疊も敷ける大廣間の一方に大きな炬燵が切つてあつた。三尺四方或はもつと大きかつたかも知れぬ炬燵で、上に櫓一杯の板がのせてある。夕飯はこゝへ来て炬燵に寄りながら櫓の上へ茶碗も皿も列べて食ふことも屢々であつた。一度この炬燵に蒲團を寄せて寝てからどうしても本堂のわきの間へは行けなくなつたので、それから炬燵に蒲團の端を付け、懸け蒲團を櫓へ連絡させて寝るやうにした、火が少し強いと、のぼせて苦しいから灰を十分に覆ふせるやうにする。今度は夜中に火がぬる過ぎて寒くて仕方がないと云ふやうな、仲々お調子もの火加減であつた。併しそれも漸々馴れてきた。

津具の山林の地質を調べにM氏がやつてきた。M氏は岩石を研究することを何よりの趣味とするだけあつて、寒さには一向お構ひなしといふ顔付をしてゐる。その晩は金龍寺の小僧さん達が集まつて私達の慰勞會を開くといふので大騒ぎをやつた。先づ愚童君といふのが一席の説教をやつた。慰勞會に説教は一寸風変わりではあるが、仲々爲になる法話であつた。黙禪君が手品をやつた。法山君も何かやつたが今覚えてゐない。説教をやつた愚童

君は十二であつた、默禪君は十一で法山君は十歳であつた。尤も此の法山沙彌には年齢に就いて面白い逸話がある。それは法山君は其の祖父なる人に伴はれて諸方を流浪した悲しい身の上であつたさうだ、法山君が自身の身の上話を一向悲しさうでもなく笑ひながら語る所によれば、東京に三年、美濃に二年、東加茂郡に二年、尾張に何年、遠州に何年と其の諸國に滞在した年数を指折つて算へる。一同謹聽して扱て其の年数を合せると十六七年になる。法山沙彌は十六七年の星霜を十年に生長した人で、既に超凡の大聖たるべき奇特を示してゐるわけである。こんな話も、なつかしい感じがして度々炬燵の圍りで繰り返されたのであつた。

M氏は催眠術がうまい。法山沙彌が少し聾であるのを治してやるといふので、膝に抱いて眠らせた。沙彌は好く眠つた。一枚の紙を之は重いから上へ上げられぬと暗示されて、ウン／＼力を入れて手を動かしたりした。聾の耳に聞えぬと云つてゐた遠い溪川の水音もよく聞えると目を閉ぢたまゝ黙頭もくずいた。之も慰勞會のプログラムの中に加はつた一つのことからである。

さアもう休まうといふので、其の夜は大廣間に私達三人と郡役所の某君と四人が、一つ

の炬燵を四方から二本づゝ足を突き出すべく十字形に蒲團を敷いた。ランプは炬燵の眞上に吊り下つてゐたが之を消して寝入つた。

翌朝眼をさますと炬燵も殆ど消えたらしく、馬鹿に寒いので四人とも今朝はひどいぞひどいぞと言つた。私が起き上つて見ると、M氏は障子のすぐ傍に頭を置いて寝てゐる。丁度其の頭のところが障子の境目であつた。M氏は目を閉ぢた儘寒い／＼と云つてゐる。私は戸を一枚明けて見ると外は昨夜更けてから降り出したと見えて眞白に雪が積もつてゐる。まだ盛に降つてゐる。「ヤッ。雪だ。ヤッ。雪だ」M氏が大聲を出すのでM氏の方を見ると、M氏は頭から枕の邊を撫で廻してゐる。雪が夜中に戸と障子の境目から室内へ吹き込んで、それがM氏の頭へかけて一直線に薄く積つてゐたのである。枯木寒巖に倚る三冬暖氣無し、禪寺だからと云つて——岩石學者だからと云つてこれは寒いに相違ないと一同は大笑ひをした。

萩太郎山が信州の國境に高く聳えてゐる。檜原山の冬枯の灰色になつた山毛櫨林が見える。恭盤石山といふのは名倉村の境に大陸的の圓るい坊主山を寒さうに見せてゐる。いづれも毎日の雪で、木立の處々だけ黒く他は白く、空の加減か妙に黝くろんだ色になつてゐた。

大森林の冬の夜

段戸^{だんど}は三河での大森林である。谷も多く、又それから出る幾つかの流域に岐れて本流へ注ぐのである。矢作川、豊川などへ入るそれ等の谿々は奥ふかくなるに従つて兩側の山も次第に大きく之に立ち茂る樹々も美しく、鳥や毛物の棲むことも多くなつてくるのである。樹は、天然林は樺を主として、これに多くの潤葉樹が混生してゐる。ぶな、くり、ならなどの間に、とちの木やほゝの木などの大きな葉が枝を交へて山腹から谿流をゆたかに覆つてゐる。

山は悉く御料林で、伐木の跡地は行届いた造林が行はれ、立ち並ぶ若木の杉扁柏^{のぼろ}は、勢よく春秋を送迎し、年数の経つた區域は既に瑞々しい林相を成してゐる。

林道も立派に開鑿され、森林への車馬の交通も或る地點までは易々と出来るやうになつてゐるのである。

山腹以下の平坦地には二三ヶ所苗木を造る苗圃地も設けられ、又伐木地へは植込などの運材装置が用意されそれ等がすべて完全に整つた一つの林業境を形づくつてゐる。

この御料林の大森林の中で、或る時、悲しい一つの事件が持ちあがつた。が、それも今ではもう十何年か昔のことだから、知る者も稀になり、知つてゐる者もそれを思ひ出す機会とてなく、かくしていつの間にかその話はすつかりと忘れ去られてしまふであらう。

その哀話といふのは^{むじな}貉の話であつて、簡単な、ほんの瞬間の出来事なのである……

御料林の分擔區^{ぶんたんく}といふ名稱であつたと記憶するがに詰めてゐる技手の某といふ人が、或日例の如く森林巡視に出て行つた、それは霜の白い冬の朝であつた。某は肩に愛用の獵銃をかけ、そして犬を連れた。制服の腰には短い劍がつるされ、歩くに従つてそれがちやき／＼と鳴つた。彼は永い年月を、森林監守の職に就いて勤務に努め儕輩の評判も上司の受けもよく、段戸御料林にはよく精通してゐた。彼はその日の巡視の道順を立て、犬を口笛で友としつゝ達者な脚でぐんぐんと歩いた。犬は尾を振り鼻を働かせて主公の後や先を忠實に馳け廻り、何かいゝ獲物もあらば追ひ出さうと頗る熱心であつた。彼は狩獵を好む者の常として犬を愛することも亦至つて厚かつた。單に獵を爲す者としての愛情以外に、

寂寥無人の森林を唯一人巡視する時の友達には、彼の愛犬の他に何者もなかつた。であつたから、寒い冬枯の溪川ぞひに於て、或は又暑い炎天の峰筋に於て、彼はそこにある岩角や樹の根に腰をおろし、その愛犬を脚もとに呼びよせて、巻煙草に火をつけ、心から愛撫するのが例であつた、彼は犬を連れずに巡視する時の、疲労の甚しいのをいつとなしに自覺した。それは犬と共に歩くと共に比して何倍もくたびれる、くたびれるのは身體のみでなく何故か頭も同様であつた。それ故犬をつれることは、彼にとつては極めて大切なことであつて、單調な見馴れ行き馴れた山徑を踏みながらも、彼は言葉の通ぜぬ彼の忠僕に深い愛情を感じ、辨當を食ふときなど、犬の頭を撫でながら自分のものを多分に分ち與へては喜んでゐた。……その犬が、今、突然彼の眼の前の草むらの中へ、異様の吠聲を立て、驀然と飛び込んだのである。

彼はすぐ銃を肩から取つた。それは甚だ手早い動作であつた。そして犬の跡を追つて少しなぞへの溪ぞひを馳けのぼつたけれども其時犬の姿はどこへかくれたか、彼の眼には入らなかつた。吠聲も聞えなかつた。彼は、佇立して眼前に飛び出る山鳥を想像した、彼の胸は興味のためにときめいて騒いだ。——山鳥——或は兎ではないか。——彼は眼を光ら

せて、前方を素早く見廻した。

けれども犬はすぐ現れない。その追ひかけた筈の獲物の姿も現れない。その邊は一面に枯れた萱が或は高く或は折れて低くきたない寒い色を見せてゐるばかりである。彼は、その時不思議な不安を鋭く感じてきた。それで銃を一層固く握りしめて、すたくと前方へ歩をすゝめた。溪川を距て、向ふに灌木の茂つた岩の一群がある。その岩の方へと彼は足を向けたのである。その時に犬の鋭い聲がつゞけて三四遍岩のある方角からけたゞましく起つた。

見ると、岩の上の少しの平地に犬が何やら判らぬ獸と咬み合つてゐる。今しも犬が押し倒されて苦しげに足を舉げて空を蹴つた。それを何物であると判断する暇もなく、彼は一散に溪川を飛ぶやうに越えて岩角へ近づいた。岩角は切り立つたやうに聳えてゐるので、一寸どうすることも出来ない。彼は銃を擬したけれどもそれを放つわけに行かないので、すぐ又銃を手にさけて、岩へ片手をかけそれをよち登らうとした。二三度滑べつた後、彼はやうやくその岩の上へ這ひのぼつた。犬は、と見ると、犬も獸も咬み合つたまゝ、そこを少し離れた草の上に今や必死の力を盡し闘を續けてゐる。——獸は穴熊であつた。貉とも

いふ狸に似てそれよりは小さいうす黒い毛のものである。彼の犬は年はだいぶん老つてゐたが形は極く小さかつた。山の中を連れ歩く獵犬としては寧ろ小さ過ぎる雜種であつた。兎や山鳥にのみ馴れてゐた犬は、烈しい抵抗を敢てする相手の出現に度膽を抜かれ、且つ危地から逃れようとする猛しい力に押し負かされて、今は七分の弱味に陥り、敵手のために咽喉を強く咬まれた形のもとに地上にころげてもがいてゐた。忠僕のこの危急を見た彼は、驚き周章てゝ走り寄り、手にしてゐる銃を逆に持ち變へて、銃身のつめたいところを夢中で固く握つた。そして大聲に犬の名を呼びながら、猛然と一撃を穴熊に加へやうと身構へた。然し兩獸の鬭争の烈しさは、人間の助勢に少しの間隙を示さなかつた。彼はあせつた。そして、犬が一寸穴熊から離れ得たと見た刹那、激しい一撃を穴熊の上に加へ……やうとした。

銃床が穴熊の上に猛然として強く打ちおろされた時！ 銃口からすさまじい音と一緒にさつと火箭が放たれた。呀ッといふうめき。森林監守は、仰向に岩の上へ倒れた。岩の上は狭かつた。身體は岩から横ざまに下の溪川へころげおちた。

穴熊もやられた。苦しい叫をあげて、少しそこを這つてゐたが、程なくへたばつてしま

つた。忠實な、しかし今は不忠な結果となつた彼の愛犬は、烈しい息切れに全身を波打たせながら、すぐ穴熊に馳せよつて、敵の急處に最後の止めをさした。そして異様な吠聲を上げて、我が勝利を主公に告げた。もうその時彼の主公は溪川のふちに半ば水流につかつて、見事に打ち貫かれた銃丸の爲めに殆ど全く事きれてゐた。其の手には恐るべき彼の愛銃のつめたい銃身を握つた儘。――

犬は、それから數時間の後に、分擔區の官舎に歸つてきた。そして不安の裡に主人不在の官舎の一夜は明けて、翌日山の入夫達は犬のたど／＼しい素振りと共に案内で、方々歩き廻つた後夕刻近くなつてこの現場に到着した。いたましい森林官吏の制服をつけた姿と、うす黒い毛の穴熊とが官舎に運ばれ、彼の妻子が洋燈の光に、それを迎へ見たのは既に、全く夜に入つてからであつた。

折しも官舎の戸外には雪がちら／＼と降りかかつてゐた。方十數里に互る段戸山大森林は、この小さい建物の中から洩れる嗚咽や人聲によつて愈ものさびしく靜かに澄み沈んで行つた。――忘れてゆく山の話。それをかういふやうに書いて見るのも古い記憶をよすがにしてである。

山の移住者

山を歩いた頃の思ひ出である。

此造林地受持のK君の案内で、朝早くから区域内の新植地を見廻つた。附近一帯は高低が少く、傾斜のゆるい大まかな山である。その山々は、冬枯の草の色に黄いろく静まり返つて、晴れ透つた大空に、おだやかな圓味を持つた線を示してゐる。

一と目には草山であるが、この邊の山は、大抵檜苗か松苗が植ゑられてゐる。山窪の少し水氣の多い地味の肥えた澤には杉苗も少しは植ゑられてゐる。それがまだ植ゑてから年數を経ぬので、丈け低く、その縁はあまり目立たぬので、一面の黄いろに見えわたつてゐるのである。尤もところ／＼凡そ一と山づゝを境界にして、黄色に黒すんだ緑がまじつて、

半々又は少し黒味勝ちに見えてゐる部分もある。それは黒いのが縞のやうに見えるところもあるし、又は緋のやうに見えるところもある。黒いのは植ゑられた樹の苗の葉が、光線の加減でさう見えるのである。山道は此の低い丘をぐる／＼と迂回してついでゐる。造林歩道と云つて、山へ苗を植ゑたり、又はその植ゑた後の手入や保護のために造られた道であるから、こんなに態と曲りくねつてつけてあるのである。僅かに三尺幅の至極柔かい土に覆はれた道で、岩角や石ころなどは少しも出てゐない。ふく／＼として草鞋のふみ心地は大さうよいのである。

この山地は既に高原の一部になつてゐるので、道も歩きよく、山も音なしやかであるが、こゝから僅か一里距つた山續きには、山の姿がまるで異つて、急峻な峯が起伏し、老いた森林が立ち茂つて大きな岩の下を音高く水が走つてゐるところがある。

「正午です。中食をやりませうか。」

K君は私を顧みた。造林年度の境界の道に出たところである。

「やりませう、もう其の時分ですな。」

私は目を仰いだ。二人の腰には握飯の包がある。

「ちやア、あすこの小屋へ行つて、茶でも沸かさませう」

K君はこの丘の傾斜の盡くるところ、向の丘の傾斜の始まるころ、すこし小高い土の盛りあがつて見える草山を背にして、板葺の小家が一軒あるのを遙かに指した。二人はその方に歩き出した。

「あれは山人足やまにんそくの家ですか」

入堂後自介は本日にも

「ええ。山の常備夫の家です。他國から來た者ですから、小家を建て、住み込んでゐるのです」

「ぢあア近頃出來た家ですね。この前こゝへ來た時にはないやうだつたと思ふが……」

「つい此の頃です、それでも彼れこれ一年程になるでせう、東加茂郡の方から移住してきたんです、生れはまだ遠方なんださうですが。……此の村に一戸増したわけです」

「山の中に他國から來て、新らしく一戸構へるなどは此の邊には珍しい方でせうね」

「珍らしいにも何にも、まるで例のないことです」

私はこゝまで話し合つてきて、ふと思ひついたことがある。

「東加茂から來たと云へば、夫婦者ちやアありませんか。細君は背の低い女で、亭主は

三十五六位ちやアありませんか」

「さうです、よくご存知ですね」

「知つてますよ。……それ、私がS町の宿屋に泊つた晩、丁度去年の植付のすんだ頃だ、君が宿屋へ私を訪ねてこられて話をしてゐるところへ、東加茂郡の方から紹介状を持つて、君を頼たのつてきた夫婦者があつた」

「ええ」

「あれですか」

「あゝ、あれです、あれです」

「あの二人が、あれからずつとこゝの山に働いてゐるのですか」

「さうです、ずつと働いてゐるのです、二人とも正直者で、よく働きますから常備人足として使つてゐるのですが、こんな山の中ですし、二人とも一生懸命につましくやつてゐるので、一年餘りの間にぐんと金をつくつたのです、と云つても知れたものでせうが、それでも感心ですよ」

私は、小家の方を見て、もく／＼と柔い土に草鞋をふみしめて歩く。あるきながらあの

小家に住む夫婦者の顔が目に見えてくるのをおぼえた。一度それも一寸遇つたきりのことだから勿論明瞭ではないが、それでも亭主の顔も女房の顔も、體付きまで目に見えるやうに記憶が呼び起された。

K君は話しつゝけてゆく。

陸軍 戦車兵兵長

「何分、造林事務所のあるところは、御承知の通り人家が少いんですから、始めは事務所の近所に間借りをして住んでみましたけれど、その借りた家の都合もあり、又本人達の希望もあつたりして、この山に永住したいから一軒新たに家を建て、住みたいといふので、幸ひこの邊に見張小屋兼用に一軒欲しいところでしたから、柱とか床板とか云つた大體の材料は事務所の方から出してやつて、あとは自分で工面したり集めたりして村の大工と自分等とで建てたのです。狭い家ですが、自分の家だと思ふとうれしいと言つて喜んでゐます。あんな様子をして、山猿然と仙人化してゐるのですけれど、あの二人が一緒になつたについても、他國へかうして来るやうになつたについても、それ／＼浮世臭い話が伴つてゐるんです」

かう語つてK君は高く聲を上げて笑つた。

私は、春雨のしと／＼降る夕方、この高原を降り切つたところ、停車場の有るS町の宿屋の店先に、K君を頼つてはる／＼山稼ぎの口を求めにきた夫婦者の姿を今更に描き出してみた。夫婦の者は、男の方は雨蓑をきてゐたし、女は桐油とんあぶを肩から合羽のやうに覆つて、二人とも土にまみれた草鞋をはいて、寒さうな疲労した顔を並べて入口の土間に立つてゐた。男は菅笠を大事さうに持ち、女は古ぼけた雨傘を手を下げてゐた。丁度私と會談してゐたK君が宿屋の女中の取次いだ紹介状を披いて、その夫婦者に會ふため私の室から店先へ出て行つたので、私も宿の主人に何やら聞きたい用のため、K君と共に店先の帳場のところへやつてきた。それで計らず、山稼ぎのさすらひ人夫婦を見たのであつた。その時男は日に焼けた黒い角張つた顔を上げてK君にぞんざいなお辭儀をした。女は亭主がお辭儀をしたのを見て、これはまた馬鹿丁寧にお辭儀をした。K君と一緒に店先へ現れた私にも、また何やら低い聲で言ひながら丁寧にお辭儀をした。

K君は手に握つてきた紹介状をそこで擴げて、其の男に何やら話をした。男は少し不安らしくK君を見詰めながら、此の近國ではないらしい言葉で太い聲で返辭をした。女は一と先づ目的地へ無事に着いたといふ安心のためであらう、寧ろのんきな顔をして男のうし

ろに突つ立つてゐた。女は顔も小さく殊に背丈は至つて低い。顔付きは年の割りに老けてゐるらしく見えた。

お掛けなさい、と二三度宿屋の女中や主人が言つたけれど、二人は土間に突つ立つた儘で、それには返辭もしないでゐた。

それ等の光景が、次ぎ／＼に私の記憶に現れて來た。

君達は汽車で來たのかとK君が二人に向つて尋ねたとき、男は簡単に「いゝえ、山を歩いて來ました」と答へた。いつ向を出たかと更にK君が尋ねると「はい、昨夜の夜中に立つて來ました」と答へた。十四五里ある山傳ひを、この小柄な女を連れた男は、春雨にそぼ濡れて夜半から歩きつゞけたのであつた。この問答、その時に感じた私の心持が、又はつきりと思ひ出されてきた。店先の板敷の上に小さい竹行李を細い紐で十文字にからけたのが一つ置いてあつたことも、思ひ出されてきた。

私はK君が、其の夫婦者について、昨今二人とも勢付いて働いてゐると言つた言葉を思つて、何となく舊い知り人でも訪ねるやうな氣で、小屋に近づいて行つた、勿論、その男も、その女も私を記憶してゐるやうとは思はなかつたが。

小屋は、そばに來たら思ひの外に大きかつた、板張りを主とした建物であつたが、屋根には本式に板が葺かれて其の上にごろ石が風抑へに幾つも置かれてあつたし、壁には土が塗られてあつた。後ろに草山の小高いのを背負つた山雀の南向きで、小家の前には三反程の平地があつた。竹樋で引かれた清水が、家の横に音を立て、四斗樽の水桶におち込んでゐる。

小屋の入口に立つたK君は、

「やア留守だ。……誰も居ませんよ」と言つた。

私は入口に近づいた。入口の戸には小さい錠前がおろしてあつた。こんな山中の小家にしては随分要慎が行き届いてゐることである。

「今日は二人とも炭を曳き出しに行つたんでせう。夕方でなくては歸つてきますまい」

K君はかう言つて、錠のかゝつてゐる戸を念の爲一寸開けるやうにしてみる。

「困つたな。お茶が欲しいのに」

K君はかうつぶやいたが、急に思ひ付いたらしく、小家の裏の方へ廻つて行つたが、すぐ

戻つてきて、

「裏口からはひれるかと思つたが、やはり中から縮りがしてあります。……身上持ちになつたから要領深くなつたと見えますね」

と言つて愉快さうに笑つた。私も何となく嬉しくなつて笑つた。

人氣のない留守の家の中で、小さい柱時計であらう、チン／＼と十二時を打つた。律義な二人は貯へた金で時計まで買ったかもしれない。

「時計まで買へるやうになつたのですね」
私は、かう言つた。

「いゝえ、時計は事務所から貸してあるのです。併し、ごく眞面目な夫婦ですから、だん／＼すべてが樂になるでせう」

K君は自分の配下の幸福を祝福するやうに笑顔のまゝかう答へた。

小屋の前の平地には、青々と葱と菜の畑がつくられて、それに霜除けの竹の枝が斜にさしてある。

冬の日の温く射す軒下の水桶のわきには、洗物を載せる板が敷いてあつて、その上に椀

や、土鍋などが水を張つたまゝ置いてある。

四斗樽の水桶から、水の溢れてゆく小溝を少し離れて、一かたまり寒菊の花が、黄と白と、美しく開きかけてゐるのを見た。

山小屋の二人

ふと、眼を開くと少しふるふる位寒くなつてゐた、いつ寝入つたか。

圍爐に焚いてゐた樹の塊、燃えしぶり燃え盡り、もう五日も前から黒い石ころのやうに固くこつ／＼になつてゐる樺の瘤の上つ面の黝色が、いかにも森閑と寒さうに爐の真中にくらげてゐる。燃えさしの枝四五本そのわきに落ちてゐるあたりを、ぼんやり見ながら、私は段々眠氣から醒めて板敷の上に起きあがつた。夕飯前だつたが今日は大層くたびれた餘りに、一寸板敷の上へごろりと横になつたのが其の儘寝入つてしまつたのであつた。それで起き上ると草鞋をぬいで蘆の上へすわつた。

山小屋の生活も、彼れれもう一月餘りになる。毎年の冬の仕事として、二月の間はきまつて山へ閉ぢこもつて炭を焼くのだが、今年は親爺が足を患つてゐるので、私獨りでこへのぼつてゐる、親爺の足がなほり次第來て助けてくれることにはなつてゐるが、それ

は今のところ何日のことゝも判らないのである。母親も十日に一度位の割で米や味噌を背負子に付けて持つてきてくれる。此の山は一口に云へばこゝら邊がまづ入口の部分でこれから奥へ國境の山まで八里ほど天然の雜木林が続いてゐる。山はかなり急峻で所々に斷崖や絶壁が物すごく谿の流れに臨んでゐる。秋の末から冬へかけて、山のところ／＼日あたりのよい清水の便利ある場所を選んで山小屋が造られる。此の小屋は冬がすむと取り除けて、小屋の人々は里へ下つて百姓をするのが常である。が中には本式に木組みをした小屋もあつて、これには柚や挽物師や運材の櫓引などが住んでゐる。私共の仲間は多く假小屋へ入つて炭焼をやるのが稼業だから、秋の收穫が里ですむと、すぐ入札で手に入れた炭山へ小屋構へして、炭窯を築いて焼きにかゝるのだ。小屋は三四ヶ月の爲だからさまで堅固にも出来てゐない。

疊三枚ひける程の小屋の板敷の上に蘆をひいて、その中央から少し片寄りに切つてある圍爐には自在鍵が垂れ下つて、鍋と鐵瓶とがかけはづしをするやうになつてゐる。夕飯の支度にかゝらうと、私は寒くなつた肩をすぼめながら、圍爐に火を焚きにかゝつた。その時私は棚の上のカンテラが早や點してあるのに氣がついた。誰が一體此のカンテラを點け

たのか。氣味のわるい不思議さが私を襲ってきた。

私が小屋へ歸つてきたのは三時半の頃であつた。昨日午後久しぶりで里へくだつて用を達し、今朝里の出端で三吉に出遇つた。三吉は私の従弟だが久しぶりの人に出會ひさへすれば時を構はずに酒をのめといふ癖がある。その前日が三吉の母親の命日だつたといふので、私を家の中へ呼び込んだ。私は伯母の位牌にお辭儀をしに家へあがると三吉は手早く酒を出した。私はあまり欲しいとは思はなかつたが、三吉とお俊さんの二人がしきりにすすめるので、つい五六杯飲んでしまつた。こゝでも椎茸やら煮干やら貫つて風呂敷包をふくらませて四里近くの道を山へ歸つてきたのだが、歸り着くと、前夜遅くまで双親と話し耽つて寝なかつた爲と、酒を飲んだあと山道を登つた疲れとで、知ら間に草鞋もぬがずに寝込んでしまつた。それなのに今見ると棚の上にカンテラが點つて小屋の中はうす明るくなつてゐる。私の寝込んでゐる中につけてくれたのには相違ないが、誰がこの小屋へやつてきたんだらう。

「お篠だらう。でなくば、そんな妙に親切めいたことをする者はない」とちき心づいた。併しそれにしては、こんなに暗くなる時分あの女が、どうしてこゝ

らへ來たんだらう。それにお篠ならば私を起さうなものだと又考へ直してみた。お篠でないとするれば誰だらうか。

私は、今寝入つてゐた上に私の着物が着せかけてあつたことに又氣がついた。風邪をひかぬやうにとの親切に相違ない此の仕打は、やはりお篠だらう。

「お篠が來てこんなことをして、私を起さずどこかへ行つたんだらう」

お篠の仕業だと思ふと、妙に壓さへつけられるやうな、堪らない不快がむら／＼と私の心にはびこつてきた。それでカンテラの灯と、私の上にかけてあつた私の寝衣とを見ながら、

「まだそこら邊に居るんぢやないか」
と思つてみた。

今迄にこんな暗くなつてきたことはない。何しろお篠の小屋からこゝまでは山徑二里近くもある。それも大河原の崖の上の細い滑らかな水々した岩道を、こんな夕方かけてやってくる筈もないと私はこの小屋からお篠の小屋までの途中を、順々に描いてみた。佐十の小屋へ來た歸りに覗いて行つたのかも知れない、さうすればもう歸り道の途中を歩いてゐ

るのであらう。

私はマツチを擦つて柴を燃やし始めた。水は小屋の入口にあるから、それを汲んで鍋にさし、昨日食ひ残しの味噌汁に煮込んだ雑炊飯を温めに掛つた。

「誰れでもない、お篠だつたらそれでもいい。嫌な奴だが向うでひとりやつてくれたんだ。頼んだわけぢやアないし」

私は獨り斯う此の不審を片づけて、茶碗を箱から取り出して飯を食ひにかゝつた。飯を食ひながら、圍爐の片隅の暗いカンテラの光で隅につくねてある黒い物を見た。自分はそれを引き寄せて見ると竹の皮につゝんだ澤庵漬の大根が三本入れてあつた。

「愈々お篠だ。あいつが親切を俺に賣りつけるんだ」

私はその竹の皮を元のところへ押しやつて、さく／＼と雑炊を掻つ込んだ。

私は飯のあとですぐ寝ようと思つたが晝寝をした眼がまだとても眠れさうにもないので風呂敷をあけて中から或る雑誌を取り出した、そしてすぐ小説をよみはじめた。その小説は、若い男と年嵩な女との戀が日に日に深くなつてくる有様が書いてあつた、日がかさなるにつれて男は年嵩な女の肉の豊饒に憎悪を覚えてきた心持が書いてあつた。そして憎悪

を感じながらもその女の興へてくれる遊戯や満足を悦び食つて居た。男は自身達の戀といふものは、何の意味もない肉ばかりのものであることに気がついて、非常な不快を感じながら女の強い力に引きずられてゆく有様が随分露骨にかいてあつた。その中にこんな風の敘述があつた。

「男は其の夜女の襟脚を目に描いた。毛深い襟脚も今ではなぜか男には不快な一つに思へた。そして其の髪の毛の間に白粉の洗ひ残りの滓がよこれ付いた上に、又塗りつけた白いものが固りついたやうに濃く見える汚さを、支那人町の年増女に聯想したりした。以前居たことのある居留地の支那人町の油くさい豚のやうな女が彼の目の前に見えるやうになつた。自分の女が支那服を着てゐる姿なども目に描いた。併し男はこんなことを考へながら一方自分の女に對して近頃感じてゐる憎悪にちかい厭はしさの正體を點検してみた。果して自分はこの女が嫌になつたのかどうかと……」

こんなやうな記述がつゞいてゐるところへ來たとき、私はその雑誌を下においた。そしてすぐお篠を思つた。忌らしい氣味のわるい物をうつかり見たときの後悔を覚えながら、又すぐその雑誌を手にとつた。

雨は夜あけ近くから降り出したが、この頃に珍らしく妙に蒸し／＼した生温るい日となつた。併しこの連山はもう冬の姿となつてゐる。背にも谷にも朴の葉は黄色くなつておち始めた。栃の葉も大きな廣々した掌のやうなのを地へ明るく撒きちらした。冬の山の樹々のうちで殊に目立つのはこの二いろの木であつた。他の槭の葉、樺の葉、いろ／＼の雑木の葉もそれ／＼の紅葉や褐色の葉や黄色の葉を梢にも地上にも飾つてゐたが、朴と栃の大きい葉は山の冬を一番判然と色どつて美しいものであつた。

私の小屋のすぐうしろは此の二つの樹木の大きいのが五六本集つて立つてゐた。それで枝にまだ残つてゐる葉や地上に散らばつた葉に音を立て、降る雨は騒々しいものである。

雨の日も私共山稼ぎの生活は忙しく、殆ど日の暮れるまで窯の周囲で働いた。木寄せは十分にやつてあるので、その日は目塗りをやつたり、出してあつた炭を吠に入れたりしたのである。東向きに造つてある私の小屋は、四時頃にはもう眞暗である。私は二丁程離れた佐十の小屋へ風呂を貰ひにゆく筈に約束してあつたけれど、それも面倒になつたのと、昨日里から持つてきた今月の雑誌が讀みたいので、風呂はやめにして早く夕飯を食べた。

雨は夕暮になつて烈しく小屋の板張を打つた。朴や栃の葉の音も益々ひどくなつてきた。佐十はこれでは風呂を焚くことはやめたかも知れない。佐十の小屋は本立になつてゐて、風呂小屋は谷の大きな石を背にして少し間を置いて建てられてゐる。

私の小屋は中腹の少し平らな地盤を利用して、前に伐り残した十五六本の雑木を風除けに建てたので、佐十の小屋に比べると餘程風あても強く、雨も烈しく聞えるのであつた。私は雨の音の餘り激しくなつたので、カンテラを手にして小屋の中を調べてみた、右の隅の板屋根の隙間から板壁を傳つた雨水が、蘆の上を圍爐の方へ少し流れてきてゐる。私は古外套（これは農林學校時代のものだ）を頭から引つ被つて小屋を出た。そして裏山へ廻つて三四枚の板と吠の菰とで漸く雨漏りを禦ぎ止めた。

雨の音の物すごい小屋で、私は元氣を付けやうとやゝ高聲に歌をうたひながら圍爐に柴をくべた。そしてカンテラの灯をなほして雑誌を讀みにかゝつた。カンテラの暗い光で雑誌をよむことも此頃は大分なれてきた。

すると、又どうしたのかお篠のことを思ひ出した。お篠の大きい燃えるやうな眼、丸い肥えた力強い顔、赤い活々とした頬、太い手足、それから粘るやうな甘えるやうな又押し

迫るやうな物言ひ、それ等が私に特に或る意味を以て近寄つてくる此の頃の様子を判然と目に描かせた。今年山へのぼつてからお篠は、二日目か三日目には別段用もないのに私の小屋へやつてきた。そしてしきりに私に近づかうとつとめてゐる。すべて山小屋に住んで稼ぐ連中は、里を遠く離れて不自由な不勝ちな生活をする身の上であるから、お互に頼り合ひ助け合ふのが慣ひで、殊に私は只獨り山へはひつたのであるから、餘計人がなつかしかつた。本来私は隣郡の農林學校を済してから、何處かの役所へ勤めに出たいといふ考へであつたのだが、兄が百姓仕事を嫌つて都會へ逃げて行つたのと父親が神經痛で思ふやうに働けない爲に、餘儀なく其儘家に止まつて畑や山に出かけることになつた。去年は山小屋へは父親と一緒にのぼつてきてゐたので淋しくもなかつたが、ことしは只獨りなので、山で出逢ふ人々とは誰れ彼れの差別なく懇意に話をした。そしていろ／＼な小屋生活に必要なことを教へて貰つたりした。お篠も懇意にした中の一人であつたが、彼はいつの間にか狎々しく私に近付いてきて、そして時々妙な素振をして私の氣を引いてみるやうにさへし始めた。私はそれと心づく馬鹿々々しいのと有り難迷惑なので、急に外々しい態度を示して彼から遠ざからうとつとめた。けれど彼はどう思つてゐるのか——恐らく肉の享樂を野

獸のやうに激しく知つてゐる年増女の、自身より若い男子に對する遊戯的の強烈な衝動に堪へ兼ねて——一層私に粘りついて來るのを見た。私は一思ひに彼を罵り恥しめてやらうかとも思つたが、それも何となく馬鹿々々しいのと、も一つは彼が私の心持を知つて幾分づゝ婉曲にその目的を達しやうと方針を改めてきたのに其機會を失つて、其のまゝ今日まで相變らずこの小屋へ繁々出入りするがまゝになつてゐる。お篠の男狂ひと云つてこの山でも随分評判になつてゐるのだから、私は山の人々が私とお篠との間を既にいろ／＼に噂してゐるであらうと思ふと、どうにもかうにも堪らない不快を覺えたが、さりとて際立つてどう處置して彼を逐ひ拂ふといふ程の手段もなく、只出來るだけこちらからは物も云はず遠のいてゐる事に努めてゐたのであつた。

昨夕のカンテラや竹の皮づゝみや私の上にかけて行つた寢衣、それ等のことを思ふとお篠は又急に私に近づかうといふ心を起してゐるのではないだらうか。私は學校時代から文學雜誌などを讀み耽つて、兩性の間のことに就いても、世間見ずの山奥の青年なりに相應の理想を抱いてゐたから、年嵩な女の、見るから肉の塊かたまりとしか思へぬお篠の此の無作法な態度には烈しい憤りを感じるのである。

「今度あいつが俺に猥りがましい態度や言葉を示したら、構ふことはない擲りつけて動けぬやうな目に遭せてやらう」

私は雑誌を手にしながら、こんなことをいつの間にか思ひ詰めてゐた。

お篠にはいろ／＼の男があつたとみんなが云ふ。その中で最近關係してゐた隣縣生れの木挽はこの夏、國へ用が出来たと云つて歸つたきり戻つてこない。お篠はこのことに付いて臆面もなく私に斯う語つた。

「あいつには國に唄があるのさ。私に嫌はれたものだから逃げ出したんだよ。なにあんな奴にいつまで相手になつてゐられるものか、あれはね、まだ山のこの近所に小屋が三本しかない頃、外に若い男つ氣がなくて、佐十の爺さんや挽物屋の目つかちの外ゐなかつた時に、わたしの小屋のわきへ小屋がけをして仕事をしたから、つい相手にもなつたのさ。もうあいつが戻つてきたつて相手にもしなければ赤の他人さね」

私が又こんなことを考へ出してゐると、風ではさ／＼と菰が小屋の外であほり出した。雨もひどく風さへ加はつてきたのである。私は丁度窯の煙の色見をしに出る時刻になつたので、又外套を被つて外に出た。

眞暗な山は、鳴り騒ぐ風と雨の音ばかりで、谷の響も全く聞えない。常の夜のやうな身に迫る深い寂しさは無く、凄い怖しさが四圍を絶え間なく襲つて來た。小屋の外を静かに廻つて窯の前へ出た。窯の煙突から出る煙の色は思ふ通りであつた。焚口を覗いてから私は又小屋の方へ歸つてきた。

丁度其時に小屋へ人影がついと入つたのを見た、私はそれがお篠であることを直感して立ちすくんだ。こんな雨風の夜にお篠が來た。どうするか、小屋から出てくるか。それとも私の歸るのを待つてゐるか。

私は激しい厭悪と氣味悪さと憤りとを感じながら、一寸佇んで小屋の方を窺つて居たが、すぐ元氣をつけてすた／＼と小屋へ近よつた。果してお篠が蘆を雨除けに頭から引つかぶつて立つてゐた。私は狭い入口にお篠をわざと押しつけるやうに立つた。

「なんだ……お篠さんか」

お篠は私を見るとにつと笑つた、白い齒並みを獣のやうに見せた。そして身につけてゐた蘆を脱いだ。下には裾をまくり上げて圓々した膝頭を露はに出してゐた。藁草履をはいた足のつま先は、岩角で擦りむいたらしく血を流してゐるのを見た。

「窯の見廻りをしておいでかね、ひどい雨だ、こんなに濡れてしまった」
私はつとめて静かに、

「こんな晩に、どこへ行つたんだね」

と外事に訊ねてみた。お篠は私を見ながら、

「良一さん、まあ上らして下さいよ、こんなにびしょくになつてしまつたから」

と、もう草履を脱いで足を拭いてゐる。お篠は上がると着物を襟のところで、ぐいとくつろげるやうにして胸から乳のあたりを出した。そして手拭で雨のしぶきを拭きはじめた。私は窃むやうにお篠の襟と顔を見た。まだ塗りたての白粉がほの暗く光つてゐるカンテラの下に私の目に入つた。私は不快の中にも或る動搖を感じながら素知らぬ態で圍爐の側に腰を卸した。

「今日は佐十さんのところへ来て風呂を貰つたのですよ」

お篠は、粗野な言葉に鹿爪らしい言葉を交ぜて話すのが常であつて、その舉動も同じく馴々しい様子をしたり又急におとなしやかな風をして見せるのであつた。

「さうか」

私はお篠の體から蒸れるやうに匂つてくる安おしろいの香を嗅ぎながら、いつの間にか彼の視線を避けるやうにして、焚火をなほしてゐた。お篠は私の眞向に狭い板敷へすわつた。小屋の壁へ肩を靠せるやうにしてだらしたく膝をくづしてゐるのが、いかにも馴々しく圖々しい様子に見えた。

「昨日の夕方、良一さんはよく寝てゐたねえ。私がカンテラをつけたのを知つてないでせう………。風邪をひくといけないと思つてね、着物をかけておいたのも知らなかつたでせう」

お篠は粘つくやうな、吸ひ付くやうな風に斯う云つて、はしやいだ聲で笑つた。

「おいしくないけれどね、大根漬を持つてきておいて行つたが、食べてくれましたか」

「あゝ、さうだつたか、まだ食ひはしない……」

私は、これからお篠はこの風雨の夜にいつまで私の小屋にゐるつもりかと思つた、何と云つて追つ拂はうかとその言葉を考へた。その機會も工夫した。相手は、私がそんなことを頭の中でしきりに考へてゐるとは氣のつかぬ様子で、私が浮かぬ顔をして圍爐の灰をつついてゐる額の傍へその丸々した顔を突き出して、同じやうに火を弄りはじめた。

「昨日はあれから歸つただけけれど、途中で日が暮れてしまった」

お篠は油くさい髪を私の鼻の先へ出して火を吹き立てた。

「今夜はこの雨では仕方がないから、佐十さんの小屋か良一さんの小屋に泊めて貰ふ外ないんだけど……泊めてくれますか」

お篠は斯う本音を吐いた。

この時私は異様の音を小屋の隅に聞いた。それは風のために板が一枚めくり起きてそこから雨が吹き込んできたのであつた。

「やア、吹き込んできたな」

と私は突つ立つた。小屋の内部からではどうすることも出来ないで、私はすぐ外套を被つて外へ出た。するとお篠も續いて出てきた。外へ出て見ると風雨の狂暴は、とても小屋の中で思つてゐた時とは較べものにならぬ猛烈さであつた。樹々の枝は折れるばかり鳴りさわいで、雨に濡れ重つた葉は梢からべたべたと私の體へ吹きつけて來た。私は暗い中に——こんな暴風雨の夜は時々妙に雲が薄れて青白いやうな影が闇を照らす中に、小屋の雨漏を禦ぐために働いた。お篠も板をかついだり菰をあてたり、づぶ濡れになつて一緒に

働いた。山に住み馴れた壯健な彼は、その男のやうな體力で、却つて私よりは小屋の破壊防禦に力を盡してゐた、實際この時は雨漏の事件といふよりは小屋の倒壊に對する危険を未然に禦がうとする事に二人とも懸命になつてゐたのである。二人はづぶくに濡れて小屋へ歸つてきた。この仕事の最中私は、お篠にいろいろのことを頼んだ。あの板を押へてくれ、あの菰を引張れ、その丸太を暫く押して居てくれと囁鳴つた。お篠は猪のやうに無鐵砲に無茶苦茶に力任せに働いて呉れた。

小屋に入つて、二人は濡れた體を拭くために殆ど同時に丸裸になつた。

お篠の白粉はまだらに剝けて、赤い顔は力業のために火のやうにのぼせてゐる。髪の毛の亂れた顔に元氣のよい圓い大きな眼が勢よく燃えてゐる。私はお篠の豊熟した全身を見て、其の健康に羨望を感じる外、不快も壓迫も全く忘れてゐた。小屋の危険を防いでくれた恩人と云つたやうな感謝も幾分交じつてゐた。

そこで前よりは氣樂な暢氣な心持になつて、私の方から二言三言語つた後、二人は又圍爐を中に向ひ合つて腰をおろした。二人は肩から着物を引つかけたまゝ茶碗に湯をついでは續け様に呑んだ。

雨と風とは益々吹き募つてきた。小屋は少しも油断が出来ぬ状態となつた。殊に私はまだ山馴れぬせいから突然こんな恐を覺えた。それは窯場のすぐ後方の崖から峰へかけてのかなり急峻な伐り跡の斜面は土層が浅く、こゝに若し山崩れが勃發したらその泥流は一直線にこの小屋へかゝつてくる。この恐に私の全身は思はず緊張して咄嗟にお篠を見詰めた。

「あの窯場のうしろの伐り跡が、山崩れをしやすいだらうか」

お篠は一寸口籠つた。そして耳を欬て、外の風雨を聞いてゐたが、

「山崩れが出たら、この小屋は一息に谷底へ落ちてしまふ」

少し間をおいて又云つた。

「風が吹くし、雨が強いから、何とも云へない。此の前に鹿ヶ澤の山小屋が、谷へ落ちたのも丁度こんな晩だつて」

斯う云ふ中にも風は益々募つた。雨も烈しくなつた。

私はこの夜をお篠と二人、まんじりとせずにかかしてしまつた。狂暴の天象に對して唯一の協力をお篠に頼りつゝ、天象の大きい力と、脅威かされる人間の弱さと、人間同志の

間に現滅する愛着や憎悪を思ひながら。

お篠はどういふ心持で此の一夜を終始したであらうか。今はこれを知る由もない。——其翌朝、お篠は二里を隔てた山腹の自身の小屋と父親の運命を案じてまだ吹き降りのすさまじい中を、その強壯な肉體を恃んで、私の止めるのも聞かず強ひて歸途に着いた。が、大河原といふ高い崖の細道から滑りおちて、谷の岩角に、其惱ましい程豊熟した肉を打ちくだいてしまつたのである。

以上の話を、次第に高まつてくる興奮を抑へながら其の眞摯な青年は靜かに語り終つて、私の顔を見た。青年の眼には白く光る涙があつた。山間の古寺に二三日泊り込みの用をしにやつてきた私に、夜更けて、

「何か山中の話か」

と云はれて、其の青年（村方から私の公務を手助けするために日々此の寺にきてくれた青年）が「つまらない事ですがお聞き下さいませんか」

と云つて私に聞かせて呉れた物語が即ち此の一章である。

瓜坊

114

「今日は、瓜坊を拾いましたよ」

とYが、私の顔を見るなり得意氣に言つた。

「ほう、瓜坊。瓜坊が一體どこに居たね」

「本宮山に、もうすぐといふところでした。晝少し過ぎに、峰筋へ懸つて隣郡との境界をやつてゐる時でした」

Yは巻ゲートルをほどきながら、測量機械を箱に藏めてゐる同行のN助手を顧みた。

瓜坊とは、野猪の仔の當歳をいふのである。川瀬林學博士が狩獵學の講義の時に、野猪は瓜坊の時が一番旨いものだと言はれた。なぜ瓜坊といふのかと言へば、形が丁度眞桑瓜のやうで、且つその時分は背の毛が濃淡を有し縦に太い縞をなしてゐるのが、頗る瓜に似てゐるからだと言明された。その背にある濃淡の縞は、程なく消えてしまつて一樣の色に

なり、普通の野猪の粗硬な毛に變つてしまふのだと言つて、博士は瓜坊のうまいことを大に學生達に吹聴した。だから、それ以來私も、瓜坊を喰べてみたいと思つてゐた。けれども野猪は動物園でも見られるし、その肉を食ふ機會は山中に於て時々在つたものの、瓜坊を見、そのうまいと言ふ肉にありつくことは未だ嘗て全く無かつたのである。

「瓜坊は馬鹿にうまいものだといふ話だが、そいつはいゝものを捕つたね……どういふやうにして捕つたのだね」

と私は、Yの方を見て興味ふかくさう云つた。

「それが全く不意に見つかつたんです、丁度トランシットを立て、ボールの位置もきまり、邪魔になる見透しの枝を人夫に伐らしてゐるときでした。すぐわきの峰で、しきりに一羽の鳶が空へ舞ひ上つたり又山へ降りたりしてゐるのが眼に付いたのです。飛び降りたと思ふと、ばあと舞ひ上る。舞ひあがつたと思ふとすぐ勢よく降りてきて草の中へかくれる。それを何遍も何遍もやつてゐるのです。どうもこれは可怪しいぞと思つて、人夫にそこへ行つて見ろと言ひ付けたのです。そうして私もNもすぐあとから馳けて行きました。すると、それは本宮山へゆく山徑から一寸横へ入つた草のうすい所で、瓜坊が一疋倒れて

115

ゐるのを見付けました。調べて見るとまだやられた許りのところで、肩の邊に大きな穴が
あけられてゐるのです。鳶の奴にそこをやられたと見えますよ』

『鳶にそんな力があるのかなア』

『あると見えますね。……私共がそこへ行つたときは、其鳥はどこかへ飛んで行つて
しまひましたが、確かに鳶でした。どうも鷹ではなかつたやうです』

『それで、それからどうしたね』

『人夫たちに山徑まで引つ張りださせました。瓜坊だから、こいつはうまいと人夫が皆
さう言ひました』

『どこに置いて在るね。下かい』

と私は、もう腰を浮かして宿屋の店先へ下りて行かうとした。

『いゝえ。こゝへは持つてきませんでした』

『なアんだ。捨てゝきたのか』

『いゝえ、捨てやしません』

『瓜坊は大變にうまいと言ふ話なのに、どこに置いて來たんだい』

『持つて來ようと思ひましたが、何しろ仕事の最中だし、いくら瓜坊でも相應に大きく
なつてゐるので目方もありますから、山徑まで引つ張り出したものの、どうしようかとN
君とも相談をしました。さうすると、丁度そこへ本宮山の方から何を商賣にする人か判ら
ないが、一人通りかゝりましたが、瓜坊を見てすぐこいつは鷹にやられたんだねと言ひま
した。瓜坊は山をあるいてゐる時、鷹にやられることがあるものだと思ひますね』

私は始めて聞いた此の瓜坊と鷹との闘争を想像した。本宮山の裏山の樹林を出端れた草
地にさまよひ出た瓜坊を鋭い嘴に懸けた鷹——Yは鳶といふ——の勝利が眼に浮かんだ。
夏の日の光の輝く山の草地に猛鳥と猛獸の仔の闘ひは想ふにかなり激しいものであつたで
あらう。それとも瓜坊は間髪を容れぬ不意の一撃にやられたか。

『その男が、是非瓜坊を賣つてくれと云ふのです、しかし私共は賣るのも變だし、又惜
しくもあると思つて大ぶん考へたのですが、何しろ其の場所が峰の境界線ですし、人夫達
も今日は丁度いつもより一名少いのですし、我々二人がそれをついで歸つてくるわけに
も行かず、惜しいとは思つたがその男に呉れてやりました』

『なんだ、そうか……然し、それはどうも惜しかつたね。なんとか方法はなかつたか』

なア』

と私は自分が今日測量の現場に行かず宿に残つて内業をしてゐたことを後悔した。

『その男は瓜坊を手際よく手拭で肩に背負ひつけて、身軽にさつさと峰の徑を南へさしてゆきました。別れる時に瓜坊の禮だといつて一圓出しました。こんなものは要らないと言つたが、その男は只貰つて行つては自分の氣がすまないと強情に言ひ張つてたうとう一圓を無理に押し付けて行つてしまつたんです』

今時分のことだから山の獵師ではあるまいが、とにかく獵馴れた男に相違ないと私は瓜坊をかついで去つたその男のことを想像した。

『今日もすいぶん暑くつて閉口でした。何しろ、あの邊は傾斜が急だし、岩が多くて登るにも下りるにも両手を使はなくてはならないんですからね』

Yは汗で濡れた襯衣をぬいで、それを窓の手摺にかけながら、本宮山の方角にあたる空を仰いだ。窓の外はもうだいぶん暗くなつた夕闇に、押し迫る山裾の木立がこんもりと奥ふかく見えて居る。

『此の一圓で、今夜はビールでもやりませうか。いかゞです』

Yは愉快さうに聲を上げた。

『ビール。いゝね。瓜坊がビールに代るのも面白い。つまり嵩の贈物といふわけだね』
私もYも賑かに笑ひ合つた。

涼しい風が窓を吹いて製圖中の大きな畫紙や、測量機械や茶道具や着物やの散らかつてゐる一室は、もう洋燈あんがの來るのを待つ時刻となつた。

五 郎 助

炭窯は立派な構造であつた。それは美濃式と呼ばれるものだとのことであつた。小屋は炭窯の少し上の方に建てられて居た。私達は眞夏の光がきら／＼と木々の葉を洩れて射す澤道を傳つてその小屋に案内された。そこで晝めしの辨當を使はうとするのである。

小屋は、これも炭窯の立派なのに相應したものであつた。假小屋ではあるが、柱も屋根もしつかりした材料が用ひられてゐた、壁は山小屋のこととて板張りであるが新聞紙が貼つてあり、ところ／＼に石版畫や雑誌の口繪らしいものが貼つてあつた。

八畳二間ほどのその小屋はひろ／＼として、谷川に面した窓は大きく涼しく開かれてあつた。私達はその窓のわきに座を占めた。そして辨當を大層旨しく味つた。案内役の人が背につけてきたビールを茶碗についでくれた。私達は飯を頬張りながらビールの澁さをよろこんだ。

小屋の主人は木を伐りに山へ行つて留守であつた。おかみさんが茶を沸かして私達を接待して呉れた。案内役の人の話によると、この小屋の主人は美濃から來た者で、炭焼は極めて巧者であり眞面目な稼人であるといふことであつた。永い間稼ぎ溜めた金が相應に成つたが、先年銀行からその一部を引き出して、この奥の隣郡に杉扁柏の植ゑてある山を一枚買つたさうだと云ふことが其の話に付け加へられた。

私達を今日この山林に案内して炭窯や炭材の説明をしてくれる人は、この村の炭問屋の主人で、炭焼を幾人も配下に持ち、毎年炭材林をそこ／＼に買入れて炭を焼かせるのを家業とする人である。だから、この小屋の主人のことも好く知つてゐるのであつた。

昨今は丁度窯の方は休みであつて、炭焼の人々は皆山で木を伐つたり寄せたりしてゐる。この澤は浅いから二組しか入れてないとのことであつた。私達は食後涼しい風を賞めながらこの山の林相のことを語り合つた、そこへこの小屋の主人が歸つてきた。炭焼らしい頑丈な體格の四十五六の男で、木蔭で働くせいか色は白く、にこ／＼した顔付で、私達につましやかな挨拶をした。

私達は尙奥の方の山林を調べようと、その小屋を出た。そしてすぐ下に在る道へおりて

行つた。すると谷川のふちの大きな石の上に、鶏の巢箱のやうにこしらへた木箱が一つ
せてあるのを目にした。何が入れてあるのかと中を覗いてみると、思ひがけなく黒い綿毛
のかたまりのやうな鳥が一羽すくんでゐた。

122

「ごろすけの子です。この奥で木の下に落ちて居たのをうちの子供が拾つてきたのです」
と炭焼の男が、私達のうしろで笑ひながら教へた。

緑ふかい潤葉樹林の山裾を音立て、流れる谷川のふちに、ふくろふの雛はせまい箱の中
に、黄いろい眼をまん圓くして、ちつと唯静まり返へつてゐた。

野猪の角力場

野猪の角力場を見たのは全く偶然であつた。もつともいくら山馴れた人でもそれを見よ
うと企て、探し歩いたとて、それが旨く見付かるものでないことは勿論である。

私は、「野猪の角力場」といふ名稱も、まるで知らなかつたし、それが自分の腰をかけ
てゐる木の伐り株の前方に在らうなどとは思ひ設けなかつた。

「やア、こんなところに野猪の角力場が在つた。まだ角力を取つたばかりと見えて、土
がほつこほつこしてゐる」

突然に斯う山案内の村人が、私に教へてくれたのである。私の腰をかけたのは、村境の
山の背筋で、明るく伐り開かれた五六坪の空地であつた。そこに在る松の伐り株は、さう
新らしいものではなく、吹き出た脂の白く凝り着いた株の伐口も少し朽ちかけてゐた。

腰をかけて、ふと氣がついたのはその空地の土が軟くもくくと掘り起され、丁度鎌で

123

返へしかけた上を子供でも遊んで踏みつけた程になつてゐることであつた。それを眺めてゐる時に山案内の人が野猪の角力場と云つたのである。

すぐ傍らの峰筋には松林が続き、山腹から谷へかけて、この村も、となり村も、林はかなり密にいゝ林相を爲してゐるが、空地のわきの下草は日當りの加減か、萱が雑草を抽いて、銀色の尾花が立つてゐた。

野猪の角力場は、尾花の美しく揃つた中にかこまれ一坪ぐらゐのひろさにくぎられてゐるのである。

『野猪の角力場と云つて、野猪がほんとに角力を取るのかね』
と私はたづねながら、更に珍らしくその邊を見廻した。

『山の中の日當りのいゝ、土の軟いところを捜して、奴らが子供を連れて遊びにくるんです。集つて角力を取るからこんな土が起されてしまふんですよ。……ほい、きつと今年には野猪が多いぞ。去年はどうだつたのう』
と、その村人は、他の村人を顧みた。

『去年も随分里へ出てきたぞい。畑をわやくやくにされた人も多かつたぞい。……こゝば

かりぢやアない。近い村はどこもかしこも此の二三年野猪が殖えたと云つて困つとるがなア。手負の大猪が牙へ赤兒を着物のまゝ引つかけて、桑畑の中を突つ走つて桑の木で赤兒をめちやく／＼にして逃げて行くのを鐵砲も打てず唯わいわい騒いでどうも仕得なんだと長澤の者が話してゐたぞい』

驚いて尙よく聞いてみると、赤兒は親が近くの畑のわきへ、籠か何かに入れて遊ばして置いたのを手負猪が追はれて逃げる途端に偶然か故意か牙へ懸けてつるしたまゝ走つただと云ふ説明である。

『角力場』を見ながら野猪の習性を餘念なく可愛がつてゐた私は、この話を聞くとたちまち野猪の悍猛を憎み恐れた。しかし、不思議なことに、私は足もとの彼等の角力場を、ぢつと見て居るうちに、その憎しみはだん／＼うすらいで行つた。一體野猪は、どういふ形をして角力をとるのか、鹿は角で押し合ふがその姿は整つてゐる、犬が日向で背の蚤をとるときころ／＼と地上をころげるが、野猪も鹿のやうに押し合ふのか、それとも犬のやうにころげて蚤でも取るのか。角力と云つても二疋が力を競ふのではなく、一疋づゝ唯ころげて遊ぶのではないだらうか。

私は少憩の後立ち上つた。私等は今日の仕事であるところの境界線踏査をつゞけるのである。日は爽かに輝いて立ちならぶ松林も、野猪の角力場のまはりに茂つてゐる尾花も、愈々美しく澄み渡つた大空の色にすが／＼しく映つてゐた。

「蝨が着いてるぞね。だに、が……」

村人が私の洋服の膝のあたりを見て指さした。成程、六七疋蝨が平べたく食いついてゐる。

「野猪の蝨だぞね、それは」

「角力場には澤山蝨を落して行くものだつて云ひますぞね」

私は笑ひながら丁寧に野猪の蝨を一つ／＼指で摘み捨てた。

赤兒を牙に引き懸けた儘、桑の木を踏み倒し押倒し逃げたといふ先刻の話は、誇張した所謂「話半分の話」に相違ない、と斯う此の時にふと私は考へた。——角力場といふことから野猪をすつかりお伽噺の中のものにして、私はいつの間にか野猪の爲に辯護する氣になつてゐたのである。

月下の登山

涼しい風の吹き通す店先きの土間に、三四脚置かれた幅の廣い大きな縁臺には誰も腰を掛けて居なかつた。

道には蒼味を帯びた月光が、水のやうに溢れてゐた。小暗い框に草履をはいて、自分はKと共に土間の縁臺のあひだを抜けて軒下へ出た。その時、うしろから、

「提灯をお持ちしておいでませう」

と宿の人が聲をかけた。

「山門の近所や何かは、杉の木が深いから、お月様も地面までは射しませんでなもし、おあぶなうおあります」

斯う言ひながら、宿の若い内儀は、いそがしく下駄を突かけて我々を追つて外へ出てきた。

明るい道路に立つて、湖面の如く澄んだ大空の色を仰いでゐた自分は、再び軒下へ戻つて提灯を受け取つた。マツチはKが掌へ握つた。自分は先きに立つてお山の方へ歩き出した。

128

山下の家々は、涼しく夜を領して静まり返へつてゐる。宿から少しの間、續いて家がある。それから半町ほど杜絶えて又五六戸軒を連ねる。その家々は道に面して多く格子戸造りになつてゐる。中には店のやうな構のものもあつた。然し多くは奥の方に灯が點つてゐて人聲も稀れに思はれた。麥の收穫に忙しい山の人々は、昨日まで三日つづきの雨後である今日の日和に、朝から働き疲れて、もう大抵は寝てゐるのであらう。——それでも名物鳳鳴石の視石を賣る家は、暗いながら店先に灯がつけてあつた。

愈々お山登りといふ前の右側に畑が在つて、其の奥にお寺が見える。月の光は古びたお堂の半面を、雪明りのやうに白白と照らして居た。畑は桑畑であらう。伸び揃つた葉が、じつと物凄いほどに静まつて、お寺の前から横へかけて山麓のなぞへに其の畑は傾いて見えた。お寺のうしろは杉林である。自分等は桑畑のところまで提灯に火を點した。風は無かつたけれど三本目のマツチでやうやく蠟燭にほさきを移せた。提灯はKが持つ。提灯には

古風に「門谷小まつや」と書いてあつた。

お寺の山へ入ると、すぐ兩側は仰ぐ程の杉木立である。一抱も、又其れ以上も太い幹がすくすくと列んだ下に參道がある。ちらつく地上の月光は、いろ／＼の形をして鋭く見えたら。杉の落葉と、岩で疊んだ敷石とがKの手の提灯の周圍にほの／＼と現れる。それを便りに歩いて行く。葉を洩れる青い光と、深い涼しい闇に打ち交じつた蠟燭の火は、赤々と妙に人を慕ふいきもの如く感じられる。古びてゐる提灯の色も、ほそい書體で上手に記された「小まつや」の文字も、なつかしいものに思へた。

山門まゝは程近かつた。芭蕉の、

木からしに岩吹き尖る杉間かな。

の有名な、此の山の句碑は、Kが提灯を差し寄せて見せたので、苔に濡れてゐる石面に、文字も在り／＼と読み得られた。月光は山門の丹塗の上に愈々冴えて見えた。自分はお脇立の前に立つて中を窺ふ、闇に馴れた眼に、あたりが清らかに嚴かに映つた。自分はこの三河鳳來寺山に既に數度參詣してゐる。然し夜に入つての登山は、今夜が始めてであつた。杉の木立に護られた谿道に寂び籠つた山門は、參詣の都度足を止めて旅情を恣にする山中

129

の勝區である。Kが高くかさす提灯に、太い柱の上部と幽かながら簷先も目に入った——少し憩つて後、門をくゞつて又石坂をのぼる。

心付いて見ると月の光に照らし出されて居る杉の眞直な幹は、皆黒々と太かつた。差し交す兩側の下枝の間から、月は處々青白い光を杉の葉先へと流してゐる。此の邊の荒びた岩道を、一歩づつ選り登るには、唯提灯のひかりが便りであつた。

鳳來寺山は、昔は眞言、天台二宗の寺院僧坊が數多山中に在つて、山姿の奇峭風光の明媚に據り、大に宗門の威容を張つたところであると云ふが、今は其の名残も無く、鳳來寺の本堂と醫王院と呼ぶ一字とが山中に遺つてゐるのみである。しかも其の鳳來寺本堂は數年前の炎上以後いまだ再建に到らず、中腹の醫王院に假りに本尊を移し寺務を執つてゐる有様であつた。昔の寺院僧坊の趾として、登つてゆく道の兩側にところ／＼、僅かの平地が在つた。そこには夏草が高く低く茂つてゐる。草の蔭に礎石も隠れてゐるであらう。石坂は石段となつて、次第に峻はしくなつた。二人は黙々として登る。寒い程の夜氣にも、額のあたりは汗が浮ぶ。木立の疎密によつて二人は提灯をうとんど又それに親しんで行つた。そのうちに醫王院の前へ來た。

見ると、月光を斜に受けた醫王院の、明け放つた客間には灯が幾つも點つてゐる。今日夕刻から此のお寺には法事があると、先刻宿の人が語つて居た。谷に面した縁側にゐる人の話し聲が、山の夜の静けさに耳立つて聞える、自分等は又のぼり始めた。早く東照宮のほとりに着きたい。月の光は愈々明るく、折から夜風が樹々の葉に音を立てて渡り出した。

この時、明かに、遠く鳥の鳴くのが耳に入った。待ち兼ねた鳴音である。

『あ、鳴いた』

二人は、同時に斯う言つた

『あれだ。あれが佛法僧だ……向の峰のやうだつたね……もう鳴き出す頃だと思つて居たが、一つ鳴き出すと、方々で鳴くことがある。……あゝ、又鳴いた』

Kは立止つて、太く沈んだ聲で、ぼつり／＼斯う言葉を續けた。二人が足を止めたところは、丁度谷に望んだ石段であつた。大きな岩塊が一つ石段に押し迫つて傾いてゐる。その岩塊に寄り沿つて自分は鳥の聲を目當てに向ひの峰を眺めた。前方には幸ひ目を遮る梢も無い。今鳥の鳴いたのは、此の山續きの尾根の一つで、木立の深く茂つてゐるのが、月の

光に鮮かに見える。——自分の立つ位置からさしわたし十町程の谿谷が其の間に挟まれてゐる。

鳥は二聲鳴いて、あとを續けない。暫く待つて居たがその甲斐はなかつた。そこで今度は自分が先に立ち、石段をよぢ登つた。此邊は鳳來寺山としての八合目九合目に當り、急峻な石段には鐵の手摺りが架け渡して在つた。——本堂の焼け跡に出る少し前に、平地があつた筈と思つてゐたら、果して草の茂つた廣場があつた。そこには大きな濡れ佛の坐像がある。唐銅の膚はだかに月は眞面まへに水の如き光を注いでゐる。山も高く夜も更けて、風はひや／＼と木の葉を揺がせ、廣場の草の上に渡つて居る。Kは手にして居た提灯を吹き消した。「これから上は、道が明るいから大丈夫だ。蠟燭が一本しか無い。歸りの用心に儉約して置かう」

自分は露佛の臺座のめぐりを歩く。自分の足は何本かの夏草を踏みしだいた。その内にふと蛙の聲に似たものが耳に入つた。かい／＼と含み籠めて鳴く聲は、晩春の蛙よりは強く強く、しかも好く澄んでゐる。蟲ならば何であらうか。鳥やけもの聲ではない。——耳を停てると、遠く水のおともしてゐる。谿の流れにしては細すぎる。何處かに鳧が在るのかも知れない。

Kは、いつの間にか一段上の平地に登つてゐる。自分もそこへ出る。若木の櫻らしいのが數本植えてある。その平地は本堂の在つた場所であつた。石段も礎石も月の光に隈なく見える。寺務所のあとに、板圍いたこひが少し出來てゐる。本堂再建の工事が始まつてゐる由を聞いたがその作業場らしい白々した材木や板が積んであつた。

大きな唐銅の水盤は昔の位置に在つた。水は乾れ果て、其の盤の蓮華の凹みには泥が溜つて白くよごれてゐる、それが月の光には、つきりと見えた。數年前この客殿に座つて紅葉の盛りの谷々を眼の下に眺めた舊旅のことが思ひ出された、二人は本堂趾の横を廻つて東照宮の方へ登つてゆく、東照宮を圍む杉木立は、二三人して抱へる程の太さを持つた數十尺の老木ばかりである、その數は數百本もあらうか。晝さへ小暗く立ち茂つた木立である。月の光は、唯わづかに玉垣の一端をおぼろに照らすのみで、宮のほとは全く闇であつた。我々はその眞暗な宮の前に立つて拍手を打つた。拍手の響は物すごくこたま響してひろがつた。

二人はすぐ引き返へして石段へ來た。Kは下から三段目の邊に、自分は上から二段目の

ところに腰をおろした。こゝでしばらく休んでから山を下らうとするのである。見ると、自分の前には大きな谷が開いてゐる。谷の空には月が皓々と懸つてゐる。左方には深々と繁つた山が伸びてゐるが、それは月を負ふので黒く沈み唯峰通りに列ぶ木々の梢だけが、空に突き出て月の光を受けてゐる。右方の山は餘程遠く離れて見えるが、これは月を斜に受け、木々も岩も青白く打ち交じつて夜目にも嶮しさが思はれる。開いた我が前の谷の果てには遠く山々が幾重にも連つてゐる。それには草刈山らしいのも植林地らしいのも見える。草山は白く、木の在る山は黒い。それ等の山を越えて向は遠州灘であらう。然し今夜は海の色も見えず、波の音も聞えぬ、此の前に來た紅葉の時には、こゝに立つて遠く遙かに秋晴に光る海を指さしたやうに記憶してゐる。——門谷の小松屋を出てから、もう彼れこれ一時間の餘りになつた。穂先きを競つて居る谷々の杉に風がさうく、と渡る外、水の音も何も聞えない、先刻聞き咎めた蛙らしい鳴聲は今全く止んだ。

しばらく、自分は眼前に展開した月下の風景をたのしんで、物も云はなかつた。Kも同様に黙つてゐた。すると、少し程たつてから身を動かして立ち上りさうにしながら、Kがこちらを振り向いて何か物を言はうとした。丁度其の時、自分の頭の上で突然高く鳥が

鳴いた。

『ぶッぽう——』

驚いて振り仰ぐと、續けて、

『ぶッぽう。——ぶッぽう。——ぶッぽう』

と三度鳴いた。高い大杉の梢である。

そして一時鳴き止めたが、又すぐ始めて、今度は打ちつゞけに鳴き上げた。其の聲は次第に昂つて、果ては昂つてゆく我が聲を如何ともすることの出來ぬ如く、愈々急に愈々高く鳴き迫つてきた。——杜鵑よりは高く陽氣な聲である。

自分は思はず片唾を飲んだ。石段につくばふやうにじつとしてゐる。少しでも體を動かし、それが爲めに鳥をここから立たしてはと怖れたのである。Kも同じく石像のやうに静まり返つた。さうしてゐること凡そ十分間か十二三分間にも及んだ頃、突然程ちかく、

『そらッ』

と應じた別の鳴音があつた。

『ぶッぽう。——ぶッぽう』

と益々昂るのに、

『そうウ』

と静かに、恰もなだめるやうに、其の別の鳴聲も續け出した。

『ぶッぽう。——ぶッぽう。——ぶッぽう』

『そう、——そう。——そう——』

『ぶッぽう——』『そう——』

昂り叫ぶ聲。應じるやさしい聲。まさに二羽が相呼び相應へて居るのである。

一片の雲もない大空の月光を身に浴びて、自分は石段に腰を据えた儘、しばらく呼吸をさへ憚つてゐた。

落栗の徑

其時の山の數日は、始めから變に陰氣であつた。——

輕便鐵道の終點から三里。乗合馬車で來て其處の村で晝飯をしたとめると、靴をその家に預けて草鞋ばきとなつた。それから六里、だら／＼登りの縣道を歩いて、日がとつぶり暮れてから高原の盆地に着き、泊りつけの宿屋へ投じた。朝から空はどんより曇つてゐたが、正午過ぎからは今にも雨が落ちてきさうになつてしまつた。私はその數日前から身體の工合を悪くして、頭は重く壓へ付けられる様に苦しかつた。早曉から四時間餘りを汽車に乗り、それから又乗合馬車に銜詰めにされて二時間も揺られたので、馬車を下りた時はもう酷く疲れ果てゝ居た。併し其時の用事は非常に急を要する調査であつたし、殊に一人同行者があるので身體の大儀なのを辛抱して無理にそこまで歩き着いた。それで宿屋へつくへと／＼になつて湯にも入らず飯もそこ／＼にして、寢床へ入つてしまつた。耐らへて居

た雨は、宿へ着くと間もなく可なり強く降り出して、寒い音が軒近い木の葉に騒がしく鳴るのを聞いた。

しかし翌朝起きてみると、前日より餘程爽やかな心地になつて居て、朝飯もうまく食べられた。雨はいつの間にか止んで向の山の頂に白い一團の雲がほぐれつゝもや／＼と昇つて行くのが、朝飯を食べて居る室からまともに眺められた。宿を出る頃には薄日が洩れて晩秋の山村は家々も田畑も山々も木々も寂しく澄み極つて見えた。石を置いた板屋根の、石も板もしつとりと露れて冷たく、家々の近所にある柿の紅葉は鮮やかに映えて、振り仰ぐ空も大方青空になつた。私は同行のGと今日の日程を果すべく、昨日よりは餘程元氣に話を交じへながら足を進めて行つた。

その盆地を出てから村界の峠を越えて二里ほどの間は杉扁柏すまひのきの木立が、道の兩側に連り茂つて居る。新道の遠いのを捨て近い舊道を探り、行く手をいそぐ二人は、時々帽子をぬいで額の汗を拭いた。舊道は下り坂となつて聽て他の縣道に丁字形をなして出會した。そこから少しの間縣道を登つて行つて又横へ狭い山徑へ折れた。こゝから奥は二人ともはじめての道であつた。同じやうな山徑でも初めてのところは歩むのに楽しみが多かつた。二

人は話しながらぐん／＼と登つて行つた。この村の山は杉檜が殆ど無くて檜、樺、栗、朴、七葉樹、山毛櫨の混交林が打ち續いた。そのなかでも栗の木が最も多かつた。歩いてゆく山徑には夥しい柴栗が落ちてゐる。穉果のまゝ落ちてゐるものもあるし、果が裸で落ちてゐるものもたくさんあつた。始めはそれを拾つてポケットへ入れた。けれども幾らでも落ちてゐるのに飽きて、ちぎりに拾ふことをやめにした。そして落葉を踏んで、さつさとあるいた。

そのうちに可なり急な峠にさしかゝつた。汗を流して峠へ登り着いた時、私共は大きな栗の木のもとに一休みした。そこへ向から、爺さんが十二三の男の子を伴つてのぼつて來た。二人とも背負梯子しよひこを負つてゐる。背負梯子には何を入れてあるのか、大きな菰の吹が付けてあつた。

私共の前を通るとき、爺さんが、

「今日は好いお天氣で」

と云つて被つてゐた手拭を一寸取る様にして挨拶した。男の子も同じやうに首を下げた。さうして二人は別に此處に足は止めずその儘さつさと私共の登つてきた方へくだつて行

つた。うしろから見ると背負梯子の吠には一杯柴栗が入れてあつた。柴栗は吠に溢れる許りに満たされてゐる。もし岩にでも躓けば、開け放しの吠の口から道の上にこぼれ落ちさうに思はれた。二人とも前屈みになつて手には生木を杖についてゐる。爺さんは山袴をはいて袖無しのおちんちんを着て居る。男の子は學校帽子を被つて居た。考へて見ると今日は日曜日なのであつた。

二人の後姿が木立にかくれて見えなくなつたのを機會に、私共も立ち上つて峠をくだつた。縣道から折れて雑木山に入つてからは、この二人に遇ふまで、人に全く出遇はなかつた。峠をくだり切ると人家が五六戸ある谷へ出た。そのなかの一軒は割に大きな家であつて、戸障子を皆取り拂つて家の中がまる見えにしてあつた。通りすがりにふと家のなかを見ると柴栗が四五尺の高さの山の形に二所盛り上げられてあつた。畳をすつかり上げて床板に菰を引き廣ろげ、そこへ栗を寄せ集めてあるのである。多分この家は柴栗を賣り買ひするのであらう。氣が付くとその廣い家のなかには人影が見えない。森閑と静まり返つた濃い褐色の栗の山が蒼から斜めに射す日の光を受けて、却つて少し黒ずんで見えた。その家も他の數戸も垣根は無くて雑木が周圍に竝んでゐる同じやうな構造であつた。高い聲の

鳥がキイ／＼と何處かで鳴く。それがいかにも物さびしく聞えた。

谷の流を越えて五六町來ると山腹の平地に小學校があつた。學校の前に物を賣る店が一軒、障子に雜品酒類など書いてあるのが目に付いた。そこへ立ち寄つて、わたし共は腰の握飯の包を開いた。晴れてゐた空にはいつか雲が出て日は時々翳つた。そして濕つた風が氣持わるく吹いて、夕刻近くには雨さへかゝつてくるだらうと思はれた。

わたし共は、こゝで目的の山林の位置を地圖の上に確めた。そして此處から十町程奥の山までの案内を其の家の主人に頼んだ。主人は快く承知して案内に立つた。私共はそれから山へ入つて二時間ばかり調査の仕事をした。

空はすつかり曇つたが雨は降り出さない。私共は目的の造林地を出て、濡れるのを覺悟で歸途に着いた。小學校の前へ來た時、少しの禮金を與へ案内者に別れ、往途と同じ山徑を踏んで今夜の宿へ急いだ。

又先刻の柴栗の山を積んだ家の前を通る。覗いて見ると今度も矢張り人が居ない。明るく射してゐた日はかくれて暗い家のなかに柴栗の山が今度は妙に白味を帯びて靜まつて居る。……同じ道の歸途は、往途に比して著しく近い感じのするを常とする。私共は往きが

けに見覚えある岩角とか倒木とか大木の幹とかが、早くも目の前に現れてくるのに勢付いて足はおのづから進んで行つた、しかし何時の間にか氣分の勝れなくなつてゐた私は、成るべく口を閉ざしてGの先に立ちどしどしと歩いた。今夜は湯に入つてさつぱりと汗を流さう。さうしたら少しは好い心地になるであらう、などとも思つた。そして今夜の宿はどんな家だらうと考へて見たりした。ポケットに拾つてある栗を取り出して澁皮を爪で剥きくくそれを噛んだ。Gも同じやうにやり始めた。そして二人とも澁い／＼と言ひながら四つ五つ食べてしまつた。

暮方近く縣道へ再び出た頃、雨がほろ／＼と降り出した。その道をすこし來ると御宿と書いた古い板看板の出てる家がある。わたし共はそこへ泊ることにして障子をあげた。小さい二階建の家で、うしろに杉の山がすぐ押し迫つて居る。私共は唯一室しか無い其の二階の六疊に通された。四十位のおかみさんが火鉢やランプを運んでくる。風呂小屋は別に山の木立に接して建てゝある。私は湯をすまして來たら、果してだいぶん爽かな心地に恢復した。火鉢の炭が硬いので湯に入つてゐるうちに眞黒く立ち消えとなつてゐる。山の冷えが、湯上りの膚にも知られるので、火を持つてくるやうに下へ聲をかけた。

火を持つて來たのはおかみさんでなくて、八つか九つ位の女の子であつた。大事さうに十能に火を入れて階子段をのぼつて來た。私は十能を受け取つて箱火鉢に火を移した。今度はずまく起したいと思つて火鉢に顔を寄せて火を吹いた。女の子は私が火を吹くのを、立つた儘見て居てすぐに下へは行かないで居る。

そこへGが湯から出てきた。Gは女の子に

『ご飯を早くたのむよ』

と言つた。女の子は笑ひながら下へおりた。赤い丸顔をした可愛らしい子であつた。豆腐の汁と鹽鯖の焼いたのとで夕飯を食べた後、今日見た山の調査に就いて私共は手帳を示し合つて少し話をした。それから、私は寢床を延べさせた。おかみさんは床をとると下へおりて行つた。それと入れ違ひに女の子がGのところへ煙草を持つて上つてきた。

私は寢床の上ところがつてゐたが、ふと思ひついて女の子に頼んだ。

『ねえさん。氣の毒だがね。おちさんの足の裏を踏んで呉れないか。おちさんが斯うやつてうつ伏せになるから、おちさんの臍へ載つて立つてくれないか』

私はさう言つて寢床の上へうつ伏しになつて足を伸ばした。——私は山を歩いて疲れた

時に熱る足の裏を、人に踏ませるのを好んで居る。ほてる自分の足の裏へ人が立つて、其の人の體重によつて受ける足の裏の壓感を喜ぶのである。之は足の裏へ鬱してゐる血を壓し散らす簡便な按摩療法として、或る元氣の好い老農から聞いた方法なのである。それを屢々實驗した結果が、いつも良いために私は時々それを試みるのであつた。——この日も私はひどくくたびれて、殊に草鞋がけの足には珍らしくまめが出来かゝつて居る。それでこの女の子の體重ではもちろん輕過ぎると思つたが、ふとやらして見る氣になつたのである。

私の言葉を聞いて女の子は、すぐ返辭もせず、けげんな顔をして立つてゐる。Gは横から笑ひながら、

『そのおぢさんの足の上に立つてごらん、僕がやつて見せようか』
と云つて、Gは態々立ち上つてそれをやつて見せた。——Gは度々私と共に山へはいつてゐるから、この私の輕便按摩法を好く知つて居る。Gが私の足から下りると、女の子はここにこしながら少しも躊躇せず私の足の裏へ自分の兩足を夫々載せて眞直に立つた。そして、

『これで好いづらか。ねえおぢさん』
と云つた。私は、

『それで好い、それで好い、上手だ〜』
と賞めそやした。私は腹這ひになつたまゝ

『いくつだね』と訊く。

『九つ』

元氣のいゝ聲だ。身體も健康さうである。載つかつてゐる足は、すいぶん汚くよこれて居る。

『兄さんはいくつ』

『兄さんなんか無い。一人きりだ』

『ちやア先刻下に居たのは誰だね』

『あれは此處のおばさんの子供』

『さうか……では今こゝに來て居たのはお母さんではないんだね』

『お母さんは死んぢまつた。あれはおばさんだ』

『さうすると、こゝはおばさんのところから』

『わしの家は、もつとずつと奥の方だ。こゝはおぢさんの家だ』

『さうかい。……此處へ遊びに来て居るのかね』

『……………』

女の子はふと黙つた。何と返辭をして好いか迷つてゐるやうな風である。其の顔はいかにも無邪氣で眼が圓く／＼と大きい。併し母の無い子と知つて見ると、着てゐる着物のよごれてゐるのが目に立つて、何だか急に痛々しくなつた。女の子は黙つてランプを眺めてゐる。

『有り難う。もういゝよ。お蔭で大層足が軽くなつた。有りがたう／＼』

私が斯う云ふと女の子は疊の上へ下りた。私は起きて火鉢のわきへやつてきた。Gは火鉢に手をかさして煙草を吸つてゐる。

『お母さんはいつ亡くなつたの』

『わしの小さい時だ』

『お父さんは』

『お父さんかね』女の子は、斯う云つて急に俯向いた。

『お父さんは、去年殺されて死んでしまつた』

私はびつくりしてはつと女の子の顔を見た。女の子はまだ俯向いてゐる。

『殺されたつて？ 去年、誰に？』私とGとは殆ど同時に斯う叫んだ。

女の子は少し顔を上げた。——その顔は、先刻と全く別人のやうに、^{いたま}傷しいものに變つてゐる。

『せんさん、お湯へはいらう。早く来いよ』

此の時、下から男の子の高く呼ぶ聲が聞えた。

『あゝ、今行く』

女の子は勢よく答へて、すぐに階子段の方へ行つた。——驚きに撃たれてゐる私共二人の旅人の前を離れて行くその顔は、もうすつかり無邪氣な静けさに還つて居た。

私は、茫然として、階子段を踏む小さい足音を聞き送つた。

その翌朝はまだうす暗いうちに宿を出立した。それで女の子にはそれ切り遇はなかつた。おかみさんには朝飯のお給仕をして貰つたが、其時女の子の父親の死に就いては何も尋ね

なかつた。前夜女の子が、父の事を云つた時の傷ましい顔付を思ひ出すと私は逆も其の不幸を確める氣にはなれなかつたのである。平素極めて無口である同行のGも勿論何事も尋ねなかつた。

私共は山道七里を歩いて午後停車場の在る村へ着いた。——今思つても其の時の山の數日は、始めから變に陰氣であつた。

山林争議

一

私は自分がそれ程問題の中心になつてゐるとは思ひも設けなかつた。そして又それ程に多くの人々から憎惡的にされてゐるとも勿論考へてゐなかつた。いつもの如く濡れ物袋に手拭や楊子を入れ、風呂敷包を一つ手にして家を出た。

併し私は其の村にかなり紛糾まぎまぎんだ事件が生じて、それが日を経るに従つて益々面倒な儘成長し、今では一寸これを解決するに困難な程度にまでなつてきてゐることは聞き知つてゐた。私はその紛糾んだ事件の調査と調停のために、出張を命ぜられて出かけたのである。村といふのはさまで奥深い山中ではないが、其の地方で有名な材木の産地で炭焼も却々巧みである所謂林業地であつた。

村界は隣縣との界をなして、高い山がうね／＼と長く續いてゐる。その山脈に登ると南方太平洋が遙かに見え、又近く湖水の大きいのが面白い形をして耕地の間、人家村落の間に出つ入りつしてゐるのも、我が立つ山の麓からは三里とは距てぬやうに見える。春の日霞む外洋を山頂に眺めたこともあるし夏のはじめ若葉の光る間から湖水の色を見下したこともあるので、その村は私にとつて感じの好い土地であつた。殊にその村で、顔を合した人々は多く眞面目な物固い人々で、旁々私に對して其の村は嘗て不快の思を與へたことがない。それ故今回の事件に就いても、私は事件そのものが面倒になつてをらうとも、之れを解決するために出張して村の人々と折衝することに少しの不快も不安も抱かずに出かけたのである。

私は出立の夜は途中に一泊した。そこは私設鐵道の停車場のある土地で、目的の村からは五里ばかり手前であつた。次ぎの日は朝早く宿を出た。その宿のある町から私設鐵道は尙二驛向うまで行つてゐる。本來目的の村へ到るには、終點まで乗つて其處から三里歩くのが最も便利なのである。併し私は此日は此の順路を取らず陸路徒歩で山越をして行かうと草鞋ばきで宿を出た。

それは別段深い理由があつてではなく、只汽車に乗る時間や、待ち合わせる時間などを考へて朝早く山越を行くならば、常に取る順路と時間に於て大差なく先方へ着くであらう。試しに時間の比較を試してみようといふのと、もう一つは其の村へ入るのに山越をしたことがないから、其の途中初めての村々を通るのに興味を感じたからであつた。

六月の初旬であるが日中は照が強く随分暑い日であつた。晴れ切つた朝の空のすが／＼しいのを仰いで宿を出た時には、五里の山道を三時間と少しもあれば着くと思つてゐたが、初めての道とて多少足遅れがしたのと、二つ三つの島を過ぎたとき、小川沿ひの橋のところで道をまちがへて十町程損をしたので三里も来た頃には十時すぎの日が仲々暑く照りつけてきた。島といふのは村内の部落を此の地方で呼ぶ方言であるが、人家や木立の一團が耕地や丘陵の間にとろ／＼在る具合が丁度島嶼のやうだからのことであらう。

道は松林の低い山に沿つたり、又畑や田の中を縫つたりして次第に登つてゆくのである。松林には此の邊で松蟬と云ふ小さい蟬が、ジイ／＼と鳴き立て、それが如何にもこれから深くなる夏の暑さを旅人に告げるやうに思へた。耕地は松山の間に開けてゐる。そのところ／＼に島があつて椎や檜の茂みの中に藁屋根が隠見するのである。

もう村界の峠に来さうなものだと思つて、道沿ひの小店に立ち寄つて聞いた。小店にはラムネや蜜柑水などが列べてあつて、肥つた内儀が肌脱ぎで枴繰りをやつてゐた。

「梅原村にはまだ大分遠いかね」

と私は立ち止つた。

「もうぢきに峠でござんす。半里もお行きますと下りになるで……。梅原と云つて梅原のどこへお行きますかね」

「梅原の下梅原へ行くのだがね」

「下梅原だと、まだざつと二里半はあらアね」

私は煙草を買つた。店の前は小川で、小川の縁に杭を立て、店の軒から道路の上へ日覆のやうに葡萄棚がつくつてある。その葡萄棚の葉に日が當つて美しく透けるのを仰ぎながら、私は出してある縁臺に腰をかけて一服した。

「今年は蠶は、どんな風だつたね」

私は元來農事に就いては全く知識がなかつた。併し山林の用務で地方を繁く旅行するに伴れて自然地方の人々と話を合せる必要上一般農事や養蠶のことなど、世間話にする程度

には知識を有するやうになつてきた。そして、此農事や養蠶の話から地方の人々と意外に早く懇意になり、従つて自分の仕事の上にも都合の多いことが多いのを、深く感じたのである。それで其の方面の話には人と對話の際不自由のないだけの知識を得るに努めたのであつた。

「はア、まあ去年位だらアつて言ひますぞね」

「さうかい。桑は」

「桑は、別れ霜で一才傷みましたがね、まあく之も大した支障ぢやなかつた方と思ひますぞね」

こんなことを少し話し合つて、私は汗が乾いたので其の店を離れた。

二

峠と云つても餘り高いものではない、松林の間を通つて少し急になりかけたと思ふと、やがてもう下りになつた。私は帽子をぬいで、其の帽子で團扇代りに顔を煽きながら、くだり道をすたくと歩いた。此の峠からは梅原村の地内であつた。

梅原村の中は道路が改修されてゐないので餘程凸凹してゐる。人家の垣の内へ入るやうな風に曲つて行くから、まご／＼してゐると、やはりそれで好いので垣に沿うて狭い畑中を抜けて行ける、と云つたやうな迂曲の甚しい小道であつた。

下梅原の旅宿についたのは彼是十一時であつた。私の姿を見ると、亭主は大聲で、

「やあ、今日は」

と云つて、奥の方を向いて、

「小川さん、おいでになつたぞね。おいでに……」
と呼んだ。

旅宿は二階建の廣い、この村に較べて立派な建物である。この宿の前、街道の端に大きな枝垂柳が一本ある。これが旅宿を非常に感じ好く且つ綺麗に見せてゐるのであつた。唐紙も何も開け放してあるから、奥の奥まで見える。店は荒物や菓子や一寸した呉服類なども商つてゐるので、亭主は店先の物の蔭に胡座をかいてゐたのが、私を見ると伸び上つて斯う奥の方に聲をかけたのである。聲に應じて奥から飛んできたのは小川君であつた。小川君といふのは私の助手と言つた格でこゝへ出張してゐるので、私は他の用務の都合で、

この村の大體の仕事の方針を立てると二三日滞在して先般一度歸つたのである。その後は小川君が主となつて、もう一人杉田といふ青年と、引きつゞき滞在して仕事をやつてゐたのである。小川君は私と顔を合せるなり、直に、

「やア、どうも困りました……、おいでを待ち切つてゐました」

と云つた。外仕事の日に焼けた眞黒な顔に、圓い目を光らせて口をとがらかして八の字を深く寄せてゐる。私はさのみ驚きもしなかつた。

「今日は仲々暑つた。道が乾いてゐるんだから、足は綺麗だよ、雑巾を貸してくれればそれで好い」

と女中に云つた。さう言つたけれど女中はバケツに水を一杯入れて持つてきた。冷やかな水に、草鞋足袋をぬいだ熱つた足を浸けた快さに、しばらく其の儘にしたなり、私は洋服の上着をぬいで風を入れた。

「今日は鈴村屋から歩いてきたんだがね、仲々あるよ、矢つ張り汽車の方が楽で早くて好いよ」

と小川君に向つて云つた。

「えつ。ぢやア、上梅原の方からですか」

と少し周章てた調子で訊かれた。

「うん、上梅原の方から来たのさ」

「よく無事でおいでした」

と小川君は私の側へ来てしやがんだ。私は妙なことを云ふと思つて其の顔を見返つた。小川といふ人は、鹿爪らしい頑固の癖に仲々とぼけた戯談も時折言つて他を笑はせる人である。併し此の時小川君の顔には少しも賑やかな影は見えない。八の字は一層深く黯黒い額に刻まれて、口は尖つたまゝ私の方に向いてゐる。私は何んだから判らないから、

「何が」

と尋ねた。

「いえ、貴君、上梅原を無事に通つておいでした……」

「どうして。」

「どうしてツて、いろ／＼の騒ぎがありました」

と言ひかけるから、私は急にこれを遮つた。私は宿屋の亭主がそこに居るのを憚つたので

ある。亭主も村民の一人である。宿屋の亭主としては客人たる私等に好意を持つて居るだらうが、小川君の様子では、村の紛擾は既に大分深入りして、何やら私に對して悪感情を持つてゐるらしく思へる。そのやうな、たゞした事の詳細な報告や批評を、小川君がここで明らさまに語り出すのを憚り避けたのである。

「まア、ゆつくり聞かして呉れ給へ、暑い／＼……それから腹がへつたから、飯を早く頼むぜ」

と女中に云つて私は、さつさと二階へ上つた。小川君も續いてきた。二階の八畳間は次の八畳間と明け放しで廣々として涼しい風が通る。私は手早く裸になつた。そして手拭を出して下の風呂場へ行つて水で顔を洗ひ身體を拭いた。

二階へ戻つてくると茶や菓子が出てあつて、小川君と並んで杉田も座つてゐる。杉田は大きな聲で勢よく挨拶した。私は裏の田畑の見える窓から吹き込む風に背を向けて二人と相對した。

「仲々忙しかつたでせう、ご苦勞でした。僕も早く来たかつたが、手のぬけない爲めに一日おくりにしてゐたが、二十日の手紙を見て、とりあへず他の用を捨て、やつてきたわけ

なのだが……」

と云つて茶を啜つた。小川君は先刻よりは少し落ち着いた調子で、

「日々お待ちしてゐたんです。あれから、面倒なこと許り起きて閉口しました。何しろ今日では村は滅茶苦茶に騒いでゐます。私達はまるで捕虜のやうなわけで、……村長も村會も全く大弱りで、無政府のやうになつてゐます」

小川君は下士生活を長くやつて日清日露にも従軍した人である。小川君は軍隊式の几帳面と、服従服務について甚だ自信の強い人である。村民のごたくに對しては初めから非常な不快と不満と、憤懣の情を禁じ得なかつたものであらう。村民を不謹慎な秩序なき輩として心中大に憎惡に堪へないらしく、腹立たしげに次の如く顛末を語つたのである。

——先般私が出張調査して山林整理の方針が一決した後、十數日を経て突然整理に反對する者が上梅原に現れた。この整理反對は一部の人々に個人的に大いに好都合の利益を生じるものであつた爲めに上梅原に接する他の二部落は殆ど全戸數擧げて之れに加つた。次いで下梅原即ち宿屋のある部落にも整理反對を勧めに來た。ところが下梅原では何人も之に耳を藉す者が無い。既に村長も村會議員も研究した上で専門家の整理方針に従つて實行す

ることを内定した以上、只舊來の習慣を重んじるとか草刈場の都合がわるいからとか云ふ理由で之れに反對する如きは一村の自治を破るものである。反對に加はるわけには行かぬと云つても二もなく上梅原の連中に答へたのであつた。こゝで問題は餘程複雑になつてきたらしい。

上梅原及び外二部落の反對組は、こゝに於て直接鋒先を村長に向けて、先づ整理中止の哀訴をした。然し村長はそれを説諭したのみで全く相手にしなかつた。村會にも運動した。村會議員は板挟みになつて何れも弱り果てた。上梅原の反對の氣勢は形勢の非なるに従つて日々激しくなつた。それには又理由がある。それは下梅原と反對組三部落との關係である。

元來下梅原全部の戸數は、相手三部落の合計戸數より少し多い、従つて村會議員も丁度一名多く下梅原から出してをり、今迄にも何によらず一村の輿論は下梅原が作つてゐた。且つ役場も高等小學校も醫者も宿屋も皆下梅原にあるといふので、自然村の實權は下梅原に歸して、村長なども町村制施行以來下梅原から許り出てゐた。それを豫ね／＼平かならず感じてゐた他の三部落は今回の事件を汐にして下梅原の鼻を折り、泡好くば村長までも取り代へてやらうといふことに自然團結してしまつたやうにも思へる。

事件はいろ／＼の事がそれからそれへと紛糾^{もつれ}たらしいが、反対組の主張するところは極めて簡単で、要するに山林整理の結果従來の草刈場が減少しては農業にさしつかへるから整理を中止して欲しい、中止すること能はずとすれば草刈場を十分保存してくれと云ふのである。下榎原の方では草刈場は一戸當りの廣さにして有り餘る程あるのだから。今度の整理のために植林地に編入されたとして苦情など云ふは個人主義であつて公益を知らず時勢を知らぬ考であると、斯う云つて對抗してゐるのであつた。

初の中は反対組の反対振りも穏やかであつたが、下榎原の態度に激せられて急に著しく興奮してきたものと見えて反対手段は漸次險惡になり、鋒先は轉じて整理事業の調査員たる小川君等に對して現はれるやうになつた。反対組の二三人は小川君に面會して整理調査の中止を哀願した。小川君は頭ごなしに之を拒絶した。彼れこれする中に彼等は多人數で役場へ押し寄せたり、村長の家へ夜間談判に乗り込んだり、この宿屋へ來て酒を飲んで聞えよがしの暴言なども吐いた。それも追々轉じて調査の主任であり整理方法の立案者たる私を大に憎み出すやうになり、いろ／＼の流言が小川君の耳に不快なことを傳へたらしい。すると村民中には、窮民を救ふの何のと云つて、力味返へる手合ひも出て來たので小川

君等も昨今不氣味に感じる事が甚しくなつた。ところへ霖雨の後には山水^{しみづ}が出て下榎原と上榎原との境を流れる川が溢れて兩部落から大勢村民が夫役^{おつやく}で繰り出すなどといふ騒ぎも起きた。

「どうも弱り果てた次第です。貴方^{あなた}もひどく憎まれておいでですから、十分用心して下さい。斯ういふ際は馬鹿々々しいが仕方がありません」

小川君の眼は又しても光つた。

「三四日前、巡査が警察からこゝへ二名特派されたのです。一人はまだ村の駐在所にゐるかも知れないね」

と小川君は、今度は杉田の方を振り向いた。

「もう、^と速うに歸つたのです。來た翌日すぐ歸つたのです」

杉田は斯う云つて少し笑つた。杉田は小川君の最前からの話を聞きながら、妙に冷笑を含まない顔で、折々私の方を窺^{うかが}つてゐたが、この時斯う云ひ放つて、如何にも小川君が大袈裟^{しやべりかた}な喋舌^{しゃべりかた}をすると嘲つたのである。

私は事件の内容をこれだけ聞いてゐる中に、不安の念も不快の念も全く胸中から去つた

やうに覺えた。併し事件そのものは小川君の云ふ通り紛糾したことであると思つた。
そこへ村長と助役と他に一人がやつて來た。

三

村長の話も略ぼ小川君と同様であつた。只小川君の話では村長は飽く迄強硬に整理を遂行する考へらしいやうに聞いたが、私は話の間に村長の腰は思ひの外に弱くなつてゐることを心付いた。畢竟下梅原に對し又私に對しては強硬に出たいが、一方村といふ側から云へば、立村以來未曾有の騒ぎをして村内相争ふことは如何にも情けない、成る事なら陳情の一部は容れてやりたいといふおだやかな下心があるやうである。然し私はこの事件に對して何の躊躇もなかつたから、直に次のやうに答へた。

「私は、此の村のために、以前の計畫通り遂行することを村長さんに要求します。村長さんは決して動かないで下さい」

私は極く簡単に云つた。その特別に切口上で愛想氣なく云ひ放つ積りでもなく、又村長に對して不快の念を持つてゐたわけではないが、私の言葉は妙に當てつけがましく且つ概

柄づくに聞えたのであらう、穩かな村長は、少し肩を怒らし顔を赤めて云つた。

「では陳情はまるで眼中に置かないのですな、……それなら、御相談までもない。併し私共では今は到底治め兼ねる次第だから、貴君自身反對側を説き伏せて下さい、外に方法はなから」

私は村長の立腹に對しては少からず迷惑した。然しそれも判明する時がくれば判明すると思つて、何の辯解もせず、直に、

「よろしい。然し、何百人といふ人数に會ふのは效がない、有力者を集めて下さい。村長村會立會ひの上で話しませう」と云つた。

「さう願ひます、ではすぐ觸れを出さう。間に合ふだらうね、今夜のことに」

村長は他の二人を顧みた。

「間に合ひますさ」

そこで村長等三人は去つた。

私はこれだけの事件に對して、内心極めて平靜であつた、小川君の心配も村長の心痛も

私には甚しい不安は起きなかつた。詳細を開取つて見れば村の騒動の實質は單純な見解の差から生じたので、之れに對して私は自分の立案した整理案そのものに就いて寧ろ或る自信を強めたと共に村の人々の騒ぎは程なく消散してしまふと思へなかつた。私は自身、この杉檜の森林美しい山村、太平洋を遠望し湖水を脚下に近く眺め得る山脈に抱かれた山村の旅宿に、柳を吹く夏近い風を見ながら、不安の念の切實に生じやうはなかつたのである。只、今夜反對組の人々にどういふ風に話さうかといふ段取りに就いては少し考へて見たくなつた。

四

小川君は私が餘り事もなげな顔をしてゐるのが氣に喰はなかつたらしい、そしてそれを杉田の最前からの態度が私をさうさせてしまつたと思つたやうである。杉田が別室——小川君と杉田とは裏の二階六疊間に陣取つて仕事をしてゐた——に去ると、小川君は澁面を作つて私に云つた。

「どうも杉田には困るのです。仕事は眞面目にやらないで、下らない法律書などや雑誌

を讀んで議論ばかりやつて、製圖の夜業などやらないのです」

「議論つて、誰れとやるのか、君と？」

「ええ、巡査とです」

「巡査？」

「こゝの駐在所です。これもまだ若い男で理窟ばかり云つてゐるんです。夜になるとこの家へ湯を貰ひに来てそのとき私共の二階を訪問しては刑法だの民法だのと云つて下らない事を晩くまで喋舌つたり論じたりして喜んでゐるのです」

「君から、注意したら好いと思ふが」

「云ひましたけれども駄目です。貴方から十分云つて下さい、それに第一しやれ者で、髪は毎日光々させて、山へ行くにもワイシャツにネクタイをつけて出かけるんです。仕方がありません」

「だいぶハイカラだね……然し詰襟の服を持つて來ないのだらう」

「詰襟の服がなければ、それで好いんです、何もワイシャツを着ずとも、只のシャツを着てカラーなどなしで首へ手拭でも巻いて行けば好いんです。ネクタイを結ぶ時間もかゝ

るし、第一如何にも懦弱でいけない」

私は一寸横になつた。小川君の顔を何の氣なしに見ると日に焼けた赤黒い額には新らしい痣が出来てゐる。

「君、額はどうしたんだね」

まさか杉田と擲り合ひをしたんでもなからうかと、思ひながら尋ねると、小川君は右手で額の痣の上をかくすやうにしながら、

「山でやりました」

「山で？……どうした」

「滑つて岩で打つてのです。二日ほど随分難澁しました。……これも杉田が横着だから事が起きたのです」

「杉田君がどうしたね」

「杉田が登るべき峯を彼是れいふので、私が、嗚りつけながら急いで横渡りに崖をのぼるときに落ちたのです」

小川君は舌打ちをして裏二階を顧みた。私は小川君の痣を見ながら、小川君が村の紛糾

と、杉田との不快の裡に、今日私のこゝへ来るのを一日千秋の思で待つてゐた心を察して氣の毒になつた。然しその時、別段それを慰めるやうなことは云はなかつた。

五

晝飯の後私は晝寝をした。眼がさめると、二階の前の大きな柳にふく風がしきりに流れ込んでうすら寒い心地がした。起き上つて、そこに出てゐる菓子を摘んでみるとそこへ杉田が上つてきた。

杉田の髪は小川君の憤慨した通り仲々手入が好く行き届いてゐる。杉田は例の如くハキハキした調子で話しかけた。

「今日はお疲れでせう。……先日お歸りの後で、こゝの家には面白いことがありました」

「なんだね」

「ほう……」

「それも極めて面白い捕へかたをしたのです」

「どうしたのだい」

「かうですそれは。こゝへ二人連の孤兒院の事務員が宿泊したんです。この邊の月掛の集金に歩いたんださうです。その晩二人が集金の計算をして寝ると間もなく一人の賊がその室へ忍び込んだのです。ところがです。その賊の物音に一人の事務員——若い男の方だつたさうですが目をさましてそれと心付くと直ぐ足の先きでもう一人の男を揺り起したんだと云ひます。そして二人で雑作もなく捕へたんです」

「それは好かつた」

「まだく面白いのです。……それから二人はそれを極く物靜かに説諭したのです。

今我々の取扱つてゐる金は孤兒のために世の慈善家から出して貰つた尊い金である。だからこの金をお前にやるわけにはゆかない。然しお前も大の男がこんな破廉恥の行爲をやるについては、大方いろくの事情も伏在してゐるだらう。話してくれ、場合によつては相當の同情をしてやらう……と若い方が巧く話したのです」

「君は聞いてゐたのかね」

「いゝえ、その時にはまだ私はそこへ出てはゐません。……すると其の賊は、事務員を

だまして逃げようと考へたのでせう、稼ぎ先きで病氣になつて郷里へかへる途中出来心で一時借用したいと思つて甚だ面目もないことを致したと云つて謝罪したさうです。逃がして呉れ、今後必ず眞面目に働いてご恩返へしをします、見逃してくれと疊に這ふやうになつてあやまつたさうです、すると其の事務員が、それは氣の毒だ。如何にも出来心だらう、我々は慈善事業に従事してゐる人間だから、それを聞いては捨てゝは置けない。少しだが之れをお前にやるから、これで在所に歸り一日も早く正業に就いて今日の罪を償却して呉れ、と云つて一圓札を出してやつたんださうです。賊は占めたと思つたんでせう。しきりに空涙をこぼして喜んでゐたさうです。すると事務員が云ふには、今之から屋根傳ひにお前を逃がして若し人に見つかると却つてお前のために悪い。それよりはこゝは宿屋のことでもあるし、前夜私が晩く友達をつれてきて、帳場には話さなかつたと云つて誤魔化してお前を朝早くかへしてやらう。もう夜もあけるだらうから少し待つてゐるがよいと云つて二人で其の男を中に挟んで夜の明けるのを待つてゐたさうです」

「計略かい。それは」

「勿論です、夜があげると一人の事務員は駐在所へ云ひに行つて巡查をつれてきたんで

す。そうして朝飯のご馳走までせしめて逃げやうと思つてゐた賊を捕縛したんです」

「馬鹿な泥棒だな」

「駐在所も一人では多少どうかと思つたでせう、私に助勢してくれと云つて、其の時私の寝てゐるのを起しに來たのです」

「君は手傳つたか」

「はア、手傳つてやりました。巡查も柔道はかなりやれるさうですが、別段手荒いことはせずに音なしく捕縛されました」

「君はどうした」

「私は訊問の手傳をやりました。賊は私も巡查と思つたらしかつたんで、可笑かつたです」

「それからどうした」

「巡查には閉口して柔順であつたけれど、事務員に向つては大層だまされたことを口惜しがつて嘔鳴つたのです。事務員は散々賊を笑つてやりました。翌日——いや、その朝です、駐在所から警察へ賊をつれて山越えを巡查がする時、事務員が用心のため同行したん

です、今日貴方のお通りの峠より少し右の方で道も細いし人通りの極くすくない道ですから巡查は用心して護送したのです」

私は杉田が同行したかつたらうと思つた。

「途中丁度峠で果して賊に逃げられかゝつた。道は細いし急な坂ですから追ひかけるに大層困難したさうです。やうやく賊がころげたとこを押へたのでして、巡查も事務員も之は逃がしたかと一時思つた位ださうです」

杉田の話は、晝寝醒めの私に取つては仲々面白かつた。杉田が豫ねて警察官の登用試験を受けたなど云つてゐることを思ひ出して、話の中に身振りを交ぜて居る様子が殊に面白く感じられた。

風呂が沸いたと女中が知らせてきたので私は立ち上つた。向を見ると裏二階で小川君がしきりに製圖をやつてゐる。

今夜は反對組の主だつた者に意見を述べさせて、それに一々答へてゆくことにしようか、或は自分の方から説明して先方を納得せしめやうか、なぞといふことが胸に浮んだが、直

ぐ、それは前から考へて置く必要はない、と思つて私は西日の當る風呂場に、心地よい新湯の桶の蓋をあけた。

鮎

一

彼はいつの間にか、すっかり好い氣持になつてゐた、何もかも忘れ切つて、面白いの、好きな心で、周囲のすべてを楽しんで居た。鮎の味は中でも秀で、好かつた。

今夜、この家には、彼の外、二三人の客が泊つてゐるらしかつた。それが皆静かで一向物音も話し聲も聞えて來なかつた、それは、彼の室からは遠い別棟の方にあるので、彼は廣いこの家の一棟數室を獨占してゐることを知つた時、旅の宿にゐる窮屈さから放たれたやうに、急にのびのびとした心地になつた。

彼が、この山家へ旅に出かけたのは四年振りであつた。のみならず、彼は自身の仕事の關係で都會方面へばかり出かけて、山や谷のある地方へは、まるで一步も足を踏みださぬ

こと三年の餘にもなつてゐたのである。

彼は、此の日、こゝへ着くと、すぐ以前此の邊を旅したときの記憶を呼び起した。そしてこの家で思ひがけなく酔つて興じたときのことなども思ひ出した。然し、朝から妙に氣むづかしくこぢれた彼は、此の日はいつになく取りすました態度でこゝへ到着した。街道を走る乗合自動車から下りる時、彼は出迎へた女の顔を一瞥して黙つて、寧ろ傲然として手鞆を女に渡した。二階へ案内されて通つた室は、彼にとつてお馴染の座敷であつたが、彼は押し黙つて、麻の座蒲團へ腰をおろした。それから茶を啜り、浴衣に着代へ、入浴をすまして後、廊下に近く座を占めて、しばらく夕飯を待つ間、新聞をひろげて拾ひ讀みによみはじめた。

そこへ、つか／＼と一人はひつてきた。それは小柄な陽氣な顔をした女であつた。彼を見ると女は、勢よくお辭儀をした。そして何も言はずに、そこへ散らしてあつた茶碗や團扇を片づけて、さつさと出て行つた。

夕飯の時、彼は酒を命じた。酒のお酌には、その若い小柄の女がきて坐つた。女の子供つばい氣樂さうな顔を見て、彼は急に取りすました今日の心持から離れ得たやうに、につ

こりと笑つた。

「きみは、何といふのだね」

女もにこ／＼笑ひかけた。そのわらひ顔は一層賑かであつた。

「あてゝやらうか」

「えゝ、どうぞ」

「名前のね、下の字を教へてくれ、そうすれば、きつとあてゝ見せる」

「下の字は、ちといふのです」

「ぢ。ちといふのだね。ち、ちといふと……」

彼は團扇を取つた。女も氣がついて團扇を手にして、そよ／＼と風を客の方へ送つた。

「ふぢ、藤ぢやないか」

「まア、あたつた。ほんとに、まアどうして、あたつたんでせう」

「あたつたらう、どうだい」

「多分、誰かにお聞きなすつたんでせう」

「いゝえ、聞くものか、聞いて知つてゐるなら、あてたところで俺の方が一向面白くない

ぢやアないか」

「でも、あんまり、よくあたつたんですもの」

「あてる前に約束をしておくとよかつたが、あてた代りに、一つお禮をするんだぜ」

「え、あて、下すつたから、何んでもお禮をしませうとも」

こんなことから話が始まつて、彼はだん／＼好い機嫌になつて行つた。

山の夜は、流石に涼しかった。都會の熱さから逃れて来た嬉しさも伴つて、彼はこの三四日をこゝに滞在することの楽しさをすら感じ始めた。彼は熱い頬を撫で、

「その手拭をとつてくれないか」

と廊下の手摺にかけて置いた自身の手拭を指した。女は立つてそれを取ると、黙つてすん／＼下へおりて行つた。そして又すぐ上つてきて、

「さア、どうぞ」

と冷かな水で濡らしてきた手拭を渡した。彼は、惻口だなと思つた。

飯をすませてからも、女はすぐ、そこを去らずに、しばらく話してゐた。

「今夜は、閑で、ほんとうに好いんです」

と云つたりした。そのうちに、ふと黙つて、自分の持つてゐる團扇の繪を眺めて、妙にしみ／＼と、少しうつむいた。その形が、横顔から肩、襟、帯、と鄙びたうちにも、なまめかしく、そして幾分仇つぼくも見えた。

「きみは、どこの人だね。この邊の山のなかから出て来たところを、こゝで掴まつた草刈娘だつたと云ふのか」

彼の氣持を不意にかなり強く誘ひ寄せた女の姿體は、この時早くも子供らしい真正面の形に復してゐた。女は聲を立て、賑かに笑つた。

「え、草刈娘です。ほんとうに草も刈りました。けれど、この邊の山ではありません。ずうつと遠いところの山なのです」

「ずつと、遠いところといふと、どこなんだね」

「さア何里位あるか、わたしは知りませんけれど」

屋外から流れ込む夜風が、だいぶん冷かに感ぜられて、何の樹か軒近く張る枝に、風がさわ／＼と鳴るのも涼しかった。他の室は依然人氣がなく、森閑と静まり返つてゐた。

「あなたは、こちらへは始めておいでになつたんですか」

女が、すこしまじめな風で尋ねた。

「さうでもないね。然しまア餘つほど久しく來ないのだから、まアく始めても同然だ」

「こんどは、いつまでおいでになるのです」

「三四日位だらう」

こんな話をしてゐる最中、女が又、さつきの姿體になつた。それを見て、彼は、ふとこんなことを思つた。……この女は古くから知つてゐる木樵の娘で、今夜こんなところで計らずも出遇つた。親のために町へ奉公に出されたのが、山の中で見たときとは、まるで見ちがへるやうに美しく小粹こずいになつてゐる。……月並だなど、彼は自身の空想を笑つたが、併し女の姿はちつと見て放さなかつた。

「まア長いことお邪魔をしました。ひまなものですから、今夜は」と云つて女は立つた。

彼は、風の涼しい葉鳴りを聞きながら、いゝ心地に疲れてゐた。鮎あしの味もよかつた。酒もうまかつた。風も涼しい。廣い宿屋に一人ゐるといふのも好い。あの女もよい、すべて

よい。今日はよい旅の一夜ひとよを得た。と思ひながら、うつら／＼柱に背を寄せたと思ふと、やがて居ねむりをやり始めた。

二

夕方になつて小雨がふり出した。彼は出先から、少し濡れて急ぎ足に歸つてきた。入口のところへ出迎へたのは昨夜の女だつた。彼はなつかしいものに遇つたやうな氣がした。女は彼について彼の室までくると、いきなり陽氣な聲で、

「わたしの妹に、今日山で遇つたでせう」

と云つた。彼は一寸面喰つた。

「うん、遇つたよ。草刈籠を背負つてゐたよ」

と答へた。すると、すぐ、つゞけて、

「お祖母おばあさんも居たでせう」

と云つた。彼は笑ひ出した。そして女の顔を見返つた。女は、けろりと無邪氣な顔をして座

つた儘彼を仰いだ。その時女はすこし首を傾けて眼を心持ち丸くした。子供つばいなと彼は心でそれを賞味した。そして、

「お祖母さんはね……居なかつたよ」

ととんな返事をして又笑つた。

「お湯へすぐ、おはひり下さいまし」

女は、その戯談から全く離れた。そして彼の室を出て行つた。

彼はすぐ風呂場へ行つた。彼には、ずるぶん多端な用事が身に纏はりついてゐた。それをこの二三日中に片づけて歸宅せねばならない。彼は湯槽の中で、手足を長々と伸ばして、明日の仕事の行程を考へた。丁度その時である。風呂場のガラス戸をあけて、女が顔を出した。湯の加減を訊くのかと思ふと、それもせず、すぐ締めて勢よく向ふへ行つてしまつた。

その夜も丁度前夜に似た静かさであつた。殊にそぼふる雨は、庭先の木の葉にしめやかな音を立て、二階の雨樋の何處かの破れから落ちる水は、かけ算に似た聲をたて、如何にも山中に旅した趣を添へるやうであつた。

鮎は肥えて、いろ／＼の料理に用ひられてゐた。それが皆うまかつた。彼は舌鼓を鳴らして、盃をかさねた。お酌にはもちろんお藤がやつてきた。他の女達は向の座敷の飲客の方へ行つて騒いでゐるらしかつた。三味線の間に、どら聲で唄ふのがきこえた。併し距つてもゐるし、殊に今夜の彼には一向何の氣にもかゝらない他所の騒ぎであつた。

「さつき風呂場を覗いて行つたのはお前だらう」

「えゝ」

「お加減はいかがとか何とか云ふものだけ」

「でも、あなたが好い気持ちさうにはひつておいでよしたから、屹度お加減はいゝのだと思つたんです」

彼は面白いことを云ふと思つて高く笑ひ出した。女も之につれて笑ひ出した。二人はいかにも暢氣に賑かであつた。

「一體、どこの山の草を刈つてゐたんだつけね」

「信州です」

「信州の何處だ」